

に列せられ、此れより圖畫を板刻することを止め、専ら肉筆畫に従事す。最も意匠に長じ、種々の新案を出だし、又能く人物鳥獸の特性と其の情致の變化とを究め、これを數抹の略筆に表はせり。實に光琳一蝶以後畫道の創意者と謂ふべし。文政七年歿す。

歌川豐國 一陽齋と號す。歌川豐春に就きて浮世繪を學び、又英一蝶の筆意を慕ひ一家をなす。殊に俳優の肖像を畫くに妙を得、或は美人時世の嬌態を寫し、印本彩畫諸國に流行し、内外人これを求む。此に於て豐國の名聲一時に盛なり。門人亦良工に乏しからず。文政八年五十七にて歿す。

歌川豐廣 一柳齋と號す。一家の畫風を爲し。草筆の墨畫を上梓して俗に張交書と稱す。又豐廣一代の繪本頗る多し。文政十一年歿す。

葛飾北齋 初名は春朝、後ち宗理と更め、又北齋、辰政、戴斗、已老人と更む。勝川春章の門に入りて業を受け、又竊かに狩野某に就きて畫法を學び、又堤等琳の畫を慕ひ、又司馬江漢に就きて西洋畫をも研究せり。彼れが筆の勁健なるは、多くは等琳より得たる、其の畫祖雪舟の筆意に由れるものなり。北齋天縱の異才と多年の苦學とを積みて自家特得の畫風を創し、運筆縱橫、意匠豐富、生活上の實況を始め宇宙の萬般の諸顯象を曲寫し、一々其の妙を盡さざるなし。寛政享保の間、稗史小説の著作を兼ね、文化に互りて多く馬琴等が著作の挿畫を畫く。當時其の門に遊ぶもの極めて多く、其の弟子の夥多なる爲め、一々臨本を與ふるに遑あらざるが爲め、畫手本數十部を刻せり。北齋の名聲遂に遠邇に馳せ、蘭人の需に應じて毎年數百幀を畫き、以て其の國に贈るに至る。嘉永二年歿す、年九十。

安藤廣重 初め岡島林齋に就きて狩野風を學び、後ち豐廣の門に入りて浮世繪を學びて、殊に彩色の風景畫に巧なり。東海道五十三次都名所百景等を上梓して、大に世に行はる。遠景寫法の妙に至りては、他畫工の及ばざる所なり。安政五年六十二にて歿す。

歌川豐國 三代目豐國なり。香蝶樓又は五渡亭と號す。二代豐國の門人にて、俳優歌妓の似顔など巧に其の性癖風情を穿ち、錦繪又は團扇に畫き、大に世に行はる。又多く小説の挿畫を寫す。田舎源氏の如きよく細かに當代貴族社會の風俗室内裝飾等を眞寫せり。元治元年七十九にて歿す。

歌川國芳 一勇齋と號す。豐國の門人にて、文政の始めより次第に其の名を顯はし、筆力勇健にして、忠臣藏銘々傳、三國英勇畫傳など續きものの錦繪大に世に賞せらる。頗る意匠に富み、圖立に新奇を弄せり。文久元年歿す。年六十五。

明清畫派

祇南海 紀伊の人、天資偉逸、文藻凡ならず。木下順庵に就て業を受く。餘力あれば圖畫を作し、清人蕭尺木の畫譜に法り、其の他元明名家を規倣して一格を成せり。最も山水に長ず。蓋し本邦近古文人畫の祖にして、支邦南宗畫はこれより世に行はる。柳里恭、池大雅並に就きて畫法を問へり。寛延四年歿す、年七十五。

彭百川 尾張の人、寛延の頃京都に住す。此の時に當りて海内靡然として皆探幽の畫に嚮ふ。百川力めて元明の古蹟を規倣せり。本邦元明の南宋畫を作るもの南海百川を首唱と爲す。

熊代熊斐 字は淇瞻、緒江と號す。肥前長崎の人、世々譯官たり。少小より畫を好む。清人沈南蘋幕府の聘に應じて來る、緒江從ひて學ぶ。寫す所の花卉翎毛、賦色濃艶にして、其の筆致沈氏と

涇渭辨じ難し。蓋し近代寫實風の支那畫を學ぶもの熊斐を以て祖とす。安永元年六十一を以て歿す。

宋紫石 江戸の人明和中長崎に遊びて熊斐に學び後ち清人宋紫岩を師として其の姓を冒す。花卉翎毛を能くし又墨竹を善くす。一時世人の推す所と爲れり。其の子紫山亦畫を能くす。

伊藤若冲 京都の人なり。黄檗の伯珣に參して禪法を問ふ。初め狩野氏に學び後ち元明の古蹟を摸し兼ねて光琳の筆意を撫して更に一格を出す。其の圖奇怪にして著色穠麗なり。若冲常に鷄數羽を飼ひ晨夕其の形狀を諦視してこれを寫し靜動鳴啄の意態一々逼肖窮盡せざるは莫し。晩年深草石峰寺の側に寓し畫を以て斗米に換へ生計を營む。因りて自ら斗米庵と號す。

花鳥圖三十幅

御物

梅花錦鷄鳳凰二幅

京都 西本願寺藏

涅槃圖

京都 誓願寺藏

柳澤淇園 名は里恭大和國郡山侯の族なり。年少うして畫を嗜み元明の妙蹟を規し積年の研究遂に一家を成す。彩筆研麗にして鮮明水墨清潤にして雅韻あり。最も設色の法に精はし。淇園性豁達豪放小節に拘はらず人と爲り才藝に長じ文武を兼ね詩を善くし書畫に巧にして凡て十六種の技藝ありしといふ。甚だ客を好み貴賤雅客に論なく來るものは盡く引きて食客となし日々其の藝術を試み此れを以て樂となせりと云ふ。寶曆八年五十三にて歿す。

池大雅 名は無名霞樵九霞山樵三岳道者等の號あり。幼にして穎敏能く字を寫し又甚だ畫才あり。長ずるに及びて紀伊に適き畫法を祇南海に問ふ。南海藏する處の清人蕭尺木の畫譜を貽りて曰く子畫を學ばば宜しく文人畫を學ぶべしと。又大和に之きて設色法を柳里恭に問ひ多

く明清畫を摹し山水人物等皆其の蘊妙を極むるに至れり。人と爲り蕭散恬虛貧賤に安んじ寵辱に累はされず平生の行爲多く人の意表に出づ。常に閑居すれば其の妻玉瀾と絃を鼓し古曲を歌ひ悠々として清日を消遣す。故に其の畫く所高逸にして俗態を帶びず。

大島芙蓉 甲斐の人京都に住す。學博く群書を涉獵し又秦漢の篆法を參究して鐵筆精妙印聖と稱せらる。又畫を好み山水を能くす。元明の名蹟を規倣し自ら一格を出だす。氣韻頗る高し。池大雅韓大年と常に風流を俱にす。

望月玉蟾 京都の人初め土佐光成に學び後ち雪溪を師とす。又參するに古狩野を以てし遂に一家を成せり。後ち池大雅と交り畫格を一變して淡畫を創す。男誠齋玉仙等其の風を襲ぐ。寶永五年歿す。

興謝蕪村 字は春星夜半亭と號す。攝津の人なり。後ち京都に住し深く元明名家の遺蹟を慕ひ積年強學遂に名手と爲る。殊に山水に巧に雅韻沖澗會心の作は殆んど衡山伯虎に逼る。看者をして自ら身を其の境に置かしむ。海内畫工多く之れを宗とす。又俳諧を能くし洒落の畫往々自ら俳句を題す又一種の奇韻あり。天明三年六十八にて歿す。

蕭何追韓信、玄徳風雪訪孔明圖

京都 藤原源作藏

蕪村の筆にして第百八十圖は韓信其の言漢王に用ゐられざるが故に亡げ去るを丞相蕭何惜みて之れを追ひ止めんとする圖第百八十一圖は劉玄徳治國安民の道を問はんがために風雪を凌ぎて孔明を訪ふ圖なり。蕪村の特色は洒々落々たる一種の奇韻に存す。本畫の如き元明名家の風を帯びたるものは則ち別趣に屬するものたりと雖も而も構思結圖苟もせず曲さに古大家に沈潜して能く其の風神を得たるを證するに足る。

十時梅崖 多能にして詩文書畫皆家を成す。増山侯雪齋其の風采を愛し、遂に聘して儒官と爲す。寫す所の山水筆致清潤、氣韻灑然、塵俗の氣無し。

皆川淇園 京都の人、博聞強記、詩文を能くし、書畫に巧なり。淇園初め應舉に畫法を問ひ、應舉亦故實を淇園に問ふと。其の父某賞鑑を善くす。元明の名蹟に遇ふ毎に淇園をして臨摸せしむ。因りて技大に進みしと云ふ。

劍雲泉 肥前島原の人、幼時父に従ひて長崎に遊び、清人に就きて畫法を受け、巧に山水を畫く。筆致淡雅、氣韻曠遠なり。雲泉の畫を作るや、意思先づ定まるにあらざれば、筆を下さず、其の意に適するに至りては、長絹巨幅と雖も、一氣呵成す、或は日を経て成らざることあれば、姑く放心し、感興來れば再び絹素を掃ふ。初め京都に傲居し、後ち江戸に遊び、晩年越後新潟に寓す。此に至りて雲泉の名遠邇に震ひ、海内殆んど其の能畫を知らざるものなきに至る。文化八年五十三にて歿す。

野呂介石 紀州和歌山の人、畫法を池大雅、桑山玉洲に學ぶ。後ち清人伊孚九の筆格を規倣し、山水を能くす。専ら天然の山水を法とし、自得する所ありと云ふ。

渡邊玄對 江戸の人なり。山水に長じ、又花鳥を能くす。最も畫法に精し。

高久鶴崖 下野の人、文晁に就て學ぶ。中年に至りて大雅堂の遺蹟を慕ひ、遂に一家を成す。

其の畫最も山水に長ず。筆致沈厚にして、氣韻頗る高し。關東の南畫此の人を以て最となす。天保四年歿す、年四十八。

谷文晁 江戸の人、初め渡邊玄對及び加藤文麗を師として畫法を修め、傍ら古土佐様に私淑し、又狩野光定に就きて其の傳を受け、又英一蝶を摸す。時に清邊南岳、江都に來り、大に賞せらるゝ所となる。亦其の風を慕ひ、後ち宋元明諸家を參取し、遂に南北を混じり、和漢を合して別に一家を爲せ

り。常に好みて富士山を寫し、寫山樓と號す。田安家に仕へて畫師となり、又白川樂翁集古十種を作るや、文晁多く其の圖を寫すと云ふ。晩年に及びては、筆大に熟し、減筆を用ゐ、胸臆に任せて縦横揮灑す。或は壽老の圖數百幅を作り、以て同好に頒つ。其の著はす所書畫觀甲、松島眞圖、日本名山圖會、歷代名畫譜、寫山樓畫本、本朝畫纂、畫學大全等あり。天保十二年歿す、年七十八。

公餘探勝圖二卷

子爵 松平定教藏

石山寺緣起二卷

近江 石山寺藏

百鶴百鳥百鹿圖

同 同

山水對幅 (第百八十二圖)

伯爵 徳川達孝藏

文晁傑作の一にして、青綠金碧を施し、筆力最も精健なるを見るべし。

田能村竹田 豊後竹田の人家、世々岡藩の醫員たり。竹田幼にして學を好み、才思秀拔、藩主特に擢て、儒員に補す。江都に至り、畫法を谷文晁に問ひ、又京都に來り、村瀬栲亭に就きて修學す。遂に致仕して、文雅風流を旨とし、山水の間に優遊し、又頼山陽、篠崎小竹等と詩酒徵逐す。竹田素より才藝多く、詩文を善くし、畫圖に巧み、又喫茶香道の技に至るまで、討究せざるはなし。然れども得意のものは、畫にして、運思深く、落筆熟し、近代南畫の名手と稱せらる。著はす所の書少ならず。而して畫を論ずるもの特に、山中人饒舌あり。天保六年歿す、年五十九。

北山寒巖 山水人物を能くす。世馬孟熙と稱するもの是れなり。其の先き清人馬良の子なり。一時谷文晁と名を齊うす。惜むらくは中途にして天せり。

渡邊華山 三州の人、世々三宅侯に仕ふ。少小より大志あり、群書を涉獵し、兼ねて洋書を読み、又畫を能くす。華山祿薄くして家貧し。而して性至孝、父母に事ふること甚だ努む。一日以爲ら

儒を學びて天下に爲すあらんとす、父母の飢寒を如何せん。姑らく忍びて畫に従事し、以て供給に充てんと。乃ち谷文晁、宋紫山、金子金陵の諸家に従ひて畫法を討究し、積年強學遂に諸家を折衷し、古法に則りて一家を成す。筆力勁健にして圖様奇拔なり。其の門に遊ぶもの頗る多く、福田半香、椿山、山本琴谷等最も著はる。嘗て半香、椿山二人に謂て曰く、本邦傳ふる所の淡畫眞蹟殆だ罕なり。余を以て視れば山水は王石谷を以て第一とし、花卉は則ち惲南田を以て第一とす。山水は半香の長ずる所、花卉は椿山の長ずる所。各其の得意の處によりて勉むべしと。華山固より鑒識に精はし、書畫數幀を藏む、皆積年心を用ゐて蒐聚する所なり。悉く擧げて之れを藩侯に獻ず。胸襟の洒落たる知るべきのみ。天保三年擢てられて年寄格に進む。心を民政に用ゐる救治する所多し。又外交の忽せにすべからざるを察し、高野長英、小關三英等と西洋の事情を探り、書を著はして幕府を諷す、これが爲め忌諱に觸れ、天保十年の夏獄に下る。其の禍の藩主に及ばんことを恐れて、終に自殺せり。

浦上春琴 詩文に巧に最も畫に長ず。山水花卉翎毛能くせざる所なし。春琴少小より煙霞の癖あり、遍ねく名山勝水を跋涉し、又多く古名蹟を貯へ、用意多年筆墨練熟を得たり。初め江戸に僦居し、後ち京都に移住す。此の時に方りて名聲海内に馳す。人と爲り顯敏にして、義氣に富み、其の交る所頼山陽、篠崎小竹等江湖の名士に乏しからず。世往々合作の詩畫を存す。

中林竹洞 尾張の人にして、京都に住す。初め宮崎筠圃の墨竹を規倣し、後ち元明の畫法に由りて山水花卉一家を爲す。竹洞人と爲り溫雅簡樸言に訥にして、畫に敏なりと稱せらる。

山本梅逸 尾張の人なり。明清先哲の遺蹟を追慕して、妙趣を得、遂に一家を爲す。當時中林竹洞と名聲を争ふ。其の畫く所の山水人物、花鳥皆巧ならざるはなし、最も花卉に長ず。設色最も

く儒を學びて天下に爲すもあらんとす父母の仇を如何せん。姑らく忍んで其後、
 に究てんも、勿も谷文見家重海金子を殺すに從ひて其法を討究し、
 し古法に則りて一家を成す。其古の遺法にして其の門に傳ふるもの
 香梅橋山由本琴谷等最も著はる。皆て半香梅由一人に傳ふる所の遺法を
 なり。余を以て祖れば由本は正吾谷を以て第一とし、其法を傳ふる
 半香の長ずる所花弁は梅由の長ずる所。各々の得意の地に入りて
 に精はし、其書數帳を藏む皆氣平心を用ひて草紙する所なり。其
 谷の酒齋を著るべきのみ。又保正等撰てられて其書は其の心を
 し。又外交の忍せにすべからざるを察し、高野長英小淵三右衛門
 幕府を諷す、これ其の爲す所なり。其の書は其の心を以て、
 終に自殺せり。

第百八十二回 谷文見 山本梅逸

浦上春琴 詩文は巧に最も是に長ず。由本花梅傳を能くせざる所は、
 の癖あり通ねく名山勝水を遊歩し又多く古有蹟を好へ用意多
 儼居し後ち京都に移住す。此の時ばかりて名聲海内に馳す。人
 の交る所頼山陽巖崎小竹等江湖の名士に乏しからず。世に其
 中林竹洞 足張の人にして京都に住す。初め宮崎爲圃の器竹を
 して山水花卉一家を爲す。竹洞人と爲り温雅簡淡言に諷にして
 山本梅逸 足張の人なり。明精先哲の遺法を祖せり。其の書は



精麗なり。

岡田半江 伊勢津の人にして、大阪に住す。畫を好みて米山に學び六法を精究し、又明清南畫の名蹟を臨撫し、遂に名手と爲る。筆致溫雅清潤にして、輕佻浮薄の弊なし。

椿椿山 幕府の吏にて、人と爲り言に訥にして行に敏なり。學識あり、兼ねて書畫を善くす。遂に官を辭し揮灑を専らにす。初め金子金陵を師とし、後華山に學び、草蟲花鳥に長ず。而して最も揮南田を慕ひ、其の作る所骨法端正にして、然かも研麗なり。當時良工、其の右に出づるものなし。兼ねて肖像を善くす。肖像一派華山之れを草創し、椿山に至りて其の精を極むと云ふ。

貫名海屋 晩に菘翁と號す。阿波の人、來りて京都に住し、儒を以て家となす。書畫共に妙にして、多く山水を作る。冷澹幽雋、固より賞鑑に入るべし。

谷文一 文晁の養子なり。畫法を父文晁に受けて名手に至る。其の會心の作に至りては、父に譲らざるものあり。然れども惜むらくは壯年にして歿せり。

立原杏所 常陸水戸の士なり。人と爲り風流にして書畫篆刻に巧なり。初め月僊及び文晁を學び、又古今の名蹟を咀嚼して遂に北畫を宗とす。其の畫を作る落想奇異、其の圖様人の意表に出づ。又能く書畫の眞贋を鑑別し、百一を失はざりしと云ふ。

喜多武清 江戸の人、文晁に學び、後ち探幽を追歩し、畫格を一變す。人物花鳥に巧にして、彩色最も麗美なり。

大西椿年 江戸の人、初め南岳に學び、後文晁に従ふ。山水人物花卉翎毛を寫す。筆致輕淡、又能く魚介を畫く。

圓山派並に四條派岸派

圓山應舉、通稱主水初め仙嶺と號す。丹波國桑田郡穴田村の人其の家業を以て業となす。幼時父母に田圃の間に隨ふ毎に竹片木頭を取り草木鳥獸等を畫き以て樂となす。其の郷に一商賈あり脂粉を鬻ぐを以て業とす應舉屢其の家に遊び一日脂粉の袋に畫く。或者之れを見て奇なりとし齋らし歸りて其の主龜山侯に獻ず侯之れを觀て大に嘆賞す。是れより畫名始めて著はる。因りて京都に遊び石田幽汀に従うて學ぶ。幾もなく技大に進み錢舜舉仇英の畫風を慕ひ又諸家に出入し最も實物の寫生を力め巧に人物花鳥を寫す。天明年中に至りて畫品中正を得圓山派の基く所は蓋し此の年間にありと云ふ。時として内庭に召され或は徳川氏の命を蒙り畫さしもの少なからず。應舉畫技の妙天性に出で加ふるに多年練磨の功を積み諸流派の窠臼に據らず自ら機軸を出だし山水人物花卉翎毛魚介等皆眞に逼まり精采法あり活動力あり遂に温雅明麗なる倭様の新生面を開けり世に之れを圓山風と謂ふ。門人能畫の士頗る多く爲めに關西の畫風一變し今日に至りても其の流を汲むもの畫工中十の四五を占む洵に近世の巨匠と謂ふべし。寛政七年歿す年六十三。

- 瀑布巨幅 近江 圓滿院藏
- 七難七幅圖 同 同
- 四條河原納涼圖 同 同
- 客殿張附山水圖 讃岐 金刀比羅宮藏
- 雪松圖屏風一雙 男爵 三井八郎右衛門藏
- 保津川眞景屏風 京都 西村總左衛門藏
- 蓬萊仙奕圖 京都 東本願寺藏

- 鯉魚水鳥圖十二幅 侯爵 伊達宗徳藏
- 西王母龍虎圖三幅 大阪 鴻池善右衛門藏
- 四季富士山圖四聯幅 兵庫 川崎正藏藏
- 鷄圖衝立 京都 八坂神社藏
- 中雪松左右鳴圖 (第百八十三圖) 大阪 村山龍平藏
- 雪松は三井家の雪松に似鳴は伊達侯の水禽に類し應舉の畫を見るべき好標本なり。
- 牧童騎牛圖 (第百八十四圖) 侯爵 松方正義藏

寛政中應舉晩年の作にして老熟自在の致筆端に現はるゝを看る。
 松村月溪 又吳春と稱す京都の人初め畫を大西醉月に學び後ち蕪村を師とす。蕪村歿して後ち應舉の畫格を喜び就きて法を受けんことを請ふ。應舉之れを辭して遂に莫逆の友となる。是に於て研究怠らず専ら寫生を旨とし蕪村應舉の畫法を折衷し後ち一家の流を爲す。世之れを四條風と謂ふ。其の居京都四條街に在るを以てなり。其の寫す所の山水人物花卉翎毛皆妙ならざるはなく筆力敢て應舉に譲らず。唯市井の間に居り多く市民の需に應ぜるを以て品位に缺くる所なきを得ず。然れども蕪村を學びて俳歌を善くし衿懷洒落にして常に酒を嗜み醉興に乗じて揮灑す。其の作る所滑稽畫少なからず。文化八年歿す年六十。

- 宇治川合戦圖二幅 男爵 三井八郎右衛門藏
- 樓閣山水圖 京都 勝島喜一郎藏
- 花鳥屏風一雙 滋賀 古望仁兵衛藏
- 山水圖二幅對 (第百八十五圖) 大阪 藤田傳三郎藏

一は雪景、一は雨景なり。吳春得意の作なるべし。

長澤蘆雪 城州淀の人、應舉に従うて畫を學び、遂に新意を出だす。畫技斬新、適かに諸徒の上
に在り、應舉門の巨擘と稱せらる。畫く所概ね豪放洒落なるもの多く、運筆縱横、奇思横生し、往々人
を驚かす。惜いかな、年四十五にして寛政十一年に歿す。

動物畫卷 (第百八十六圖)

廣島 保田八十吉藏

獸類鳥類魚類の畫卷にして、手本として畫きしものなるべし。運筆最も輕妙にして、生采に
富む。

駒井源琦 京都の人、應舉に従うて學び、遂に其の奥を窺ふ。筆致溫雅にして、賦色極めて妍麗な
り。山水人物花弁翎毛等並に巧にして、應舉に逼肖す。但し應舉に比ぶれば、彩筆纖弱にして、精采
に乏しき所あり。

渡邊南岳 京都の人、應舉に學びて畫を能くす。殊に人物花鳥に長ず。蓋し應舉門人中筆力の
勁健を以て稱せらる。

森祖仙 攝津西宮の人、或は云ふ肥前長崎の人なりと、大阪に住す。性畫を嗜み好み、て猿を畫
く。楮畫は太だ罕なり。畫風圓山四條より出づ。嘗て筆硯を携へて山中に入り、或は宿を幽寺に
投じ、或は食を樵家に求め、溪を涉り山を攀ぢ、人寰を離れて猿界に遊び、眞形を窺ふもの殆んど三年
竟に其の神妙を究め、筆々活動、情姿盡く眞寫を得たり。

森徹山 森祖仙の義子なり。大阪に住す。應舉に學びて人物花鳥を能くす。後ち稍、畫法を
變ず。

西村楠亭 京都の人、應舉に従ひて畫を學び、能く其の法を得たり。

一は雪景、一は雨景なり。吳春得意の作なるべし。

長澤蘆雪 城州淀の人、應舉に従うて畫を學び、遂に新意を出だす。畫技斬新、適かに諸徒の上に在り、應舉門の巨擘と稱せらる。畫く所概ね豪放洒落なるもの多く、運筆縱橫奇思橫生し、往々人を驚かす。惜いかな、年四十五にして寛政十一年に歿す。

動物畫卷 (第百八十六圖)

廣島 保田八十吉藏

獸類鳥類魚類の畫卷にして、手本として畫きしものなるべし。運筆最も輕妙にして、生采に富む。

駒井源琦 京都の人、應舉に従うて學び、遂に其の奥を窺ふ、筆致溫雅にして、賦色極めて妍麗なり。山水人物花卉翎毛等並に巧にして、應舉に逼肖す。但し應舉に比ぶれば、彩筆纖弱にして、精采に乏しき所あり。

渡邊南岳 京都の人、應舉に學びて畫を能くす、殊に人物花鳥に長ず。蓋し應舉門人中筆力の勁健を以て稱せらる。

森祖仙 攝津西宮の人、或は云ふ肥前長崎の人なりと、大阪に住す。性畫を嗜み、好みて猿を畫く。楝畫は太だ罕なり。畫風圓山四條より出づ。嘗て筆硯を携へて山中に入り、或は宿を幽寺に投じ、或は食を樵家に求め、溪を涉り山を攀ぢ、人寰を離れて、猿界に遊び、眞形を窺ふもの殆んど三年、竟に其の神妙を究め、筆々活動情姿盡く眞寫を得たり。

森徹山 森祖仙の義子なり。大阪に住す。應舉に學びて人物花鳥を能くす。後ち稍畫法を變ず。

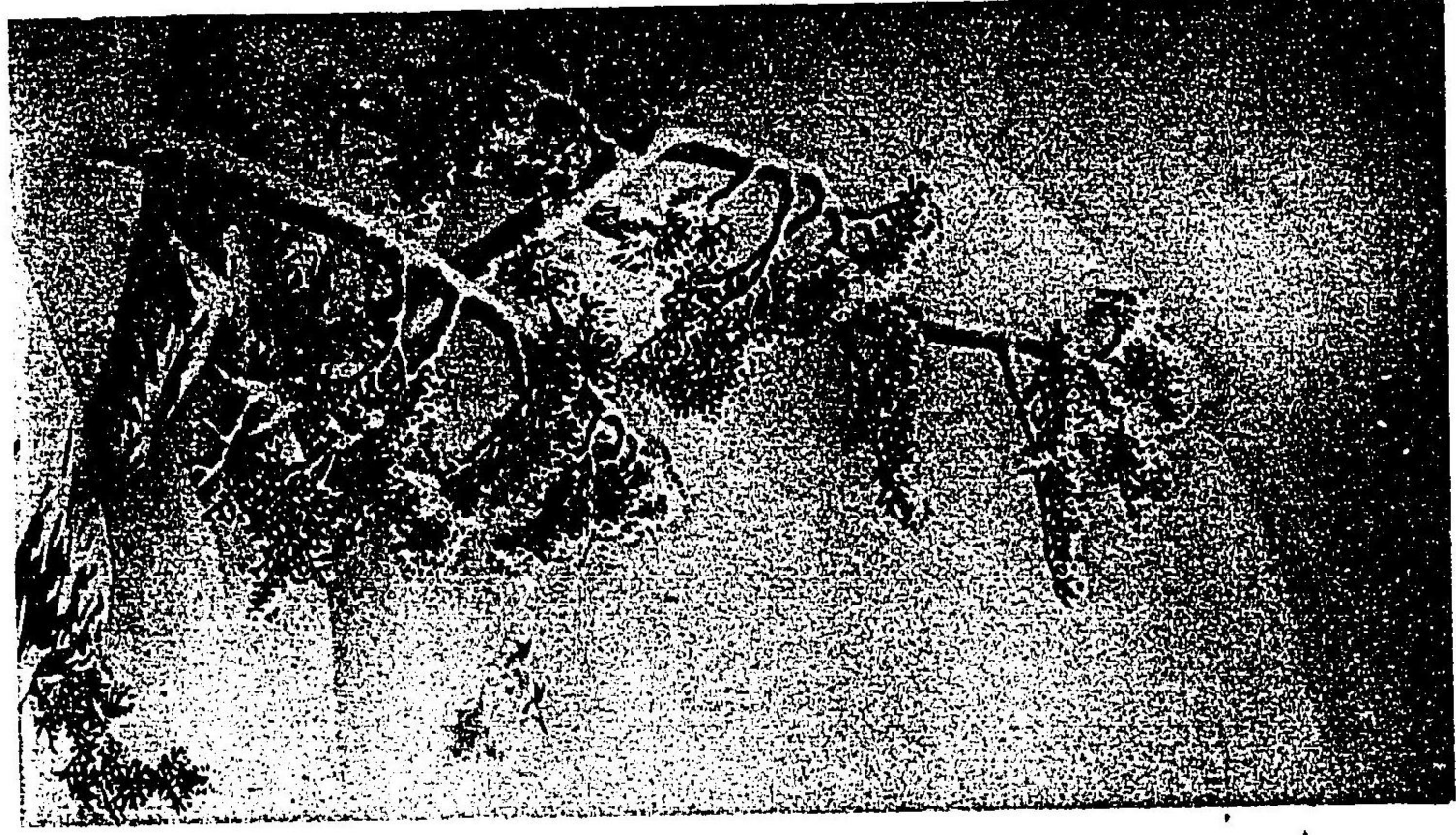
西村楠亭 京都の人、應舉に従ひて畫を學び、能く其の法を得たり。

第百八十四圖 (蘭山麓遊樂牧童騎牛圖)



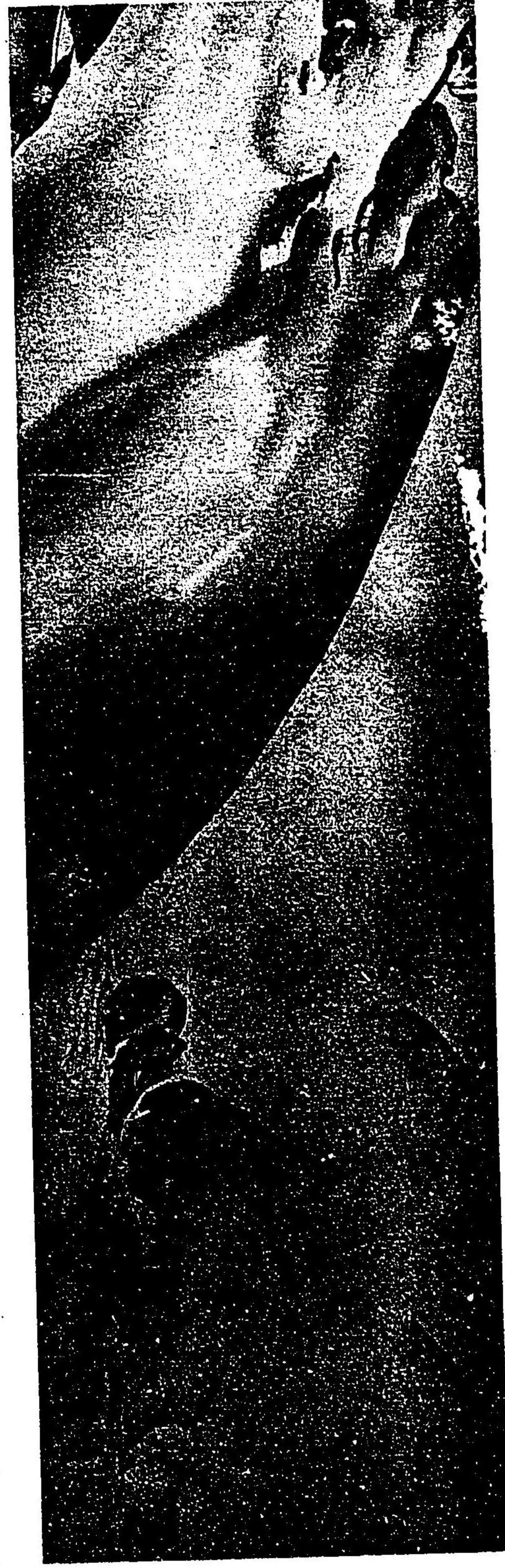
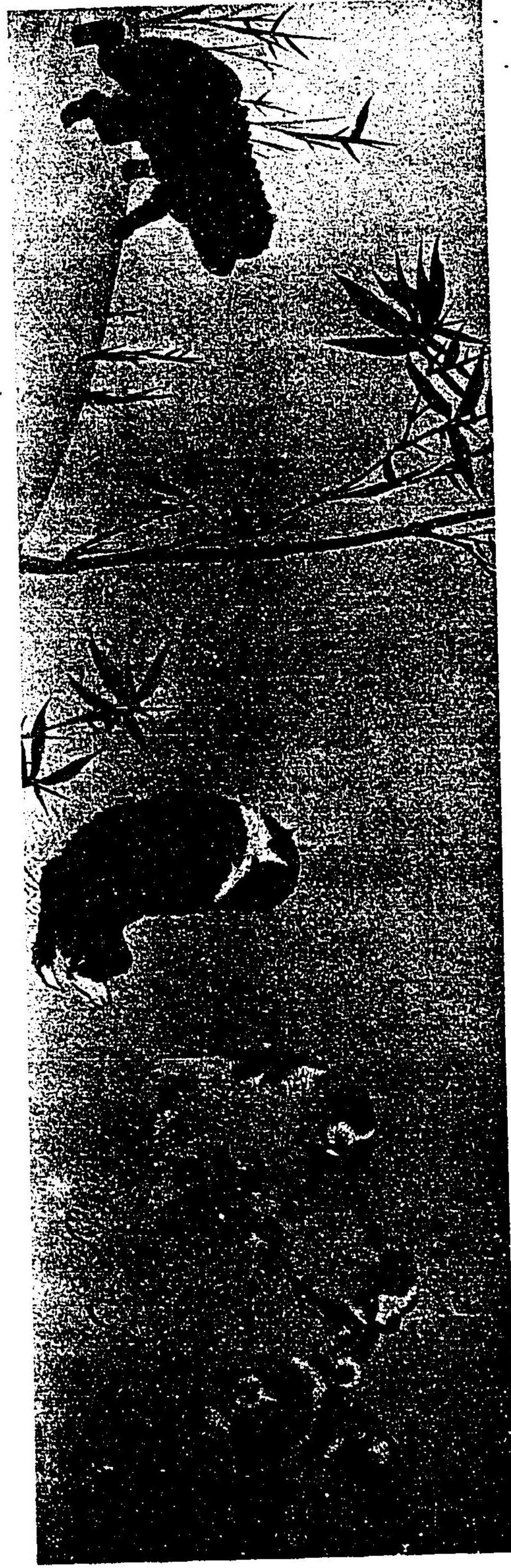
華百人十四圖(加山頭恐我外魔轉中國)

第百八十五圖 松村月溪筆山水圖二幅對



景自八十五圖（景廿八對筆山水圖二景投）

(卷繪物助筆書畫釋其) 圖六十八百第



圖百八十六 (昆斯亞亞華印的餅卷)

吉村孝敬 京都の人、畫を應舉に學びて能く花鳥を寫す。

奥文鳴 京都の人、能く應舉の畫法を得たり。

山口素絢 京都の人、應舉を師として邦俗婦女及び裸畫を善くし、妍麗にして輕妙、頗る世に行はる。

白井直賢 應舉に學びて裸畫を善くす。最も畫鼠に巧なり。

岸駒 加州金澤の人、初め有栖川宮に仕へ、後ち越前介に任ぜらる。晩年官を罷め北岩倉の里に退隱す。初め沈南蘋を慕ひ翎毛花卉を畫く、筆致勁健にして頗る新氣を帶ぶ。其の最も長ずるものは動物なり。天保九年九十にして歿す。男岸信婿、岸良、義子連山等、其の畫風を襲ぐ。これを岸派と稱す。

東寺食堂天井雲龍

京都 東寺藏

龍虎圖

鎌倉 圓覺寺藏

絹本着色孔雀圖

京都 西村總左衛門藏

虎圖屏風一雙

同 下村正太郎藏

僧月僊 伊勢國寂照寺の住持なり。法務の餘力専ら畫筆を操る。一時名聲四方に振く。其の寫す所應舉の筆格を規し、參するに雪舟の風趣を以てす。揮灑に及びてや、夜以て日に繼ぎ、これが爲めに費を致すこと巨萬に至る。多くは其の畫を賣り、財を貪るを以て譏らる。晩年に至り、山門を建て佛閣を修し、廣く經疏を購ひ貧民を賑救す。是に於て疑の疑ふもの始めて皆服せりと云ふ。

東洋 仙臺の人、法眼に叙せらる。京都に住して狩野梅笑に畫法を學び、後ち應舉月溪と交り、

其の格を變ず。

鈴木南嶺 江戸の人なり。京都に住し、東洋に學び、山水人物花鳥に巧なり。

大西椿年 江戸の人、初め南岳に畫法を學び、山水人物花鳥草蟲に巧なり。後ち文晁の畫風を慕ひて稍、其の風を變ず。

松村景文 吳春の弟なり。寫生を力めて精研し、淡采艶美にして墨痕豊かに潤ひて、鳥の類殊に美なり。景文法を家兄に學ぶも、自ら一種の機軸を出だし、潑墨の妙は家兄と雖も及ばざるに至る。天保十四年六十五にして歿す。

岡本豊彦 備前の人、京都に住し、月溪に従ひて畫を學び、勤勉遂に一家を成す。山水人物草花禽獸能くせざる所なし。名四方に噪し、殊に山水に長ぜり。

河村文鳳 京都の人、岸駒を師とし、又諸家に出入して一格をなす。人物畫に長ず。筆力雄健、又邦俗人物を善くす。

小田百谷 海僊と號す。長州の人、京都に出て畫を月溪に學び、大に其の妙を得。後ち元明の古蹟を規倣し、畫格を一變す。山水人物花鳥の類、設色精麗にして、水墨に至りては更に韻致あり。

柴田義董 備前の人、京都に住し、月溪を師として良工の名あり。義董陽に四條の形似を取り、暗に明人の意に倣ふ。運筆洒落、殊に人物畫に於て妙を見る。

山脇東暉 京都の人、初め月溪に學び、後ち其の格を變ず。人物に巧なり。又唐畫に倣ひ、道釋の像を畫く。筆情纖勁、墨趣秀潤なり。

田中日華 岡本豊彦に學び、山水花卉を能くし、豊彦門下の巨擘と稱せらる。横山華山 京都の人、岸駒を師とし、又吳月溪に従ひて差、其の格を更む。山水人物花鳥皆之れ

を能くせり。

望月玉川 望月玉蟾の孫なり。畫法を岸駒に問ひ、後ち吳春の畫風を慕ひて、大に其の格を變じて一家を成せり。

第四節 彫刻

徳川氏執政以來、四海昇平に屬せしかば、干戈を見ざるに殆んど三百年、各種の彫刻は此の昌平の時代に伴ひ、華奢を幫くる裝飾品に應用せられ、其の發達頗る從來と趣を異にせり。嘗て織田豊臣二氏を経て、佛教非常に衰微せしが、徳川氏政權を握るに及びて、一旦失ひし土地及び寺祿を復し、寺院を創建したり。殊に家網足利氏の故事に准へて、禪刹を建立せんと欲し、道徳優長の僧を明に求む。僧隱元因りて本邦に來りて、寺を山城の宇治に創せり。これを黄檗山萬福寺といふ。禪の一派にして、臨濟正宗といふ。所謂黄檗宗是れなり。

綱吉又貞享三年に關東に於て、徳川氏に縁故ある淨土宗の佛寺十八を定め、檀林とせり。此の如く寺院擁護の道興りたるを以て、一度荒廢に屬したる寺院も、再び盛なるに至れり。隨ひて寺院の裝飾佛像の彫刻亦隆盛を極めたり。其の佛師の名あるものを擧ぐれば、寛永年間に僧但唱、法眼定喜あり。寛文年間に法橋康乘、左京康祐あり。延寶年間に湛海律師、清水隆慶あり。貞享年間に僧松雲、元祿年間に淨慶佛師、民部、同左京、享保年間に法橋高山實曆に駒井柳朝、安永に僧愚傳等あり。然れども佛師は唯其の祖先の遺法にのみ彷徨して、絶えて新意匠の作なく、復昔日の大作名技を留めざるのみならず、其の作る所のものは、徒らに金銀珠玉を施して、燦爛俗目を喜ばしむるに過ぎざりしなり。建築裝飾等に至りては、大に時の需用を増し、殊に日光の東照宮を始めとして、江戸の寛永寺、増上寺、京都の本

願寺等の如き専ら彫刻を以て裝飾せられたり。其の最たる人々を擧ぐれば左甚五郎の一流あり。又後藤氏島村氏石川氏等は代々江戸に住し、宮彫を以て名あり。又岡本友輔は三河の産にして京都に住し、彫刻に妙を得て、其の作品の現存するもの少なからず、京都祇園祭に用ゐる各種及び観音山欄間の翔鶴等これなり。能樂は當代の中葉より益々盛なりしを以て假面の作も頗る精巧なるものを出だすに至れり。其の作者の名手を擧ぐれば、寛文年間越前出目派に満永あり。満茂、満總、満真、満忠、其の業を襲ぎ、何れも其の技を擅にせり。正保年間近江井關派に家重あり、其の作頗る精巧にして、其名殊に高し。承應年間大野出目派に滿府あり、滿喬、滿矩、滿猶、康久、康吉、康隆、其の業を襲ぐ。又満永の養子に満昌あり、後ち離縁して兒玉と云ふ。面打兒玉派の祖なり。朋滿、能滿は其の家業を繼承せり。此の他に弟子打と稱するは、何れも是等の派より出でたるものにして、其の作亦少なからず。大和榮滿、滿上、滿、筑後等は其の名あるものなり。又神樂其の他舞面等に於ても、其の作の巧妙なるもの亦少なからず。根付彫は亦當代の中葉より益々盛となり、各種精巧の品を出だせり。概して根付彫は技術の點よりも意匠を主眼としたり。在昔根付は専ら佩墜を用ゐて印籠の紐につくるを例とせしが、後世に至りては殊に之れを作りて巾着又は煙艸入の紐にも用ゐることゝなれり。而して其の意匠の材料は頗る多趣にして、神仙妖魅佛陀人物を始め禽獸、蟲魚花實及び山水風景各種紋様の類に至るまで、實物と想像物とを網羅し盡さざるはなし。

抑、根付彫刻の始めは詳かならざれども、寛永の頃本阿彌光悅、野々口立圃といふものありて、根付を作りたりといふも、其の作品固より多からざるべし。其の後寛文天和間に於ては、印籠巾着を佩提するもの多く、隨ひて根付も亦流行せんとするの形勢に赴けり。而して當時は支那の製品を貴重愛賞すること深く、遂に其の餘波凡ての器にまで及び、支那風を模擬して酷肖するを以て妙技と爲すに至

れり。又當時根付の製作をなすものは、即ち佛師彫刻師樂器師蒔畫師等が、本業の餘間に之れを作りて、其の需用者に供したりしに過ぎざりしが如し。其の根付専門の職工ともいふべきもの未だあらざりき。降りて元祿より正徳に至りては、根付の流行彌々盛んならんとするの趨勢なるを以て、其の作者は亦丹精を凝らして工夫を練るに汲々たりき。隨ひて其の技術も頓に發達して、頗る名品を製出するに至れり。需用者も亦通常一般の根付を用ゐるを歡ばずして、圖樣形式を考定し、圖接をなして作爲せしめたるを以て意匠考按の上に於て一大進歩をなせりといふ。此の時に當りて奈良の佛工遺像の餘暇を以て能人形及び小假面の根付等を作り世に出だせしかば、大に流行して遂に京阪奈良地方より盛に仕込根付を出だすに至れり。享保より寶曆以後に至りては、根付を愛賞するもの益々多く出て來れり。その主なる原因は煙艸入を用ゐるによりてなり。抑、當時諸侯及び旗士等が刀劍裝飾に美を盡して之れを帶用するを以て榮とせしが、巨商富豪に至りては、之に代ふるに煙草入を腰に提げ、以て其の粹美を競へり。而して其の作品の偶々吾が意に合ふものある時は、大金を惜まざりて之れを購求せりといふ。斯る形勢なれば、根付も亦優品奇物にあらざるよりは、嗜好に投ずる能はざるを以て、自ら其の作者をして専ら意匠を凝らして高雅なるものを製出するに至らしめたり。而して寧ろ細工の精巧美惡は敢て問はざりしに似たり。當時作品の大體を見るに、其の圖は古歌の意を按じ、又は俳諧の旨を撰びて、有名なる畫伯に囑して下繪を畫かしむる等、注意周到頗る其の考按に苦慮せり。これよりして大に美術的作品を現はすに至り、明和より享和に至りて其の流行一層劇甚を極めたり。此に至り始めて根付彫刻師なる専門家出づ。就中吉村周山、小笠原一齋、和泉屋友忠等妙手と稱せらる。其の他法眼舟月、壽貞、雲樹、洞院幣丸、爲隆、岷江、松琅齋、出目右滿、河井頼武、清兵衛等亦名あり。此等の専門家が苦辛慘憺の餘に製出されたるものなれば、其の意匠の斬新なる、其の刀法の自在なる、

根付としては未だ曾て見ざる處のものなり。文化文政より以後に至りては、奢侈の弊風益々甚だしく、其の材料に多く貴金屬寶石を用ゐるに至れり。當時の名工には樂只軒半加、山口友親、鳴鶴齋法實、神子齋龍珪、森川杜園、長井蘭亭、宮坂白龍、山口岡友等あり。それより明治維新の後に至りては、此等の工藝品は頗る衰頽に歸せしが、此の根付の製品は追進進化し來りて、終に象牙彫刻の置物となりたり。今日象牙美術の發達を來たせしは、主に此の根付等より變化し來りたるものならんか。

人形彫刻は奈良京都に於て頗るよく發達したり。其の奈良より出づるを奈良人形といふ。こは舊と春日若宮の祭典に用ゐる島臺其の他田樂法師が用ゐる笠の飾りにせし尉姥狸々などの彫刻より始まりしなるべし。此の彫刻物は岡野保伯に至りて其の彫法を改めて、尉姥の外、能人形、雛人形、鹿の香合等を刻して、大に世人の賞翫を受けたり。而して岡野保久に至りて其の技益、精巧となりたり。又飛驒の一刀彫といふものあり。奈良人形に倣ひて彫刻したるものにして、文化頃の人亮長より始まる。其の刻する所のもの、主に鳥蟲の類なりとす。又嵯峨人形、加茂人形、淺草人形等あり。此等の人形漸次發達して愈々精巧となり、所謂生人形等の彫刻物を見るに至れり。其の作者の名あるものを擧ぐれば、竹田縫之助、松本喜三郎、秋山平十郎、鼠屋五兵衛等なり。五兵衛の子孫今猶人形彫刻を家業とせり。

又器物に畫様を彫刻せるは吉野彫、象眼、切透等ありて何れも世人の賞翫する所となる。友月、如泥、宗一喜八半五郎等は、當時何れも小細工彫刻に精妙を極めたり。又徳川氏中葉以後より鐵筆彫といふものあり。瑞松、萬峯、玉琴、鐵齋等其の名高し。又竹石、堅木彫等ありて、文人裝飾の流行に伴ひて、益々隆盛を極めたり。又篆刻は當代の初頃よりありけれども、中年に至り最も盛なりき。大年芙蓉等其の技最も卓絶なるものなり。

種類並に作法

當代の佛像は多く木彫にして、偶、銅像あるも殆んど見るに足るべきものなし。其の作法に至りても、亦前代と異なる所なきが如し。建築裝飾は當代に至りて一層需要を増し、宮彫、欄間彫等の一種の専門家を出だせり。これ等は互に其の技を競ひ、意匠を凝らして製作に従事せり。其の用ゐる所の材は主に堅木にして、花卉、鳥獸、紗綾、雲形等を彫刻して、或は木地のまゝなるあり、或は重彩を施したるものありて、最も精巧を極めたり。假面は能樂の流行と共に徳川氏の中年以後最も隆盛にして、前代に其の比を見ざる所なり。假面彫刻には夫れ、流派ありて、鉦の使ひ、方彩色の方法、其の他種々の秘法によりて、各、其の派を異にせり。而してこれを作るには固より木を用ゐたれども、間、紙貼、拔、或は煉製のものあり。根付は其の種類甚だ多く、玉石、紫檀、黒檀、鐵刀木、竹及び象牙、鹿角等より、瑪瑙、琥珀、珊瑚等の材を用ゐたり。而して宇治人形の根付の如きは其の地に産する茶樹を用ゐたりと云ふ。又人形彫刻は主に木を用ゐる又鋸屑を煉りて之れを作れり、これを煉人形といふ。何れも多くは重彩にして、意匠亦高雅なり。又嵯峨人形、加茂人形、淺草人形等ありて、嵯峨人形は木彫に重彩を施し、金箔を押したるなど、如何にも美麗なるものなり。加茂人形は柳彫の肌理、込みとて、頭部四肢を精巧に彫りて、衣服は押繪様の裂にて貼りたるものなり。又淺草人形は杉之舎親之等より始まりて、頗る精巧なり。此の人形は彫刻よりも寧ろ彩色に妙を得たるものなり。又飛驒の一刀彫は水松樹を用ゐて、一刀にて彫りたる如く、刀數を用ゐずして作りたり。此等のもの漸次進化して、後には愈々精巧に趣くと共に、生人形となり、人間の真相を寫して生けるが如く彫刻し、後には機械を据えて四肢、眼口等の働く様に作りたるものも出て來れり。此の他吉野彫、象眼、切透等は、各、其の名の如く、吉野彫は鎌倉彫に倣ひたるもの、吉野より出づ。一刀彫は奈良人形に倣ひたるもの、飛驒より出づ。其の彫法は緻密

なる刀を用ゐずして、一刀に強く彫りたるものなり。象眼は地質を彫り凹め、他の材を用ゐて鑲入し、種々の畫様を作りたるをいひ、切透は地質を彫り透したるをいふ。其の他鐵筆彫、堅木彫、篆刻等亦各、其の彫法ありて、其の流派も亦少なからず。

作家並に作品

佛工

湛海律師、字は寶山、寛永六年伊勢國安濃郡に生る。書畫を善くし、又彫刻に巧に、造像の技術に至りては、眞に其の妙を究めたり。延寶七年大和國膽駒山に上り、般若窟を開き、元和元年八月初めて不動尊像を彫刻せり。これより彌勒、虚空藏等の尊像を鑄造して、雲上閣に、又聖天と役小角の像を鑄て之れを崑洞中に納め、又一刀三禮して十一面觀音の尊像を刻み、常念觀音院を建て、之れに安置せり。總て湛海の作品の秀てたるものは、おもに膽駒山寶山寺に藏せり。其の作頗る纖麗にして精巧なるもの少なからず。

清水隆慶

京都の人、湛海律師に従ひ佛像を彫刻す。其の作甚だ巧妙なり。法眼に叙せらる。

松雲

元京都の佛工なり。嘗て豊前の羅漢寺に詣うて羅漢創立の事を思ひ立ち、貞享年中江戸に下り、淺草花川戸に住みて彫刻を始め、元祿八年本尊並に五百の羅漢を作る。寶永七年七月歿す、年六十三。

假面工

河内大塚家重、備中椋の子にして、近江に住せしが、後ち江戸に移住せり。假面彫刻に妙を得て、其の名甚だ高く、天下一河内の燒印を用ゐて之れを誦せり。又一種粗にして柔からる彩色法を考究せり、世俗これ河内彩色といふ。又刷毛を用ゐず、布に繪具を付して打ち付けたるものあり、

打彩色といひて、之れも亦家重の新按なり。正保二年歿す。

能面般若 (第百八十八圖)

帝室博物館藏

般若は井關河内の作にして、嫉妬の相を刻したるものなり。眼、球、齒牙等には金屬を鑲入して、一層瞋恚の狀を表現せり。道成寺及び黒塚などいふ謠曲には、此の假面を用ゐるなり。

能面十六 (第百八十九圖)

帝室博物館藏

十六は少年貴公子の相を刻したるものにして、品位甚だ高く、彩色亦優麗なり。敦盛等には、此の假面を用ふ。これ亦河内の作になれるものなり。

能面大喝食 (第百九十圖)

帝室博物館藏

大喝食は童子の相を刻したるものにして、これ亦井關河内の作なり。其の彩色は粗にして、柔かに、一種穩和なる作風なり。

大和眞盛、河内大塚家重の弟子にして、初め南都の社人なりしが、後ち武州江戸に住す。寛文十二年歿す。天下一大和の燒印を用ふ。

狂言面武惡 (第百九十一圖)

帝室博物館藏

武惡は大和眞盛の作にして、彩色は能く河内に類似す。而して小面の如き穩和なる女面は、眞盛の特色なれども、強きものにも亦傑作少なからず。茲に掲ぐる武惡面の如きは、其の作豪壯にして頗る秀作なりといふべし。

滿昌、元休滿永の養子にして、其の技河内に亞ぐ。然るに故ありて、滿永の家を辭し、京都に歸りて、兒玉近江と稱し、禁裡の御用を勤めたり。これより天下一近江の燒印を用ふ。初め滿永に従ひ、専ら其の風を摸せしが、後ち河内の風を慕ひしかば、其の作品の變化頗る妙味あり。寶永元年歿す。

す。其の子長右衛門朋滿家を繼ぐ。

宮田筑後 兒玉近江の弟子にして、京都に住す。宮田筑後の團扇形焼印を用ふ。

能面長靈じみ見 (第百九十二圖)

帝室博物館藏

長靈じみ見は宮田筑後の作にして、善く靈見の相を刻出せり。これ筑後作中の秀逸なり。

洞白滿喬 滿庸の男にして、初め近江の弟子となり、近江の死後江戸に下り、助左衛門の養子となりて、其の家を繼ぐ。正徳五年歿す。

洞水滿矩 滿喬の子にして、滿毘といふ。出目滿毘の焼印を用ふ。享保十四年歿す。

根付工

野々口立圃 親重と稱し、松翁と號す。京都の人なり。幼より畫を好み探幽の弟子となり、後ち宗達を慕ひて其の風を加味したり。又彫刻に巧にして、克く根付を作る。意匠頗る高雅にして、技術も又輕妙なり。蓋し繪畫の力多きに居る。また雛人形に妙を得たるが故に雛屋立圃といふ。寛文九年九月晦日歿す、年七十五。

吉村周山 攝津大阪の人なり。曾て狩野の畫風を慕ひ、定信に就きて學ぶ。技藝大に進み、殊に設色に妙を得たり。遂に法眼に叙せらる。又彫刻に練達して根付を作る。其の製作は意匠斬新にして、着色優麗なり。而して其の圖按多くは山海經及び列仙傳圖中最も奇怪なるものを取りて、己れが意匠を加へ之れを彫刻せり。其の作品も亦頗る多し。明和安永頃の人なり。

仙人根付 (第百九十三圖)

大阪 平瀬龜之助藏

黃楊木彫仙人は吉村周山の作にして、彩色濃かに、意匠亦頗る新奇なり。衣紋行雲流水の如く、口を開き目を張りて、跣跣たる姿勢見るものをして、悽愴たらしむるものは、これ周山の作風

にして根付彫刻家中鏘々たる作者なりとす。

仙人根付 (第百九十四圖)

帝室博物館藏

雲中仙人の根付は周山の作にして、其の意匠巧なるのみならず、面部は頗る精細にして、眉毛の如きは透彫となし、最も能く彫刻したるを見るべし。

鬼根付 (第百九十五圖)

帝室博物館藏

鬼の鏡に對する根付は、金工濱野政隨の作にして、意匠斬新、刀法亦老練にして、頗る風雅の作なりとす。其の傳記は金工政隨の所を參看すべし。

樋口舟月 攝津國難波の産にして、明和年中の人なり。性畫を好み、て狩野の流派を學び、殊に花鳥山水を能くし、法眼に叙せられ、畫を以て業となす。又彫刻に巧みにして、克く根付の製作を爲せり。其の作品密ならず、粗ならず、一種の趣を具備し、韻致品格に乏しからず、大に世に珍賞せらる。茲に於てか本業を廢して、専ら根付を彫刻し、江戸に下りて之れを業とせり。其れより子孫相繼ぎて舟月の名を襲ひ、其の業を世々にせり。

小笠原一齋 紀伊國和歌山の生れにして、安永頃の人なり。彫刻を能くし、根付を作るを以て業となす。又名工の稱あり、其の作品は即ち意匠綿密、刀法微細にして、且つ力あり。實に當時の根付彫刻家を凌駕するに足れり。其の用ゐる所の材は象牙及び鯨牙を用ゐたるもの甚だ多く、彩色のもの少し。

狸半化根付 (第百九十六圖)

大阪 平瀬龜之助藏

木彫半化け根付は小笠原一齋の作にして、獸心にして人間らしき面を假裝せる意を寓したるものなり。故に左半身は未だ狸の形狀なるも、右半身は顔面衣服下肢に至るまで變化して、

人間となりたる様を刻したるものなり。意匠最も雅にして、且つ趣味ありといふべし。和泉屋友忠、京都の生れにして天明年中の人なり。彫刻を能くし牛の根付を刻みて頗る妙を得たり。彫法極めて緻密にして活氣あり、其の作品は江戸に於て大に聲價あり、隨ひて摸造甚だ多きも、鑑識者は一見して其の眞偽を判別することを得べし。

臥牛根付 (第九十七圖)

東京 大關某藏

牙彫臥牛の根付は頗る寫生的のものなり。牛の彫刻物は友忠の最も得意のものなりといふ。

爲隆、尾張國名古屋町に住し、天明頃根付彫刻を以て名を擅にす。其の作品は人物花卉多く、これを裝飾する文彩に繪具を用ゐずして、浮彫を用ゐんとし、苦辛慘憺の餘、遂に妙域に達するを得たり。是れ實に根付彫刻に一新機軸を出だしたるものといふべし。

岷江、伊勢國津の生れ、天明年中の人なり。彫刻を能くし、根付に巧なり。其の作品精巧綺麗にして、達磨の根付の如きは眼瞠活動するが如き考按をなしたり。岷江も亦一派の作家と云はざるを得ざるなり。

白藏主根付 (第九十八圖)

東京 大關某藏

白藏主の根付は岷江の作にして、衣は柞の木を用ゐ、面部並に杖は象牙を用ゐたる、穩雅の作にして、頗る見るべきものなり。

三輪、江戸の生れにして天明頃の人なり。性彫刻を嗜みて、根付を刻するを以て樂とせしが、其技頗る上達して江戸根付の始となる。其の意匠は支那に需めずして、主に日本に取れり。加之ならず根付は從來黄楊木を用ゐるもの多かりしが、其の磨滅し易きを患へて、柞、櫻木等を用ゐたり

第九十九圖
(井國河内作能面十六)

第一百圖
(宮田筑後作能面長懸懸見)

第一百四圖 (吉村周山作仙人根付)

第一百八圖
(井國河内作能面般若)

第一百九圖
(井國河内作能面大鳴食)

第一百十三圖 (吉村周山作仙人根付)

第一百十七圖
(古源助作能面高柳)

第一百二十一圖
(大和真盛作能面武墓)

第一百十五圖
(濱野政隆作鳥根付)

第一百十六圖
(小笠原一齋作雪中化粧付)

といふ。

小兒反暎根付 (第九十九圖)

東京 宮川長二郎藏

柞彫小兒の根付は三輪の作、左手に狐面を隠し、右手にて反暎し、之れを求むる人を揶揄するさまにして、意匠面白し。

猿根付 (第二百圖)

東京 大關某藏

黄楊木彫刻の猿猴は三輪の作にして、頗る寫生に成り、且つ其の精神を穿ちたる最も精妙の作品なり。

上林牛加、美濃國岩村の産、文政年中の人にして、奈良人形の優雅なるを愛し、之れに倣ひて茶樹を用ゐて茶摘人形の根付を彫刻したり。頗る雅致ありしかば、時人稱して宇治人形といふ。其の名聲甚だ高し。而して其の彩色濃密にして、優麗を旨とせり。

龍珪、天保年中の人、江戸に住し、根を以て業となす。用刀澁滯の痕なく、甚だ活潑なり。而して染象牙を研究して、頗る辛酸を嘗め、遂に能く其の法を得て、これを根付に應用したり。其の寫生的蜂蟬の如きは、其の斑紋を染め分けて、真に迫るが如き妙品を出だせり。此の他尙ほ薄肉の彫刻物に妙を得たり。

布袋根付 (第二百一圖)

東京 金田兼次郎藏

黄楊木布袋の根付は龍珪の作にして、刀法最も精巧なり。こは仰首天空を望み、兩手を背に組み、て徜徉する態にして、緒を兩手の間に通ずるが如く作りたるは、其の意匠最も妙なりとす。

蛤根付 (第二百二圖)

東京 金田兼次郎藏

此の根付は大小の蛤五個を連接せるものにして、配置最も佳なり。蛤の斑文は茶褐色にし

て真に這り頗る精緻なり。染牙はこれ龍珪の創意にして、殊に其の妙を得たり。

山口友親 竹陽齋と號す。京都の人にして彫刻を家兄松民に學び頗る其の技に達す。後根付師となり、克く動物を造る。殊に人物を刻して最も妙趣を現はせり。刀法緻密にして活氣あり。著色も亦穩當にして一時盛んに世に愛賞せられたり。明治六年七十七歳にして歿す。

醉奴根付 (第二百三圖)

東京 齋藤嘉助藏

醉奴草鞋を結ぶ所の根付は、友親の作にして用材は等しく象牙なり。其の意匠巧にして、且つ刀法鋭し。友親は根付工中翳々たるものなり。

丁稚根付 (第二百四圖)

東京 齋藤嘉助藏

これ亦友親の作にして、丁稚藥料を粉盞にする態なり。牙彫にして彫法穩かに、且つ品位卑しからず。

杉之舎親之 姓を福島といひ花所隣春の子なり。江戸淺草に住し、畫を父に習ひて其の技大に進む。性亦彫刻を好みて能く根付を刻す。意匠甚だ巧に、形狀彩色共に優雅なり。蓋し畫才あづかりて力ありといふべし。人其の人形を稱して淺草人形といふ。蓋し奈良より出づるを奈良人形といふが如くなるべし。明治十五年七月歿す、年四十六。

杜園 奈良の産にして、安政頃の人なり。幼より畫を好みて夙に名聲高かりしが、後に岡野保伯に就て彫刻を學び數年ならずして妙所を極む。意匠綿密用刀輕微にして、設色は極めて濃厚ならざるも、妍美愛すべし。殊に模造に妙を得て、其の遺品も亦少なからず。

長井蘭亭 出雲の産安政年中の人なり。京都に住す。性頗る豪放なるも、彫刻の技術に於ては最も微妙を極め時の名工と稱せらる。其の刀法は繊細にして意匠綿密、動物花鳥風景等の根付

第百九十八圖 (江作白藏主根付)

第二百圖 (三輪作松根付)

第百九十七圖 (和泉風友忠作 臥牛根付)

第百九十九圖 (三輪作小兒反鹿根付)

第二百四圖 (山口友親作丁稚根付)

第二百二圖 (龍連作蛤根付)

第二百五圖 (信玉齋作松根付)

第二百三圖 (山口友親作醉奴根付)

圖六百二第 (付根豆刀作齋玉樓)

第二百一圖 (龍理作布袋根付)

を作る。蓋し人物を刻するを以て特得とせるものに似たり。嘗て仁和寺の宮より命ぜられて、胡桃に山猿千疋を彫鑿せるに、頗る精微纖巧にして殆んど肉眼を以て識別すること能はざりしといふ。遂に能技を以て法橋に叙せらる。

宮坂白龍 京都祇園に住す。象牙根付を彫刻するを以て名あり。其の作品多くは獸類にして虎豹猿猴の屬つぶさに其情性をつくせり。當時蘭亭の人物白龍の獸類を稱す。

山口岡友 安政年中の人京都東山に住し、根付を製作せり。其刀法は輕妙にして、意匠亦鄙野ならず。常に花卉小禽の圖様を好みて、専らこれを作爲せり。其用材は多く柞又は象牙を用ゐたりといふ。

懷玉齋 名を正次と云ひ大阪の人、根付彫刻を以て聞えたる人なり。其の作品は半山又は玉山等の圖様を應用して、頗る精巧なる作品を出だし、當時大に世に賞玩せらる。今を距る數年前歿せり。

猿根付 (第二百五圖)

大阪 水谷鶴松藏

牙彫猿の根付は、懷玉齋の刀になれるものにして、頗る纖細巧緻の作なり。而して全體に寫生を基としたり。其の柿實を手にし、右下手を上げ、口を開き、他を眺むるは、眞に猿猴の性質を表現し盡せりといふべし。當時其の名の噴々たる亦故なきにあらざるべし。

刀豆根付 (第二百六圖)

東京 大關某藏

懷玉齋作刀豆の挿根付は、其の帯を以て緒を帯び、豆身を以て帯に挿む所とし、これに蝸牛を添彫して寫生的の妙を現はせり。

岡野保伯 寛政享和頃の人にして奈良に住す。岡野家を繼ぎて九代目松壽といふ。専ら能

人形の根付を作る。着色亦穩かなり。而して都て保伯の作品は圖様形式に意を用ゐたりしかば、品格を具へて巧妙なり。又根付の外に内地香合等の彫刻物も少なからざりしといふ。

岡野保久 文化年中の人にして、九代目松壽の子なり。彫刻を父に學びて其の技藝に練達し、能樂人形其の他種々の根付を彫刻したり。刀法輕微配色亦穩當にして、奈良彫中の妙手と稱せらる。

松田亮長 飛驒國高山町の人家世々製箸を以て業とせり。幼時吉田亮朝に就きて彫刻を學びしが、壯年に及んで出藍の譽あり。後遂に彫刻師となれり。嘗て奈良人形を見て其の着色の甚だ濃厚にして、刀痕を塗扶し、技術の巧拙を見る由なきを以て、遂に自ら意匠を練り、刀法を練磨して、飛驒の名木水松樹の天然斑を利用し、彩色を假らずして、鶴鳩龜蛙等を作れり。之れを飛驒の一刀彫といふ。

松本喜三郎 肥後熊本の人形師にして、安政の始め江戸に来る。途次奈良に遊び、東大寺二王の像を見て其の傑作に感じ、三日去る能はざりしといふ。それより江戸に來り、淺草奥山に於て生人形を彫刻したるに、意匠斬新にして殊に人體の組織に注意せしかば、人形はさながら生けるが如く、一時都下に喧傳して、錦繪に寫して之れを販ぐに至れり。其の巧妙なる推して知るべきなり。

第五節 美術的工藝

金 工

元和偃武の後は諸金工の如き武家の御抱となり、重祿を受くるありて、悠々其の技術に従事して、自然の工夫と熟練とを積むことを得たり。又上下一般泰平に慣れ、刀劍の利鈍はとまれ唯裝飾にのみ

意を用ゐしかば、其の裝劍彫金工の如き、前代に比儔なき精美を盡したりき。寛文元祿の盛世に至り、横谷宗珉等出て、家風以外に畫風とて畫の筆意を彫るの巧を始め、専ら民間の需用に應じて町彫を起し、又奈良風彫とて太き鑽を用ゐて一種の風趣ある圖様を彫るの風起り、各門人より門人を出だし、支流より支流に分れ、其の工人終には幾百千を以て數ふるに至り、江戸の名ある家のみにて三十餘戸に達せり。其の他京都大阪及び江州濃州或は加州水戸等に至りては、其の數料るべからず。

後藤家に於ても九代目程乘までは、其の品高く、一見家風なるを識別することを得れども、十代目廉乘の時代元祿の頃よりは、横谷派に制せられて、自然畫風を混じ來れり。京都の後藤一乘に至り、遂に全然畫風を取り、一家を立つるに至れり。寫生の畫風にのみ流れ行くが中に、嚴として家風を守りしは、寛保より寶曆に際せる津尋甫のみなりき。元來後藤家の鑽法たる精細緻密に傾くことを卑しめたり。是れ裝劍具は日常衣帶手指の觸るゝが爲めに、長年月を経過するに従ひて磨滅の恐れあるを以て、大に茲に鑑みるありて、鑽は凡て粗朴に、且つ夥多の鑽を用ゐることなく、僅に造鑽滑剝及び透鑽の三種に止めしものなり。故に鑽痕に一種の妙味を出だせしが、世に寫生風盛に行はるゝに至りては、遂に此の鑽法全滅するに至れり。

又當代の甲冑工は前豊臣時代より漸く衰微し、明珍及び早乙女家等ありといへども、世の泰平なるが爲め其の必要を見ず、却て其の技術を他の需要に向ひて應用し、鐵或は銅の打物を以て日用品を造り、精巧の作を出だせり。

鍔工は彫金工と共に甚だ盛にして、埋忠重義は慶長中より幕府に仕へ他に多く埋忠氏を冒すものも出てたり。又長州萩の鍔工も亦其の業甚だ盛にして、中井金子岡本岡田中原井上等の數家相並びて其の業を營めり。又細透の鍔工小田原正次の後も子孫其の業を繼ぎ、其の他多くの名手を出だせ

り。

當代の鑄物は茶道流行の盛なると共に、最も釜師の業をして繁忙ならしめたり。前代以來の名工たる名越家昌及び大西淨林は、寛永頃共に京より江戸に下りて幕府に仕へ、名越大西の兩家東西に別れて新作を出だせり。寛永時代金谷五郎三郎あり、種々の銅器を作り、着色等に意を用ゐ、其の業を子孫に傳ふ。下りて文化文政の頃村田整珉出づ。蠟型鑄造に於て近來獨歩の名匠と稱せらる。同時に京に龍文堂ありて精巧の作を出だし、又佐渡に本間琢齋ありて文房具及び煎茶具に妙を得たり。

種類作家及び作品

彫金工

後藤家並に弟子家

後藤顯乘、後藤七代目にして、榮乘の弟なり。是より先き寛永年間加州侯より祿を受く。凡て活動せる彫刻の風にして、最も武者の彫刻に妙を得て、後藤家中興の祖と稱せらる。寛文三年歿す、年七十八。

熊谷敦盛小柄 (第二百七圖)

侯爵 前田利嗣藏

多少磨滅せし處あるも、顯乘得意の作なり。

後藤即乘、八代目にして、六代目榮乘の男なり。鑄法顯乘の風ありて剛健なりしが、惜むべし三十二歳を以て寛文八年歿す。世に祐乘、光乘、即乘三人を稱して三作といひ、又一に光乘、即乘、通乘を三作と稱す。何れにも即乘を加へたるは、其の技術の非凡なりしが爲めなり。

頼政鶴退治目貫 (第二百八圖)

子爵 稻垣長敬藏

後藤程乘、後藤九代目にして、七代目顯乘の男なり。其の彫刻光乘の趣ありて、鑄痕頗る深く

強けれども、甚だ麗美にして品位あり。延寶元年歿す、年七十。

狂獅子目貫 (第二百九圖)

侯爵 前田利嗣藏

純金彫刻にて、此の外に小柄筭あり。何れも圖様活動せり。

義經弓流小柄 (第二百十圖)

侯爵 前田利嗣藏

大形の小柄にて、緻密の作なり。

應圖小柄 (第二百十一圖)

侯爵 前田利嗣藏

後藤廉乘、十代目にして、八代目即乘の男なり。其の作程乘に比すれば、鑄の風粗けれども、自ら雅致を有せり。寶永五年八十二歳を以て歿す。長壽なりしが爲め作品多く、又多くの門人を養成せり。此の人より居を江戸に移し、又家風に多少横谷の畫風を交ふるに至れり。

後藤通乘、十一代目にして、七代目顯乘の孫なり。彫刻華麗にして、廉乘よりも細密なり。三作の一人に數へらる。當時横谷宗珉の作世に行はれて、家風將に壓倒せられんとす。茲に於て元祖の風を一變し、畫風をも加ふるに至れり。享保六年歿す、年五十八。

紅葉鹿小柄 (第二百十二圖)

侯爵 前田利嗣藏

色畫にして、彫刻鮮巧なり。

後藤壽乘、十二代目にして、通乘の子なり。たゞ家の技を墨守せるのみ。寛保二年歿す、年五十五。

後藤延乘、十三代目にして、光孝と云ひ、壽乘の子なり。其の鑄太く粗し。往々上作のものあるは、下彫師に戸張富久といふものあり、頗る妙手にて、其の者の作なるべしといふ。此の時代武家の進物及び引手物等には、小刀柄、筭及び目貫等の贈答盛に行はれ、爲めに家風作品に光孝の極銘せ

るもの多しといふ。天明四年死す、年六十四。

後藤桂乘 十四代目にして彫法光孝よりも劣れり。享和四年歿す。年六十五。

後藤眞乘 十五代目にして彫刻桂乘よりも亦劣れり、後藤家の衰微茲に至りて極まれり。

野村正時 後藤徳乗の門弟にて、宗徳と號す。延寶七年死す。此の家の彫刻の風は阿波彫の如くに金色粲然として華麗なるを主とす。

野村正則 意徳と號す。寶永五年死す。彫刻甚だ巧にして、鑽痕甚だ強し。

野村正矢 友喜と號す。其の作金色の濃厚なるを用ゐ、上手の聞えあり。阿州藩に招かれて彫工となる。享保七年死す。野村氏は正矢の後正吉、正道、正忠、正次、正光等相繼ぐ。

津尋甫 鑽法は野村正道に學び、純然たる家風を以て立つ。當時畫風奈良風の盛にして、本家の彫刻阿波彫の體を具ふるも、至りて高尚にて世に賞せらる。寶曆十二年六月年四十二にして歿す。

箭目貫 (第二百十三圖)

赤銅作なり。

東京 今村長賀藏

奈良氏並に弟子家

奈良利輝 奈良本家の祖にて周防と稱す。寛永元年幕府へ召さる。

奈良利治 利宗の子にして、宗有といふ、利壽の師なり。其の製作山水花鳥の類多く、人物少し。其の技清楚にして氣力あり。

奈良利永 利治の子にして、知閑と號す。土屋安親の師なる辰政及び乘意の師なる壽永等の

第二百八圖
(後藤即業作
政隆退治目貫)

第二百九圖
(後藤即業作
狂獅子目貫)

第二百十三圖
(津尋甫作
箭目貫)

第二百五圖
(土屋安親作
辰政目貫)

第二百十四圖
(石野政常作
秋草鶴目貫)

第二百十六圖
(千野政常作
千鶴目貫)

第二百十八圖
(二王目貫)

第二百十九圖
(宗光行孫
宗光作二王目貫)

(柄小盛教谷器作乘顯藤後)圖七百二第

(柄小流弓經義作乘程藤後)圖十百二第

(柄小圖畫作乘程藤後)圖一十百二第

(柄小鹿葉紅作乘通藤後)圖二十百二第

第二百十六圖
(大森秀作
辰政目貫)

第二百十九圖
(一宮長常作
辰政目貫)

第二百二十一圖
(河野春明作
鷹目貫)

第二百二十二圖
(石野政常作
孔雀目貫)

第二百三十圖
(大月光興作
雲龍目貫)

圖五十二百二第
(作秀英森大
實目貫)

圖七十二百二第
(實目貫作則久塚運)

圖八十二百二第
(實目貫作寛良本岩)

(柄小屋葛作辰正其奈)圖四十百二第

(柄小波月作隨政野濱)圖七十百二第

(柄小坡井作環宗谷横)圖十二百二第

(柄小鶴作克序地葉)圖二十二百二第

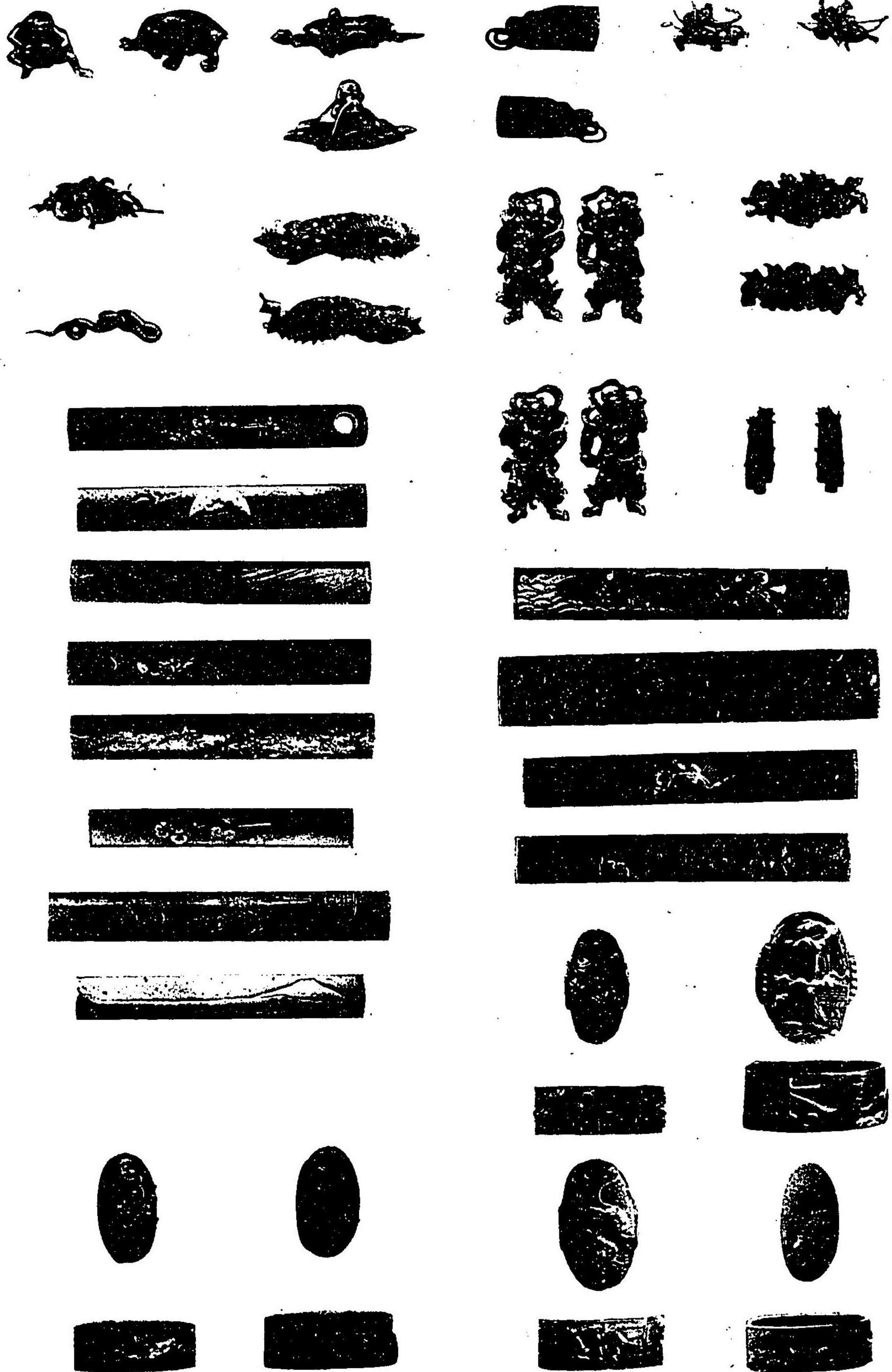
(柄小1 鏡茂加作守政野細)圖二十三百二第

(柄小化造作乘一藤後)圖三十三百二第

(柄小女原大作禪武江器)圖四十三百二第

(柄小土宮作竹如上村)圖五十三百二第

第二百三十一圖
(岡本尚茂作
仙入藤目貫)



二百二十五圖
(大森英義氏藏)

二百二十一圖
(大森英義氏藏)

二百十六圖
(大森英義氏藏)

二百八圖
(大森英義氏藏)

日本書紀同英義氏藏也

二百二十一圖 (大森英義氏藏) 野村正時 後藤清家 弟に宗徳と號す。延寶七年(一六三九)の家の彫刻の風は阿波彫の如くに金色祭然として華麗なる主とす。 (大森英義氏藏)

野村正時 意徳と號す。寶永五年(一七二八)に浪井なる里に生れ、其の父は浪井の豪傑なり。其の父は浪井の豪傑なり。其の父は浪井の豪傑なり。 (大森英義氏藏)

二百十六圖 (大森英義氏藏) 赤銅作なり。 奈良氏並に弟子家 奈良本家の祖にて、防と號す。寛永元年(一六二四)幕府へ召さる。 (大森英義氏藏)

二百八圖 (大森英義氏藏) 奈良利類 奈良本家の祖にて、防と號す。寛永元年(一六二四)幕府へ召さる。 (大森英義氏藏)

二百二十五圖 (大森英義氏藏) 其の技術進にして氣力あり。

師なり。

奈良宗利 利永の子、小左衛門と稱し、圖様働きあるもの多し。

奈良利光 宗利の子、宗閑と號す。鑽太く、圖様働きあり。賞翫すべき作多し。七十二歳にて歿す。

奈良正長 利永の門人にして、正春と銘せり。其の風奇麗にして力あり。薄に蟠螂又は秋の野など殊にしほらしく上品なり。此の人の彫琢は疎密を兼ねて其の技よく鍛錬したるものなり。

奈良正敷 正長の弟子にして、江戸より大阪に移り住す。螭龍の彫刻に妙を得て一派をなせり。

以上挙げたる人々を古奈良といふ。鑽太く、圖様何れも古雅なり。

葛屋鏝 (第二百三十六圖) 東京 前田貞醇藏

古奈良の作にて、圖様古雅なり。 東京 今村長賀藏

鐵地に象眼を施せり。

奈良利壽 太兵衛、江戸本所に住す。奈良利治の門人にて、利永にも學べりといふ。利壽は古奈良新奈良の中間に立ちて、家風及び畫風以外に一機軸を出だし、奈良家の三作中第一位を占め優に奈良一流の代表者として推さる。人物に花鳥に總て妙を得、其の鑽強くして働あり。勇壯の氣溢れて、然かも騒がしからず。實に妙工といふべし。元文元年十二月十四日、齡七十にして歿す。

大森彦七鏝 (第二百三十七圖) 東京 清田直藏

利壽の傑作品にして、肉高く刀剛く、然かも雅朴の趣あり。大森彦七は足利尊氏の臣にして

武勇の士なり、彦七曾て途に佳人に逢ひ、負うて川を渉る、女化して鬼となり、彦七を害せんとす、彦七劍を抜きて之れを斫るといふ。即ち圖に現はせしものなり。

農夫圖鈔 (第二百三十八圖)

帝室博物館藏

眞鍮製にて崖下を透彫にして、肉合甚だ巧なり。

奈良利壽 二代目にして、初代利壽に似たる所ありて、鑲痕周到綿密なるは、古今其の比なかるべし。且つ親切なる彫法にして、初代よりは穩雅なり。明和八年死す。

杉浦乘意

奈良利壽の弟子にして、一蠶堂永春と號す。江戸に住せり。乘意は肉合彫の祖とも稱すべく、奈良三作の第二に位する名工なり。圖様は唐畫を原として、意匠を立てたる如く、其の鑲剛直にして、しかも細密の所にまで注意し、自ら風致を具ふ。寶曆十一年九月二十四日歿す。

鐘植圖鈔 (第二百三十九圖)

伯爵 田中光顯藏

素銅にて、肉合彫なり。

土屋安親

奈良利壽の弟子、辰政の門人なり。羽州庄内の人にして、東雨と號す。其の作利壽に似たる所あれども、別に家風を兼ねて一派の刀法を創意し、奈良三作の一に數へらる。其の彫風高雅にして、風流を旨とす、たとへば光琳の如く、一種飄逸にして、妙境に至れるものなり。延享元年九月二十七日歿す。年七十五。

土屋安親 二代目にして、初代安親の子なり。其の彫風父に似て見分け難く、只銘は父よりも大きく、安字堅に長し。

牧場圖鈔 (第二百四十圖)

帝室博物館藏

烏銅地、畫は高肉にて、雲を透彫にせり。

雪笹縁頭 (第二百五圖)

東京 今村長賀藏

豪健なる作様なり。

濱野政隨 奈良利壽の弟子にして、彫強くして自ら清爽の氣象現はれたり。師の風を學び得て、終には一派の彫風を起し、多くの末流を出だす。唯鑲奈良三作に比ぶれば、稍下品を免れず。

明和六年十月廿六日歿す。

千鯉目貫 (第二百十六圖)

大阪 平瀬龜之助藏

千鯉の頭にて、鐵作なり。

月波小柄 (第二百十七圖)

大阪 平瀬龜之助藏

月は象筈、波は片切彫にて、大に力あり。

波に鳥圖 (第二百四十二圖)

大阪 平瀬龜之助藏

濱野矩隨 政隨の門人にして、師風を學び得て、却て師よりも穩かに奇麗に細密なり。肉合は乘意の風あり。矩隨の大作として傳ふべきは、天明中天徳寺の雲州侯廟前石玉垣中門の青石扉へ彫刻せる十六羅漢とす。下繪は榮川法師の畫く所なり。門人頗る多し。

曾我夜討鈔 (第二百四十一圖)

伯爵 田中光顯藏

岩間政慮 初め遠山直隨の門に入り、後に濱野誠信等に從ひ、又奈良利壽及び濱野政隨の押形を臨摸して學ぶ。終に其の精巧のものに至りては、政隨にも敢て劣らずといふ。故に世人呼びて政隨坊と異名するに至れり。又家風の彫工町田盛重と懇親なりしかば、家風をも知ることを得たり。多年苦學の功成りて終に人物或は能面及び動物の類、先人の未だ成さざる新奇の趣を創意するに至れり。天保八年八月十四日歿す。年七十四。

横谷氏並に弟子家

横谷宗與、京師の人にして、江戸に下り、正保年中幕府より扶持を賜はりて、御彫物師となる。横谷彫の祖にして、世に祖父宗與といふ。其の彫刻は後藤の家風を學び、殊に祐乗の趣を會得して、當世に應じ、意匠を加へたるものにして、鑽法最も力あり。元祿三年十二月十七日死す。

横谷宗知、父宗與の後を續ぎて幕府に仕ふ。貞享四年死す。

横谷宗珉、名は友常、遜菴と號す。貞享年中江戸に來り、横谷宗知の養子となり、幕府に仕へしが、元祿年中病の爲め幕府の扶持を辭して後藤家以外に町彫を創む。町彫とは専ら民間に在りて人の需に應ずるの意にして、後藤の家彫に對して起れる名稱なり。當時畫工の大家狩野探幽に依り、或は英一蝶に交りて下圖を求め、始めて一の畫風毛彫を創立して、一家をなせり。其の圖様の新規なる、其の技の精妙なる、蓋し祐乗以來の大家とも稱すべし。又片切彫も従前なきには非ざれども、宗珉に至り始めて妙味を加ふ。享保十八年八月六日歳六十四にて歿す。

二王目貫 (第二百十八圖)

東京 清田直藏

素銅製にて、名作なり。其の右(第三百十九圖)なるは菊岡光行の模造なり。

東坡小柄 (第二百二十圖)

東京 今村長賀藏

横谷宗與、宗珉門人横谷宗壽の二男にして、宗珉の養子となる。鑽の風は能く宗珉を會得して劣らず、少しく溫和なり。其の作に兩種あり、一は宗珉と見まがふもの、一は純然たる宗與の作是れなり。安永八年六月二十八日歿す。

柳川政次

柳川派の祖にして、横谷祖父宗與の門人なり。享保六年二月十五日死す。

柳川直政

政次の子にして、江戸神田に住し、初め吉岡氏を師とし、後ち宗珉に學ぶ。頗る上手

第二百三十六圖 (宗與正政作葛屋障)

第二百三十八圖 (宗與利壽作農夫圖障)

第二百四十一圖 (宗與利壽作賣花計障)

第二百四十四圖 (宗與利壽作遊藝影障)

第二百四十七圖 (中井友恒作唐船障)

第二百三十九圖 (杉浦兼成作櫻橋圖障)

第二百四十二圖 (横谷宗珉作波に鳥障)

第二百四十五圖 (山珍宗泰作糸透鏡香障)

第二百四十八圖 (森多川宗興作秋草蟲障)

第二百三十二圖 (宗與正政作葛屋障)

第二百四十四圖 (土屋安綱作牧場圖障)

第二百四十三圖 (柳川直政作鶴に雲障)

第二百四十六圖 (堀忠重成作名所樓閣障)

第二百四十九圖 (若尾作山水圖障)

横谷氏並に弟子家

横谷宗興 京師の人にして、江戸に下り、正保年中幕府より扶持を賜はりて御野行師となる。横谷影の祖にして、世に祖父宗興といふ。其の彫刻は後藤の家風を學び殊に祐永の趣を會得して、當世に應じ、(正保五年御師御書)ものに(御師御書)あり。(正保五年御師御書)二月十七日死す。(正保五年御師御書)

横谷宗知

父宗興の後を續ぎて幕府に仕入。貞享四年死す。

横谷宗興

名は文常、逸遊と號す。貞享年中江戸に來り、横谷宗知の弟子となり幕府に仕入。其の彫刻は後藤の家風を學び殊に祐永の趣を會得して、當世に應じ、(正保五年御師御書)ものに(御師御書)あり。(正保五年御師御書)二月十七日死す。(正保五年御師御書)

茶二百三十四圖 宗興師宗知大尊者の師

二至目貫 二百二十八圖

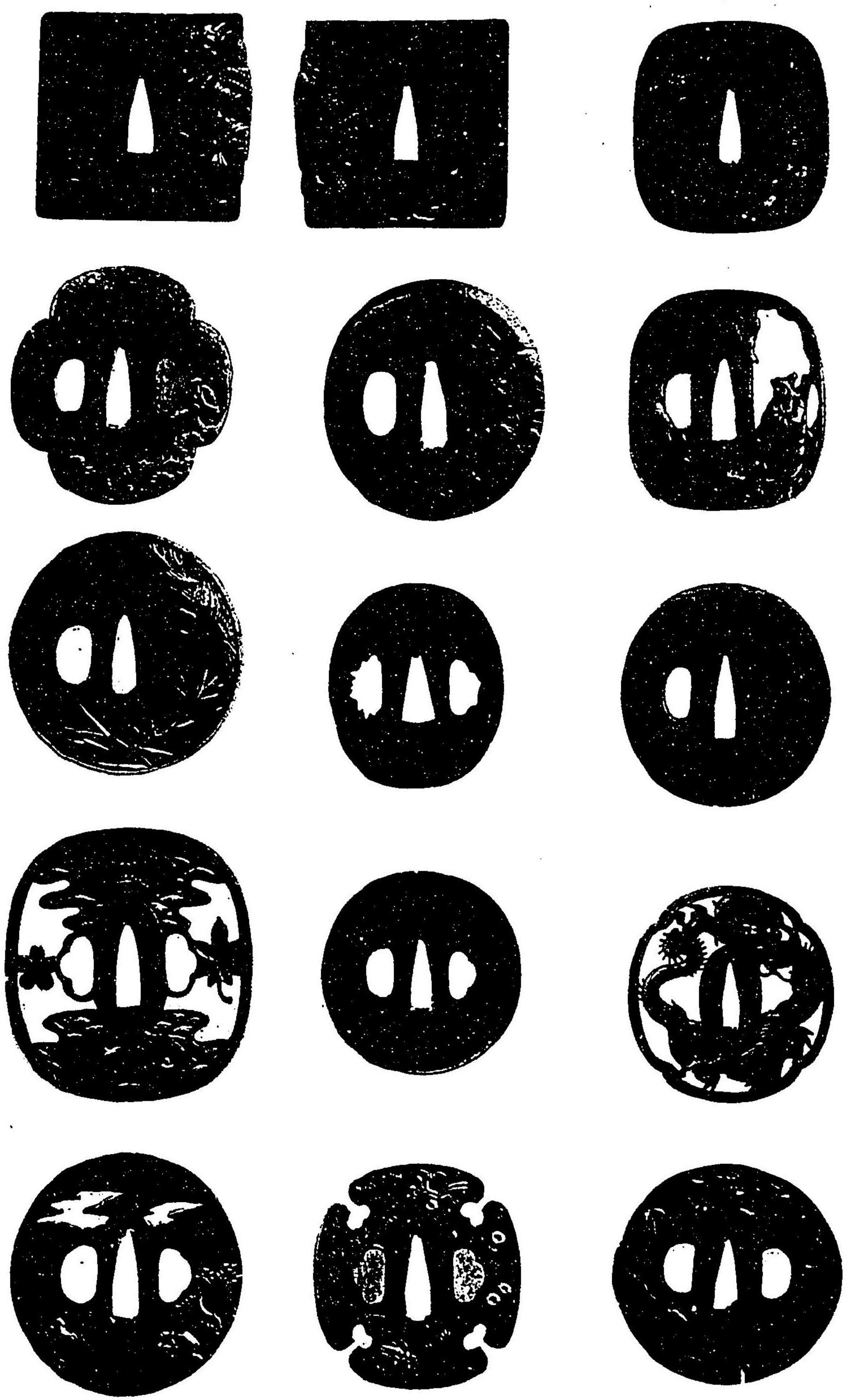
素銅製にて名作なり。其の右(二百二十九圖)なるは菊岡光行の作也なり。

東坡小柄 二百二十圖

東京 今村長賀藏

横谷宗興 宗興門人横谷宗志の二男にして、宗興の養子となる。續の風は能く宗興を會得して、劣らず少しく溫和なり。其の作に兩種あり、一は宗興と見まがふもの、一は純然たる宗興の作也。

(宗興師宗知大尊者の師) 安永八年(正保六年)二月十五日死す。(宗興師宗知大尊者の師) 柳川政次 (宗興師宗知大尊者の師) 柳川深の祖にして、横谷祖父宗興の門人なり。(宗興師宗知大尊者の師) 御師有美 其次の子にして、其の師の作也なり。(宗興師宗知大尊者の師)



にして宗珉と見まがふことあり。最も得意なるは野馬及び獅子なり。殊に獅子は最も勝れて柳川獅子と稱せらる。鯛子の如きも精巧なり。寶曆七年十月九日死す、年六十六。

鶴に葦鏝 (第二百四十三圖)

伯爵 田中光顯藏

宗珉の圖に由りて模作せしといふ銘あり。

柳川直光 直政の門人にして、師に次ぐべき手腕を有し、更に横谷風を兼ね、毛彫も亦巧なり。鑽痕勢ありて且つ瀟洒たる趣あり。文化五年十二月十五日死す、年七十六。

柳川直春 宗珉を學びて、祖父直政よりも寧ろ宗珉に類似し、作品直政よりも上に位すべし。門人頗る多く、最も頭角を顯したるは河野春明とす。

田邊伴正 柳川直春の弟子なり。其の彫刻は總て横谷風にして、柳川風よりは穩和に、且つ綿密なり。壯年にして歿せし故遺品少なきも、非凡の名作なきに非ず。

河野春明 柳川直春の高弟にして、法眼の位に叙せらる。常に雲遊を事とし蹤を定めず。其の初め川柳流の畫風彫刻なりしが、後ち古き後藤の風を味ひ、茲に一種の畫風と家風との間に於て一機軸を出だせり。蓋し春明の天明年代は、宗珉以來の傳により、彫工微細にのみ流れ、卑賤に陥りたり。是に於てか家風の粗朴なる太き鑽を用ひて、一種の趣味ある彫刻を始めたなり。然るに其の作大に世上の賞する所となり、名聲遠近に聞え妙手と稱せらるゝに至れり。

壽屋目貫 (第二百二十一圖)

東京 今村長賀藏

色楡にて彫刻鮮美なり。

稻川直克 柳川直政の弟子にして、横谷風の彫刻に少しく家風を混じて靜温なり。寶曆十一年二月死す。年四十二。

菊池序克 稻川直克の門人なり。高彫の上手にして毛彫亦賞すべし。鑽自在にして片切及び毛彫の法則を亂さずよく齊ひたり。

鷄小柄 (第二百二十二圖)

東京 今村長賀藏

佐野直好 柳川直政の門人小中村直矩を師とす。江戸に住し秋元侯の御抱となる。其の彫刻品位高く柳川風にあらずして却て家風の觀あり。子孫業を繼ぎ門人亦多し。

石黒政常 柳川直政の孫弟子にして下畫に意を用ゐ時好に適し彫刻丁寧に鑽細かく研奇麗にして上手なり。子孫業を繼ぐ。文政十一年七月歿す。歳六十九。

孔雀目貫 (第二百二十三圖)

伯爵 田中光顯藏

色繪にて精巧の作なり。

秋草鶉縁頭 (第二百二十四圖)

大阪 上野理一藏

これ亦色繪にて緻密を極めたり。

菊岡光行 剃髮して沾涼といふ。柳川直光の門人にして其の彫刻穩和にして品位高し。此の人俳諧を好み深く其の道に達して宗匠となる。寛政十二年歿す。歳五十一。

二王目貫 (第二百三十八圖)

東京 清白直藏

宗珉の二王を摸作せしもの色繪にて鮮巧なり。

大森英昌 大森重光の甥にして横谷宗珉に師事し小刀柄縦模様彫刻の如きは宗珉の作に等しきものあり。肉の彫方穩かにして當に宗與と位置同じかるべし。門人頗る多し。明和九年歿す。年六十八。

大森英秀 英昌の甥にして養子となる。宗珉の一輪牡丹を擬して更に新創意を加へ世に賞

せらる。又大森波と稱する波の高彫は此の人より始まる。殊に武者は頗る妙を得たり。寛政十年四月歿す。歳六十九。子孫門人業を襲ぐ者多し。

金時に熊目貫 (第二百二十五圖)

東京 今村長賀藏

張飛縁頭 (第二百二十六圖)

同 同

刀痕甚だ勇健なり。

遅塚久則 大學頭の藩士にて大森英秀の門人なり。彫刻は其の專業に非ず只餘暇に鑽をとるしものなり。色繪美しく繪畫の極彩色の風あり。一時京阪の間摸擬するものありしかど凡工輩の及ばざる所なり。

柘榴目貫 (第二百二十七圖)

大阪 平瀬龜之助藏

金銀色繪にて甚だ美なり。

桂永壽 筑後久留米の人にして江戸に來り横谷古英精の門に入る。横谷宗與の下彫師となる。馬或は獅子の如きよく師風を守り宗與に譲らざる作ありて溫和なり。永壽一生の細工と傳ふるは嘗て薩州侯の大小刀の鏝へ百疋の馬を高彫にして金百兩を賜はるといふ。

岩本昆寛 其の先き宗珉の門に出づ。初めは鮎子を好みて蒔きしが後は草花禽獸人物其の他人の需むるに任せて彫刻せり。何れも奇麗に巧なり。享和元年九月歿す。年五十八。

蛇目貫 (第二百二十八圖)

大阪 平瀬龜之助藏

菊川宗吉 菊をしづめ彫に成すに妙を得て世に菊彫長兵衛と賞讃せられ其の作を呼びて長兵衛菊と稱す。文政天保頃の人なり。

裝劔彫金工

埋忠氏

埋忠就受、江戸湯島に住す。一派の彫工にして、其の作四分之一に彫刻し、鍍金を厚く施し、これを摺はがしたるが如き古色を附す。又目貫の如きは打出にて、材料の質甚だ良し。其の他一門の彫工には就受の前に正次あり、就受の後には泰貞、就門、就連、受方及び沈深、明受、泰安、見次、就壽、求沈等あり、皆同風の彫刻なり。此の家にて作りし金赤銅等の龍の目貫は、其の風美濃彫の龍に似て、眼の周圍に滑剝鑽を用ゐ、眼小さし、又鱗も細微なり。寶曆五年歿す。年七十九。

京都諸家

後藤隆乘、後藤光乘六代の孫なり。圖様一種の風ありて、畫風の彫刻なり。後藤通乘に類する作品もありて、上手なり。享保八年九月十日歿す。

一宮長常、越前の人、京都に出て保井氏の弟子となり、古川善長にも就て學び、且つ古作を研究練磨し、苦學數年終に一派を創むるに至れり。長常幼より畫を好み、常によく自修せり。後ち彫刻を學ぶに當り、筆、土筆、蝸牛、蛙等の寫生を以て人目を驚かし、終には龍或は獅子、人物等、時に臨み心に應じて彫琢、縱横自在を極むるに至れり。嘗て光格天皇の朝御衝立の金具を調進し、其の賞として越前大椽を受領し、是れより一宮越前大椽源長常と銘すといふ。又天明中朝鮮國王より清の乾隆帝へ獻上のため手爐の製作を依頼せらる。長常大に意匠を凝らし、下繪を應舉に乞ひ、手爐の火屋には八重菊の透彫を施したり。其の精巧見る人感賞せざるはなかりしといふ。時人遂に長常を以て畫家應舉に比較し、或は畫風金工第一の大家としては、横谷宗珉と並び稱するに至る。天明六年行年六十七を以て歿す。

鼠嫁入縁頭 (第二百二十九圖)

大阪 平瀬龜之助藏

長常名作の一、精巧にして穩雅の趣あり。

大月光興、享和年間江戸へ下り、復上京す。下繪に巧にして、名手と稱せらる。門人頗る多し。

大阪 池田隆雄藏

蟹鉾縁頭 (第二百三十圖)

圖様切に眞を寫せり。

池田興孝、大月光興に學ぶ。性酒を嗜み、又定紋を彫るに妙を得たり。其彫刻器用にして、鑽活動し、圖様も亦趣味あり。其の門人に明治時代に互る彫金工の大家加納夏雄を出だす。

岡本尙茂、鐵屋國治の弟子にして、俗稱を鐵屋源兵衛といふ。世に鐵源堂と號す。鐵の鍛冶古來此の人の右に出づるものなく、獨歩と稱せられ、其の作大に世に賞玩せらる。元來鐵鈔工たるが故に、金、銅、赤銅、四分一等の材料を用ゐて作りたる裝釦具も、其の鑽痕奇麗なれど、尙ほ鐵鈔彫の趣味を脱せず。安永九年歿す。

蝦蟇仙人縁頭 (第二百三十一圖)

大阪 池田隆雄藏

鐵に象眼を施せしものなり。

細野政守、元と家風にて、毛彫象眼といふを創意して一派をなしたり。高彫色繪など各、妙なり。圖様は元祿風にして、例へば四條の納涼又は花見或は乗合舟等、人の群集せる状を色繪とし、毛彫片切を施したり。

加茂競馬小柄 (第二百三十二圖)

東京 今村長賀藏

彫刻穩和にして、緻密なり。

永峯、姓氏詳ならず。其の父も永峯といふ。彫刻甚だ奇麗にして、細密なり。殊に武者人形など、勢を含みて、面貌に注意せり。

宗田又兵衛 鮎子工の名人にて、所課大名鮎子といへるを創意せり。一筋は鮎子、一筋は磨カキとし、又一筋は鮎子と段々に蒔きたるものにて、其の技子の間を磨くこと頗る技倆を要するものなり。此の人の歿後復よく之れを造るものなし。

後藤一乘 京都の人、後藤謙乗の子なり。當時江戸の名家、後藤には十六代目方乘あれども、家風漸く衰へて世に行はれず。一乘之れを嘆じ、下繪に意を用ゐ新圖を案じて、畫家菊池容齋に下圖を乞ひ、畫風を混じて一機軸を出だせり。是に於て名聲一時に鳴る。恰も江戸に河野春明ありて、畫風より出て、家風に入り、世上に賞讃せらるゝ時なりしなり。東西期せず相待ちて名工を出だせり。明治九年十月十七日歿す。年八十七。

造花小柄 (第二百三十三圖)

東京 清田直藏

大阪其の他諸國の部

大日笠調 大阪に住す。人と爲り放縱にして貧賤に感々たらず。故に其の作品も亦眞率奇抜にして見る人をして自ら快活ならしむ。又俳諧を外み、其の名遠近に聞ゆ。

宗田直道 人物の彫刻に妙を得て、高彫肉合彫共に皆力強く、至りて見事なり。

墨江武禪 天明年中の人にして、大阪舟町に住し、浪華船頭與兵衛作と銘せるものあり。毛彫の上手にて一流をなす。又畫を能くして名あり。故に下繪の如きは甚だ自在にして、大に見るべく、其の作至りて風流なり。

大原女小柄 (第二百三十四圖)

大阪 平瀬龜之助藏

大原女は京都の近在大原の里より薪を賣りに出づる女にて、裏に女の立てる様あり。

辻充昌 江州の人にして、江戸に出て、横谷宗與の門に入り、又奈良風を學ぶ。忽ち上達して

終に一家を立つるに至れり。其の彫刻美麗にして、墨畫風の象嵌又は高彫毛彫等あり。少しく柔弱の感あれども、亦決して凡工に非ず。安永五年十二月十九日歿す。

光曉 美濃に住す。其の姓氏詳かならず。其の作模様高く深き彫方にして、金銀、赤銅等を用ゐ、秋の野などを彫刻せり。縁の如き天井までも金着きんぎにせり。

吉重 五郎作と稱し、兄國永に共に彫物に名あり。繪を金森宗和の畫工宗佐に學ぶ。寛永の頃加州侯より各五十俵を賜はる。其の末流に吉則、吉國、森方、吉次、吉平等あり、各象嵌工なり。

泰山元孚 常州水戸に住す。此の人四分一材に和漢の武者を彫刻すること最も巧にして、其の外賢人仙人の類、乘意の風あり、殊に奈良風の模造に妙を得。其の技奇麗に賞玩すべきもの多し。天明頃を盛時とす。九十歳にて歿す、門人亦多し。

矢田部通壽 水戸に住す。功阿彌の門人なりしが、後ち奈良利壽を師とし、一派を開く。最も氣象ある彫刻にして、水戸に於て所謂中興開山なるものなり。明和五年六月一日歿す。

萩谷勝平 水戸の士にして、彫刻を兄勝人に學び、能く古作の鑿法を會得し、家風畫風及び奈良風等各區別して摸刻せり。明治十九年八月十三日にて歿す。門人に海野勝珉あり。

龍透彫鐫 (第二百四十四圖)

大阪 上野理一藏

象嵌工

村上氏

村主如竹 江戸に住す。明和頃の人にして、鐫の象嵌工を専門とす。一派の名工にして、其の作例へば墨畫の竹を四分一赤銅等にて象嵌を施し、或は高彫の如く蜻蛉蝶の類を青貝にて嵌せり。稻葉通龍會て如竹を評して曰く、其の作猶ほ竹の外直にして中虚く、一點の障なきが如く、工ま

ずして自然の工あり。其の葉の滑々として清風を含み見るものをして涼しからしむるの奇致ありと。其の女に如鐵及び如水あり世に之れを娘彫といふ。子孫門人其の業を襲ぐ。

富士小柄 (第二百三十五圖)

伯爵 田中光顯藏

霞も細かなる象眼なり。

村上如箏 其の手際美はしく、如竹に紛ふもの多し。如竹の弟子にして、後ち養子となる。

甲冑工

明珍宗察 明珍二十三代宗介の弟子にして、式部と號す。江戸に住し、精巧の作を出だせり。享保頃の人なり。

鎧金物 (第二百五十圖)

東京 今村長賀藏

鐵打物にて胸當は龍小手は雲に龍腕當は獅嚙の圖なり。肉高く、色澤美なり。胸當に享保

七年八月明珍宗察江戸にて造るといへる銘あり。

糸透銀杏鐔 (第二百四十五圖)

大阪 上野理一藏

糸透として糸の如く細く彫透かせしものにて、精巧の作なり。

明珍吉久 小左衛門といふ。元祿の初年越前侯に抱へられ、世に越前明珍と稱せらる。甲冑

の外鐵製にて龍鳳の類伸縮自在の作をなし、何れも精巧を極む。

魚鱗具足並に兜

侯爵 松平茂昭藏

越前明珍吉久の作にて、胸板袖は魚鱗形をなし、兜は松平家の紋なる葵形にて造り、盾庇には龍の打出しあり。堅實精巧を極めし作なり。

金具工

中川紹益 通稱を與十郎といふ。越後高田の産にて、元來武器の製造に妙を得たりしが、天正年間京師に移り、千家茶道具に屬する銅鐵器類を錘起鍛鍊して、世の賞讃する所となる。元和八年六月二十三日六十四歳を以て歿す。

鐔工

埋忠重義 埋忠家二十六世にして、法橋の位に叙せらる。頗る上手にして、圖様一々意匠を凝らし、其の技甚だ細密なり。寛文頃の人なり。

名所模様鐔 (第二百四十六圖)

帝室博物館藏

鐵に細かなる彫刻象箵を施し、表裏に玉川吉野立田など勝景の名所を裝飾圖にて顯はせり。

中井友恒 善助と稱す。長州萩の鐔工なり。其の先き夙に南北朝明德年中より周防國に於

て鐔を作りしといふ。友恒中興の名手と稱せられ、山水人物等精巧なる彫刻又象箵を作る。享保

頃の人なるべし。

唐船鐔 (第二百四十七圖)

伯爵 田中光顯藏

唐船の圖にて彫刻象箵共に鮮巧なり。

岡本友次 長州の人岡本友義の門人にして、數、江戸に來りて其の業を研究し、頗る熟達せり。

茲に於て岡本の姓を冒すことを免さる。元祿年中の人なり。

西川忠正 江戸赤坂鐔工の祖にして、一種の鐔を作り出だせり。即ち鐵の鍛鍊を良くして、多

くは透彫なり。赤坂彫として世に賞讃せらる。明暦三年に死せり。弟子に守忠、忠政あり。

喜多川秀典 江州彦根彫の祖と稱す。多くは武者仙人等を挿透にして、衣裳に布目象箵を施

し、然かも其の圖様簡にして、頗る古樸なり。

喜多川宗典 藻柄子と號す。秀典の後又は秀典晩年の號なりともいへり。京都八幡町にあ
りて江州彦根住と銘せり。

秋草虫鐔 (第二百四十八圖)

帝室博物館藏

木瓜形鐵地金象箆なり。

伊藤正恒 江戸に住し鐔工を以て幕府に仕ふ。此の人細透を彫ること古今獨歩と稱せられ、
一流の祖となる。享保九年死す。

若芝 長崎に住す。二代目なり。初代若芝喜右衛門は和蘭風の細工を鐔に應用して彫刻せ
り。二代目若芝は名手にして支那風の山水遠景の人物或は風竹又は螭龍等、渴筆寫意の趣を擬し、
蕭索として古色ある竹を出だし、一派をなす。大に世に賞せられ、此の風に似たるを凡て若芝と呼
ぶに至れり。

山水圖鐔 (第二百四十九圖)

帝室博物館藏

支那文人畫様を刻せしものにて、若芝得意の作なり。

鑄工

名越昌高 京都に住す。古淨味三昌の子にして、専ら茶湯釜を鑄る。寛永十六年歿せり。其
の子昌乘より三典、昌光、昌永、昌興、昌延等、其の業を襲ぐ。

名越家昌 古淨味三昌の弟にして、徳川幕府の召に應じて寛永年中江戸に下る。江戸釜師の
祖なり。

名越正信 父家昌の後をつぎ、寛永十七年より永く江戸に住す。茶家小堀遠州の好により、蟬
及びいたち貝等の釜を造り、又茶家片桐石州の好に應じ、雲龍の釜及び風呂を造り、其の他多くの新

形を出だせり。貞享二年に死す。正信より道正、昌美、昌道、建昌、昌明、昌孝等、代々釜師の業を繼ぐ。

宮崎寒雄 其の先は能登の鑄物工にして、上京して名越三昌の門に入り、終に名工となる。前

田家の召に應じ、金澤に移り住す。茶人仙叟の釜師なり。大講堂たかたか、小こ、こ等の作あり。正徳二年歿
す。子孫其の業を繼ぐ。

金谷五郎三郎 其の先は豊臣氏の遺臣安藤某の子にして、寛永中京都に來り、銅器鑄造に従事
し、又銅器の着色を工夫せり。子孫五郎三郎を以て通稱とし、其の業を襲ふ。九代目五郎三郎に至
り、意を鑄造彫鏤及び着色に用ゐる精巧を極め、遂に其の作品を多く海外に輸出するに至れり。

龜女 其の姓氏詳かならず。長崎の人にして、父の業を傳へて鑄物工となり、能く香爐を造る
に妙を得たり。製品多くは唐物といへる風にして、鑄造手薄なり。姓豪放にして、酒を嗜み、其の家
貧しと雖も、毫も意に介することなく、其の行常人と異なり、天明頃の人なり。

鍋屋長兵衛 村上氏なり。京師の人にして、専ら佛具を鑄造す。多く蠟型鑄造にして、殊に彫
刻及び着色に妙を得たり。其の着色多くは宣徳色なり。文政八年歿す。

村田整珉 長崎の生れにして、文化文政の頃江戸に住す。力を寫實的の造型に用ゐ、殊に龜を
造るに妙を得て、形狀活動し、頗る雅致に富みたり。其の他三具足又は五具足の類、模様細密にして
精巧なり、整珉の作凡て蠟型にして、脱蠟の法に頗る意を用ゐたり。又鐵てつ、てつ及び鑽を用ゐること頗
る巧なり。

村田貞乘 整珉の門人にして、師の風あり。殊に鐵てつ、てつ着色に妙を得たり。鎌倉建長寺に安置
せる五百羅漢は、其の大き七八寸、其の數六百の上なるべし。木型は高橋風雲及び其の弟子東雲の
彫刻せるものにて、貞乗師整珉と共に之れを鑄造せり。蓋し鑄造に於ては近世の名手といふべし。

門人に寶子山宗珉あり。

二八八

四方安平、其の先は丹波龜山の藩士にして京都に住す。龍文堂と號し、銅器の製造に精しく、傍ら書畫を能くす。天保十二年歿す。時に年六十三。子孫龍文堂と號し、其の業を傳ふ。門人に秦藏六あり、倣古の技に長じ、亦今代の名工と稱せらる。

本間琢齋、佐渡の人にして、文房具及び煎茶具等を造る。當代の末年に至り、作品を海外に輸出す。蠟型鑄物にして、鑄液を加へず、古色を帯び、一種の風致あり。

漆工

徳川氏天下を掌握するや、泰平三百年、この間漆工蒔繪の技術は殆んど其の進歩の極度に達せり。初め家康江戸に移るや、京都の蒔繪師幸阿彌長法、古満休意の如き、皆召されて江戸に至り、御用を勤め、御抱となる。これ漆工の江戸に發達せし起原なり。而して此の時代は政略上凡て儀式を以て束縛せし世にして、公邊の典式は勿論冠婚喪祭より年中の行事に至るまで、皆嚴重なる一定の式法を存し、又、一面には茶道愈盛に行はれ、香道亦興り、座作進退は勿論其の調度小道具類の如き、一々流儀に依り、寸法と形状とを異にせり。而してこれ等の諸道具の過半は漆器の蒔繪を用ひしかば、漆器需要の多きこと實に此の時代に如くはなかりき。されば製作者の業多忙にして、互に其の技を競ひ進歩を見ること少なからず。

されど此の儀式的な一定の需要は、却て藝術の規模を狭縮ならしめ、意匠新案の發達を障礙せり。故に當代の進歩は純然たる技術の進歩に止まり、思想上に於ては反りて退歩を免るゝこと能はざりき。唯獨り光悅の一派のみは前代桃山の風尚を傳へ、毫も現時代の拘束を受けず、遂に光琳破笠の徒を出だし、益々奇趣巧妙を顯はせり。これ全く其の技術の専門ならざりしに由る。若し専門の藝術家とし

て將軍若しくは諸侯の御用を勤めたらんには、必ずや儀式的の拘束を逃るゝこと能はざりしなり。凡て當代京都に於ける蒔繪は、江戸に於ける蒔繪よりは比較的に其の影響を受くること少なく、幾分か古風を存せり。

此の時代の作品を通觀するに、初期の藝術は尙幾分か桃山の遺風を繼ぎ、其の剛健の趣ありて、更に技術の精巧緻密を加へたり。即ち肉合しきあひ研出しよだて截金せきご使用法など益々精熟し、遂に寛永時代の大進歩を來たせり。當代の名手なる幸阿彌長重の作、尾州家の初音棚は、此の時代の作品の好標本なり。又其の二期は元祿より寶永の頃に至るの間に、實に精緻を極め、美麗を盡したりき。世に五代將軍の號を取り、常憲院時代の物と稱するは、即ち是れなり。されど其の精巧なる作品は、小き印籠の類に多し。刑部梨子地發明の如き、此の期に屬せり。享保以後に及びては、名家尙其の統を保つものなきにあらざれども、時好の爲めに自ら墮落の傾向を來たせり。當時江戸城内には工場かみの設あり、名工を集めて諸調度を製作せしめたり。之れを御小屋場と云ひ、名作品の多くは茲に成りたり。然るに享保以後に至りては、贈遺賞賜等に多く蒔繪物を用ゐられしが爲めに、需要繁多を加へしも、其の製作品は圖樣形状の一定せる儀式的調度を多作するに止まり、唯外見のみを街まひ下塗も其の度敷を減じ、蒔繪も成るべく手敷を省かんとし、爲めに金銀の薄金具うすごんぐを用ゐること行はれ、金銀粉も亦少量にて大部分の場所ところに使用し得べき工夫をなし、遂に平極ひらきまと稱する扁平形の粉を製造すること發明せられたり。この頃京都に於ける製作品も亦同様の傾向を呈し來り、金粉の質を悪くして、外觀の美なるものを出だせり。これを京都仕入物と稱す。かく大都に於ける製作品粗造に流れしが爲めに、地方は自ら地方的作品にて其の需要を充たすの勝れるを知り、都會の作品と拮抗して却て地方製作品の發達を見るに至れり。中に就きて加賀の金澤、尾張の名古屋は、特に精巧の作を出だせり。嘗て五十嵐道甫とい

ふ名工は、加州侯に聘せられて加賀に赴き、繪を同地人に傳へ、又同じく京都の蒔繪師山本正令は、寛政の頃名古屋に移住して其の業を創し、共に東西の兩都會に譲らざる製品を出だすに至れり。又此の期に隆盛を極め、其の技術の發達せしは、鞘塗法即ち變塗（まがひぬり）の諸法にして、種々の新様を出だせしが、此の進歩も多くは地方の技術家に由りて發明せられたりき。

天保以後世は蘭使の來聘となり、ペルリの來航となりて、日に社會の煩雜を生じ、殊に幕府亂れて國家の將に動搖せんとするに際し、また器物を愛し、其の趣味を鑒賞するものなく、殊に蒔繪の如きは僅に摸古の技に巧なる文哉、羊遊齋等の作を記念として、不幸の終を告ぐるに至れり。

作家並に作品

五十嵐道甫 道甫は元和頃の人、其の先を信齋と稱し、蒔繪の技術を以て東山殿に仕ふ。道甫は其の孫なり。前田利家に聘せられて加賀に至り、蒔繪を同地の工人に傳へ、其の子道甫喜三郎も前田家に仕へ代々金澤に住したり。

秋草蒔繪硯箱（第二百五十一圖）

京都 山本利兵衛藏

精巧の作にして、蓋裏には七夕姫の機を織れる圖あり。

幸阿彌長重 長重は幸阿彌の十代目にして、其の作精緻堅實にして品位に富めり。京都と江戸とに來往して御用を勤め、東福門院入内の道具、明正天皇御即位の調度、其の他徳川の姫君婚儀の道具等、一代の作少なからず。即ち尾州侯初音の三棚は長重の作なり。慶安四年五十三にて歿す。幸阿彌家は長重より長房、長救、正峯等相襲ぎ十九代に至るまで幕府の扶持を受け、御用を勤めたり。

初音蒔繪棚並に飾道具（第二百五十七圖）

侯爵 徳川義禮藏

寛永十四年三代將軍家光の長女千代姫尾州侯へ婚嫁の時携へられし道具にして、御厨子、黒

棚、書棚の三棚に化粧具、文房具等諸般の道具附屬せり。即ち幸阿彌長重の作にて、源氏物語初音の卷なる鶯の初音の歌の意を題に華手畫を蒔繪せしものにして、全體梨子地に於て、金銀を象嵌し、山水の肉合巧に、盡く截金を點じ、殆んど全體彫金の如き趣ありて、其の作堅實と華麗とを窮極せしものなり。而して其の技術の巧なるよく、是等貴重材料をして十分に其の特色の光澤を發せしめ、しかも配色に注意して、穩雅の趣致を顯はさしめたり。實に我が國蒔繪製作品の巨擘と稱すべきものなり。

初音蒔繪手宮（第二百五十二圖）

帝室博物館藏

徳川侯爵の所藏なる初音蒔繪の棚に附屬せしものなるべく、其の作も亦幸阿彌長重の作たること疑ふべからざるなり。

山本春正 春正は京都に住し、漆工蒔繪に長じ、技術精巧、圖様溫雅にして配合の妙を得たり。春正兼ねて和歌を能くし、二十一代集類句の著あり。又伊藤仁齋を友として、漢籍にも通ぜり。子孫十代に至るまで皆春正を稱し、蒔繪の業を繼げり。天和二年七十三にて歿す。

摺麥蒔繪硯箱（第二百五十三圖）

帝室博物館藏

群（むら）梨子地に摺麥を平蒔繪にせり。圖様優美にして品位あり。裏に春正作の印あり。

牧童蒔繪硯箱（第二百五十四圖）

京都 舶橋繁之助藏

牧童の牛に乗りて笛を吹く圖にて、野に菊萩などの茂れる様を蒔繪せり。下草は磨出にて、童と牛とは高蒔繪なり。雪形には金銀截金を押せり。すべて緻密精巧を極めしものなり。春正五代目寶曆頃の作なるべし。

椎原市太夫 市太夫は江戸の人にて、寛永の末加州侯に召抱へられ、金澤に移りて蒔繪に従事

す。印籠に細かに愛らしき蒔繪を施し、世に加賀印籠とて賞せらる。茶道に精しく、其の作凡て意匠風雅に富めり。

古満休意 休意は古満家の元祖にして、江戸の人なり。徳川家光に召されて蒔繪師となる。其の子休伯も徳川綱吉に召されて、父休意の職をつぎ、連綿として十一代に至るまで、代々江戸將軍の蒔繪師となれり。

柴垣蒔繪硯箱 (第二百五十八圖)

帝室博物館藏

磨出蒔繪にて、蒔の葉には朱又は黄色を點せり。裏は平蒔繪にて、雨に鷺を描き、古満休意作なることを其の子休伯の極めし銘あり。

田附長兵衛 長兵衛は寛文延寶頃の人にして、京都に住し、其の技術精巧にして、頗る穩雅の趣あり。當代の名工と稱せらる。

葛細道蒔繪文臺硯箱 (第二百五十九圖)

帝室博物館藏

文臺硯箱共に表は金平目地高蒔繪にて、僧の負櫃は彫刻金物を嵌せり。裏に田附長兵衛高忠の銘あり。すべて堅實にして精巧の作なり。

梶川久次郎 久次郎は蒔繪を以て幕府の抱となる。最も印籠の製作に長じ、天下一の名人と稱せらる。寛文天和頃の人にて、子孫其の業を襲ぐ。

青海勘七 勘七は漆器を能くし、殊に波文を描くに妙を得たり、故に青海の名あり。元祿頃の人なり。

緒方光琳 光琳は本阿彌光悦の蒔繪を慕ひ、其の意匠に倣ひ、錫鉛青貝等を嵌せし作をなせり。其の作はもとより天縱の奇才を揮ひて、風流洒落の極致を輸せしもの、圖様の奇抜なる、形狀配

第二百五十三圖

(山本春正作 秋意蒔繪硯箱)

第二百五十四圖

(山本春正作 秋意蒔繪硯箱)

第二百五十一圖

(五十嵐道雨作 秋意蒔繪硯箱)

(緒方光琳作 三輪光琳硯箱)圖五十五百二第

圖六十五百二第
(緒方光琳作 三輪光琳硯箱)

第二百五十二圖
(五十嵐道雨作 秋意蒔繪手篋)

す。即ちこれに受らしき藤繪を見れば、其の筆意は、
既風雅に富めり。

(五十藤十日本帝國美術史)

其の子休伯も徳川朝官に召されて父作意の職をつき、
の藤繪師とされり。

榮垣葛藤繪硯箱(二百五十八圖)

磨出葛藤繪にて、葛の蔓には赤又は黃色を
赤室博物館蔵

なることを其の子休伯の誦めし筈なり。

川附長兵衛、長兵衛其意を延寶頃の人に
二百五十九圖

(山本齊五郎)

文楽硯箱共に、其は金平目地高筒繪にて、
二百六十圖

忠の銘あり。すべて堅實にして精巧の作なり。

梶川久次郎、久次郎は藤繪を以て藤影の如くなる、
二百六十一圖

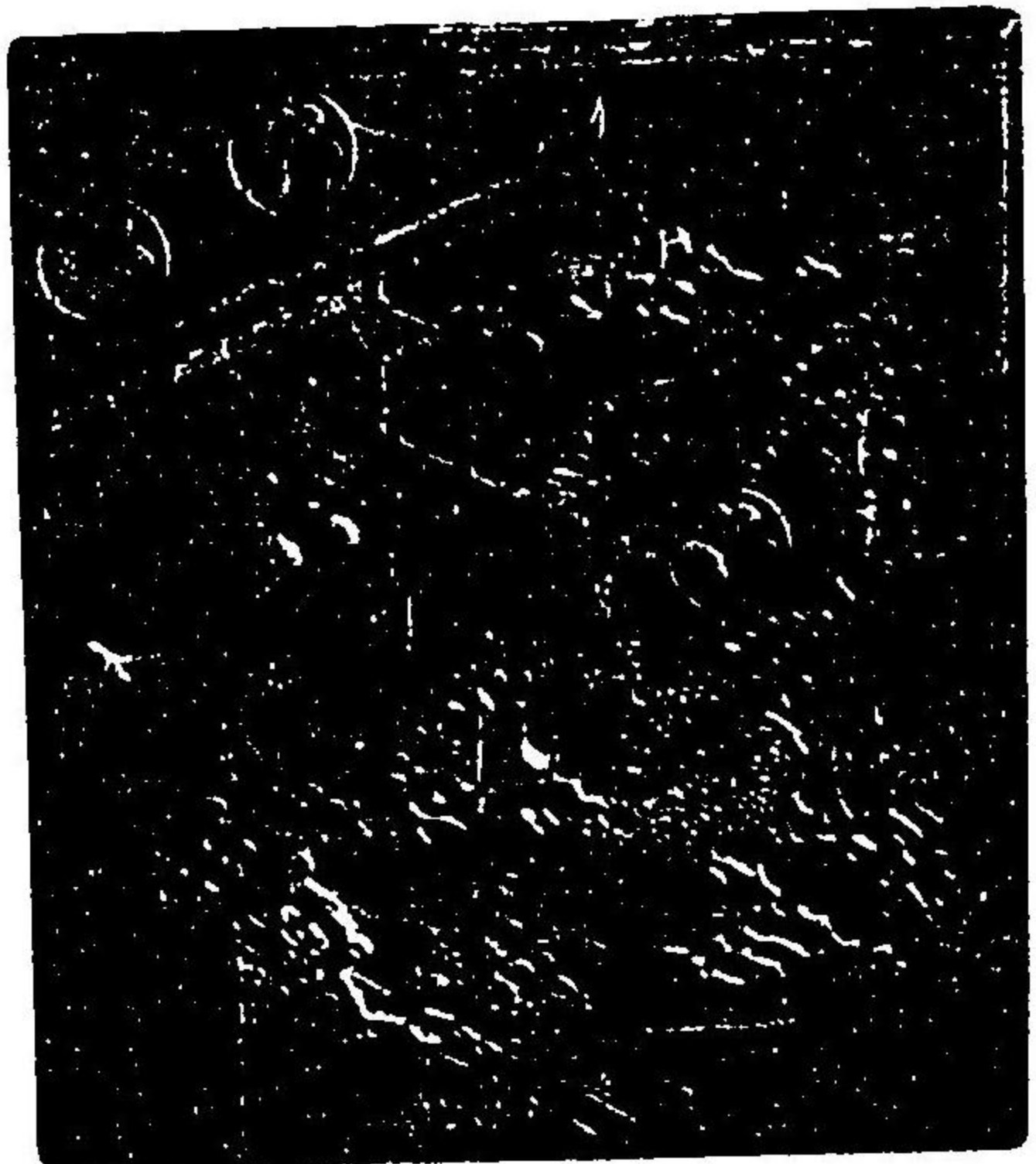
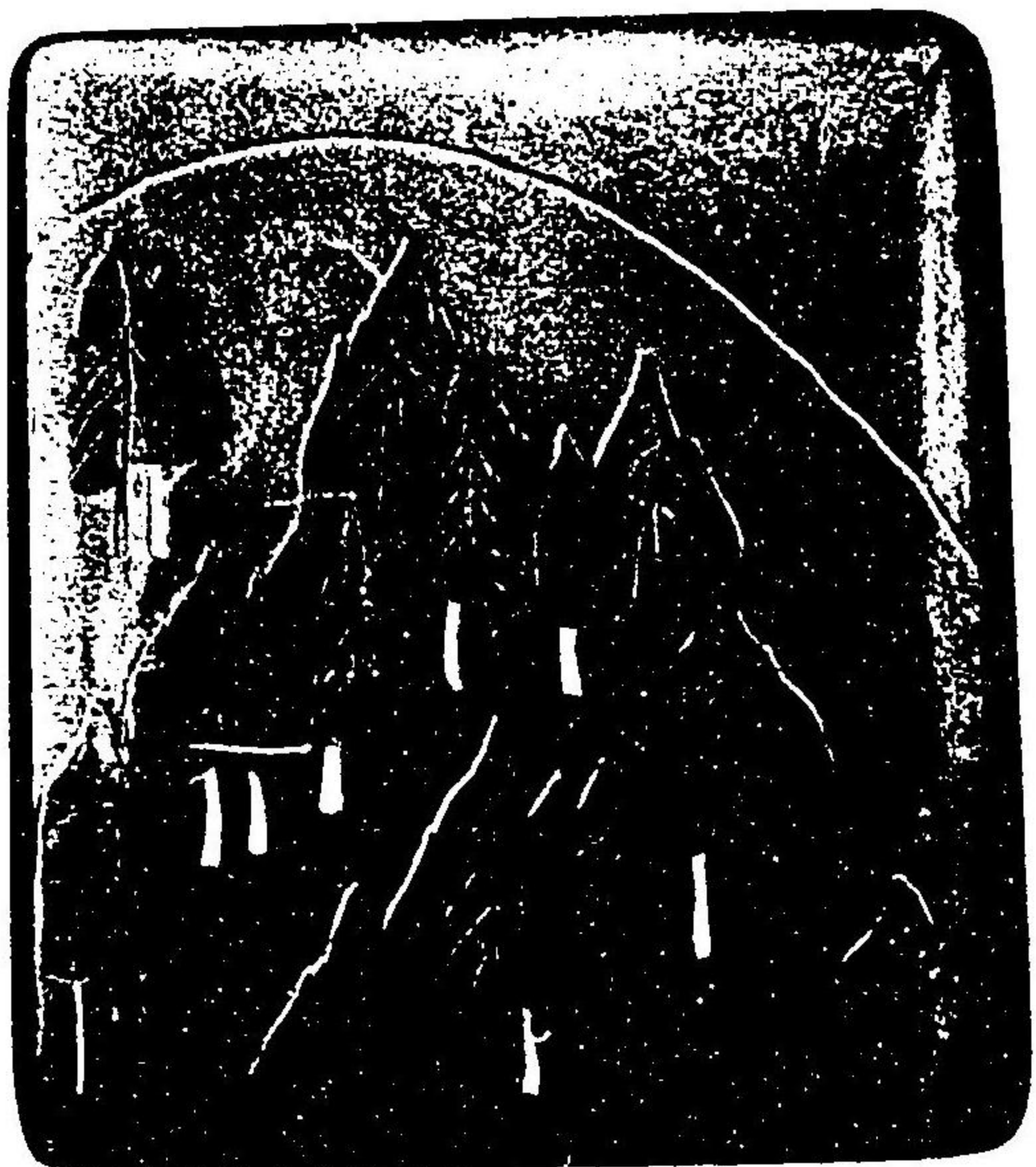
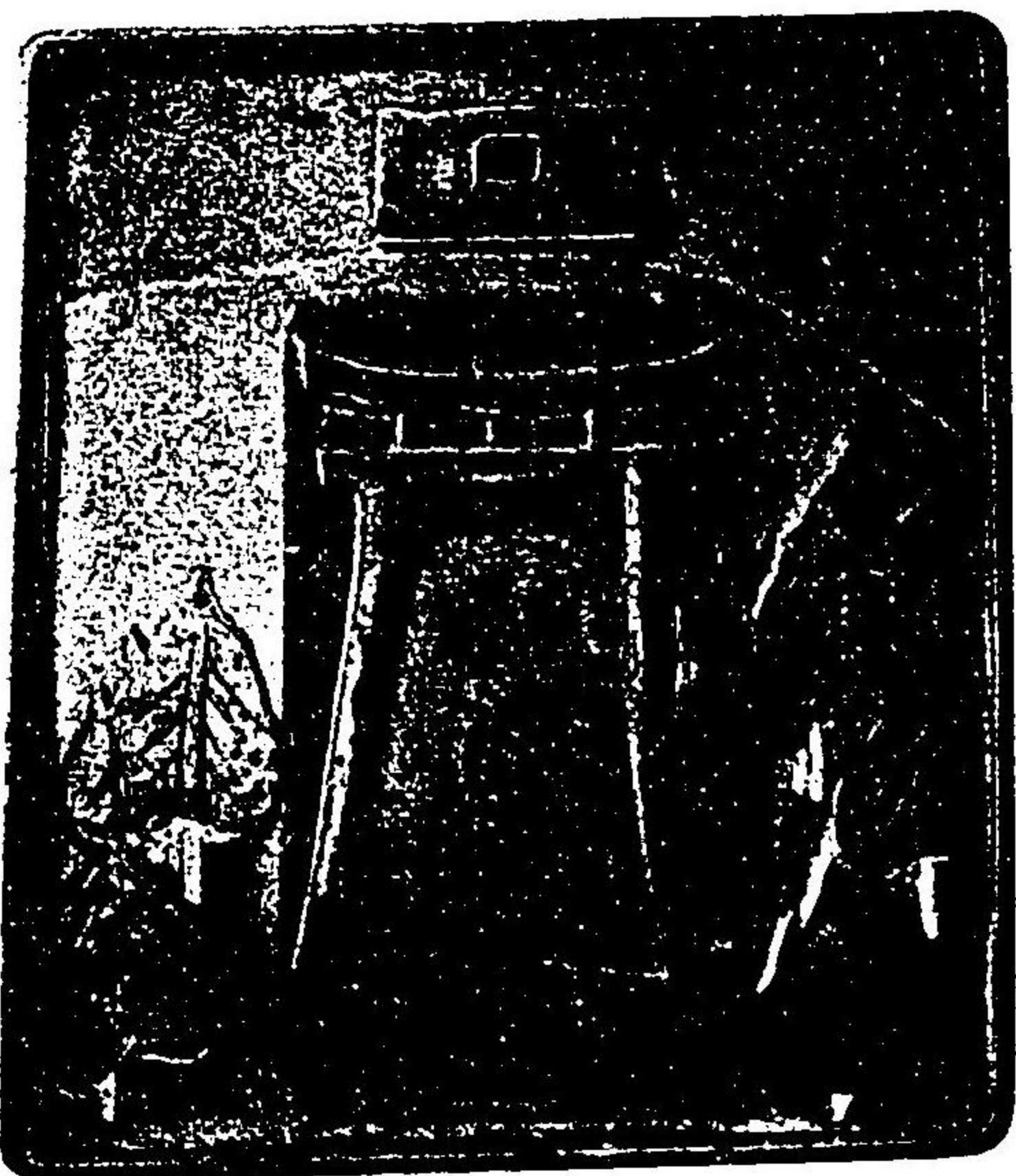
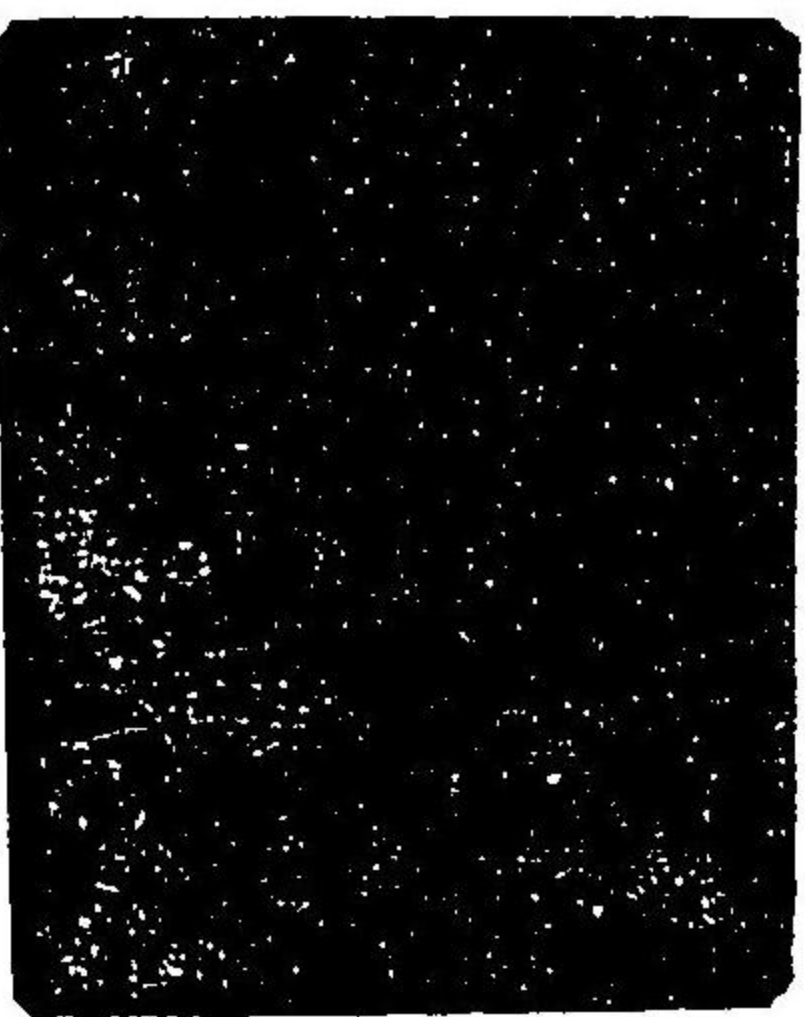
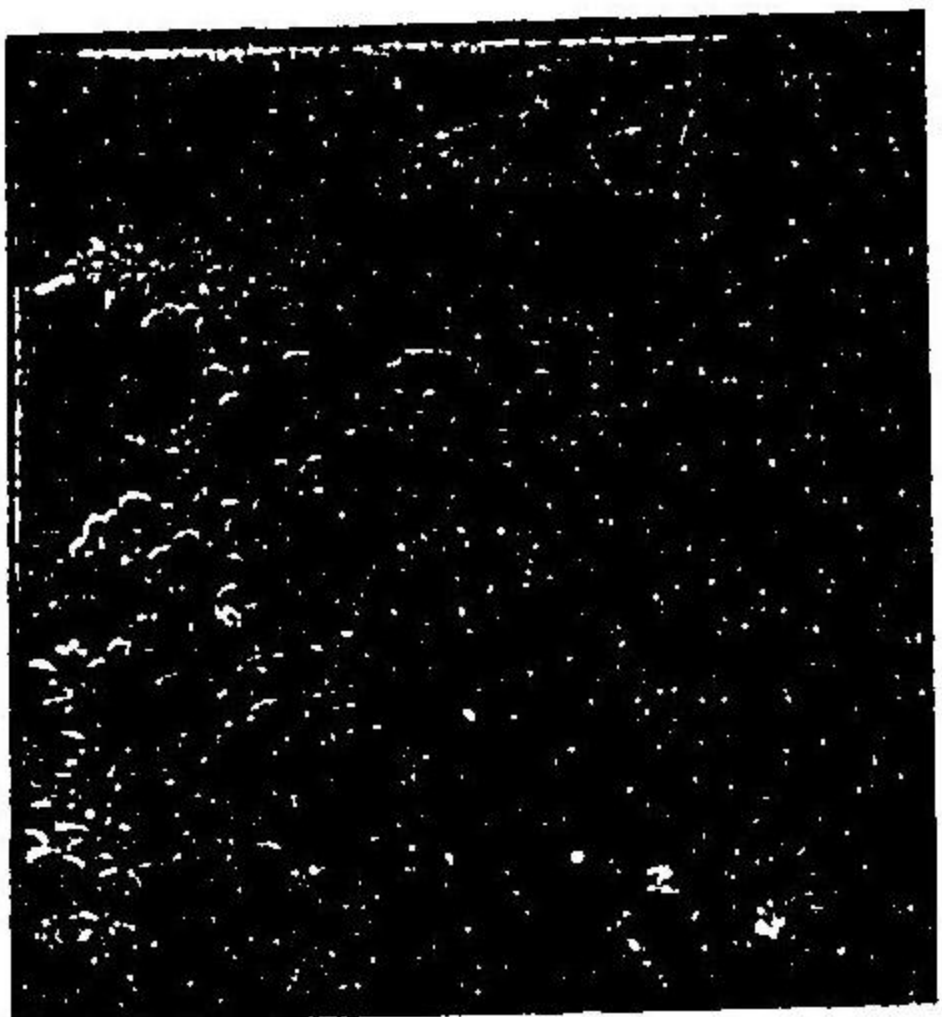
稱せらる。寛文天和頃の人の、子孫其の家を襲ぐ。

青海勘七、勘七は漆器を能くし、漆に流文を情くに
二百六十二圖

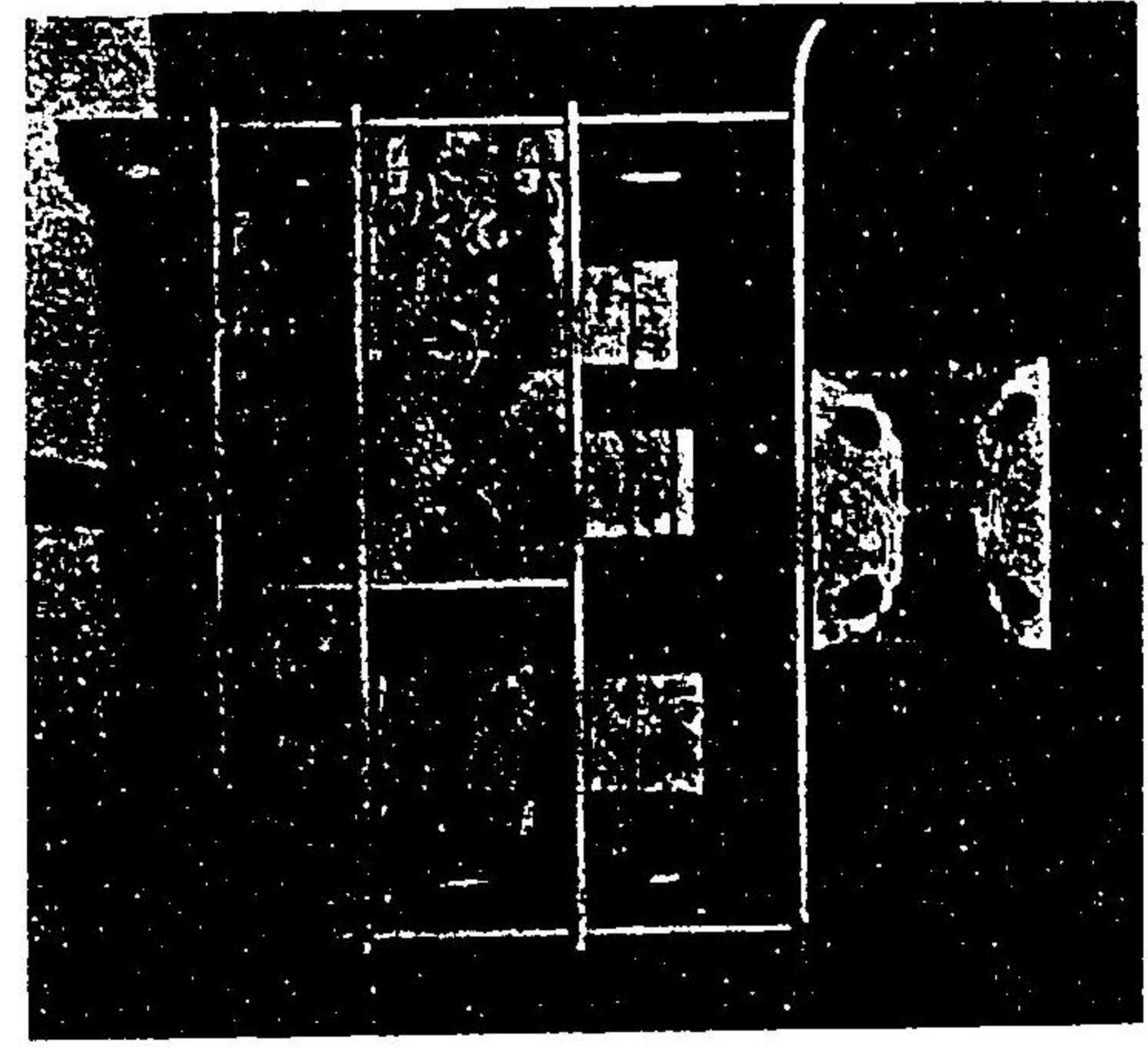
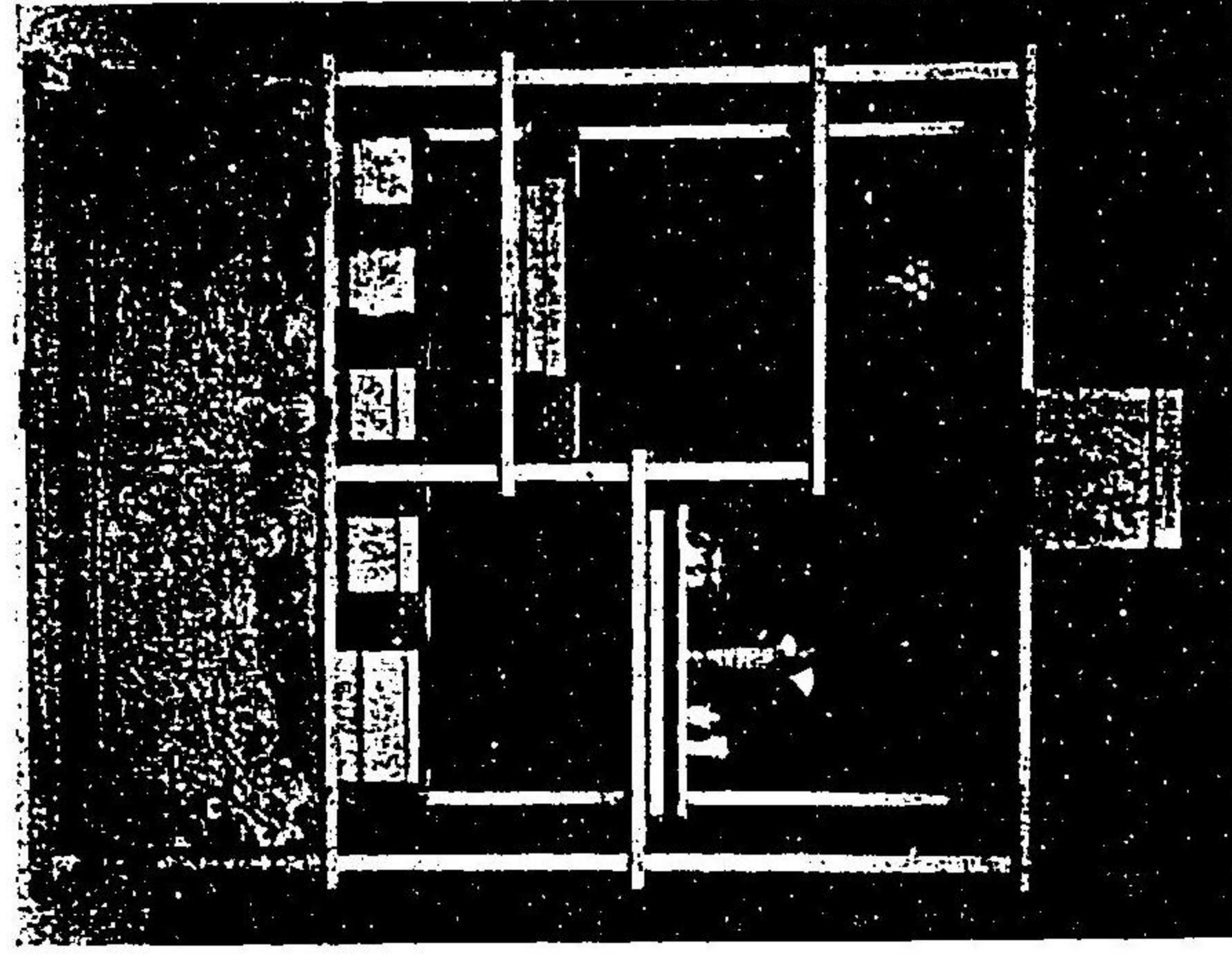
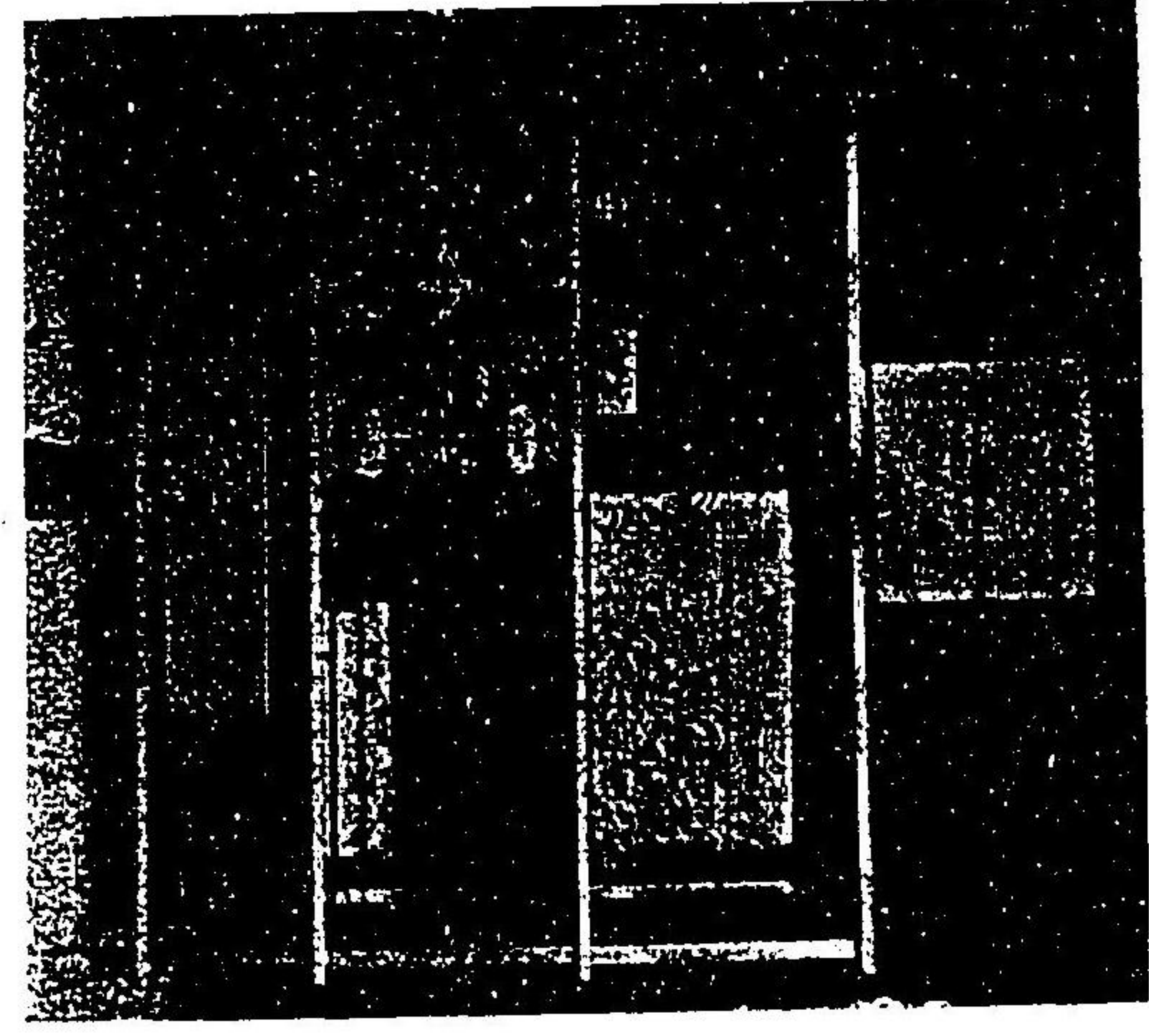
繪せらる。光琳は本阿彌光俊の藤繪を慕ひ、其の意匠に倣ひ、
二百六十三圖

其の筆はもとより、其の意匠は、
二百六十四圖

其の筆はもとより、其の意匠は、
二百六十五圖



(圖七十五第二節)
(具道飾に並欄給瑪音刻作京長樂阿幸)



(蘇州蘇式木器)
(蘇州蘇式木器)

色の巧妙なる尋常蒔繪師の細工に異り、實に徳川氏時代に於ける破天荒の技巧といふべきなり。光琳かつて京都銀座方商人の奢侈を極むるを知り、此の輩をして一驚を喫せしめんと欲し、其の商人等に誘はれて嵐山の花見に行きし時、兼ねて用意せし竹苞に握飯を包みて携へたり。其の一行嵐山に着し、花の下に籠を設けて、各誇り顔に金銀螺鈿を鏤め装ひし美麗の提重を開きたり。時に光琳獨り竹苞の握飯を取り出だして食ひけるが、よく／＼これを見れば、其の竹苞の裏には一面に金箔を押し、花鳥山水など細かに蒔繪せしものなりしかば、彼の奢侈を競へる銀座方も一同顔見合せて驚き合ひしとぞ。さて籠も終りければ光琳風のままに／＼その竹苞を大堰川に流して歸りしといふ。光琳の風流洒落なるこの一事にても推知し得らるべし。

三輪蒔繪硯箱 (第二百五十五圖)

東京 林忠正藏

光琳名作の一にして、圖は大和國三輪の山に杉の立てる様なり。地は粉溜こなだまりにて、杉の葉は鉛幹に螺鈿を嵌し、硯は三輪神社の鳥居形に造れり。箱の形狀如何にも穩雅にして、圖様の奇抜にして、而かも素朴なる妙味賞するに餘あり。其の鉛に描きし杉の枝の如き、篋目に光琳獨得の筆意を表はせり。

杜若八橋蒔繪手箱 (第二十五十六圖)

帝室博物館藏

昔し在原業平が歌を詠ぜし名所なる三河國の八橋を蒔繪せしものにして、箱の内裏には波を描き、板橋は鉛、花は螺鈿を嵌せり。

小川笠翁 笠翁又破笠といふ。伊勢の人江戸に來りて俳諧をなし、又土佐風の畫をよくし、兼ねて髹漆の術に長じ、漆器に陶器、木片、鉛、錫、牙、角などを嵌入し、人物、花鳥、古器物等を裝飾せり。時人これを破笠細工と稱して大に賞鑑せり。其の作圖何れも雅致ありて、技も亦甚だ精巧なり。延享

四年八十五にて歿す。

古墨古錢蒔繪書棚 (第二百六十圖)

男爵 九鬼隆一藏

黒蠟色地に古墨古錢及び古鏡を蒔繪せり。何れも高肉にて緻密なる模様を出だし又缺損

磨滅又は腐蝕せる點など、盡く眞を寫し、銅の錆びし様など色合をもよく似せしめたり。

古墨蒔繪手箱 (第二百六十一圖)

京都 熊谷直行藏

編竹に漆を施し、地に古墨を蒔繪せるものにて、其の緻巧の技、前の書棚に異ならず。

鹽見政誠 政誠は享保中京都に住せし蒔繪師にして、磨出蒔繪を以て世に聞えし名工なり。

後世磨出蒔繪を鹽見蒔繪と稱するにいたれり。この人精巧纖麗なる技術に得意なりしのみならず、まゝ風雅洒落なる品をも作りしといふ。

樋口蒔繪印籠 (第二百六十二圖)

帝室博物館藏

黒地に樋を螺鈿にて篋し、蓋を磨出蒔繪にせり。

永田友治 友治は享保年間の人にして、蒔繪の名手なり。緒方光琳の風を慕ふ。

山本利兵衛 利兵衛はもと丹波桑田郡の人なり。京都にいて、髹漆の法を學び得たり。延

享二年桃園天皇御即位の調度中漆器の調進を命ぜられしが如き、當時利兵衛が名聲ありしを知る

べし。明治三年九月二十七日七十九にて歿す。其の子孫代々利兵衛の名を襲用して其業を傳ふ。

飯塵桃葉 桃葉は觀松齋と號す。最も印籠の蒔繪に長ぜり。明和の頃阿州侯より下駄に蒔

繪せよと誂へられしに桃葉いたく其の禮なさを怒り、わが蒔繪は印籠にするものなり、黄金何程賜

るとも應じがたしとて斷り申せしかば、阿州侯其の氣節に感じ、終に士分として召抱へらる。其の

子孫代々阿州侯に仕へ、觀松齋の號を襲用せり。

第二百六十二圖

(鹽見政誠作
樋口蒔繪印籠)

第二百五十八圖 (古漆休作榮垣蒔繪硯箱)

第二百六十三圖

(飯塚桃葉作
蒔繪印籠)

第二百六十一圖

(小川笠翁作
古墨蒔繪手箱)

第二百五十九圖

(田附長兵衛作
寫經道蒔繪文架硯箱)

第二百六十圖

(小川笠翁作
古墨古錢蒔繪書棚)

第二百六十四圖

(古瀧實哉作
清水觀音堂蒔繪印籠)

...

新永壽堂書畫冊(四) (古藤書畫冊) 第百六十四圖

真味雅齋書畫冊(五) (南園真味齋冊) 第百五十五圖

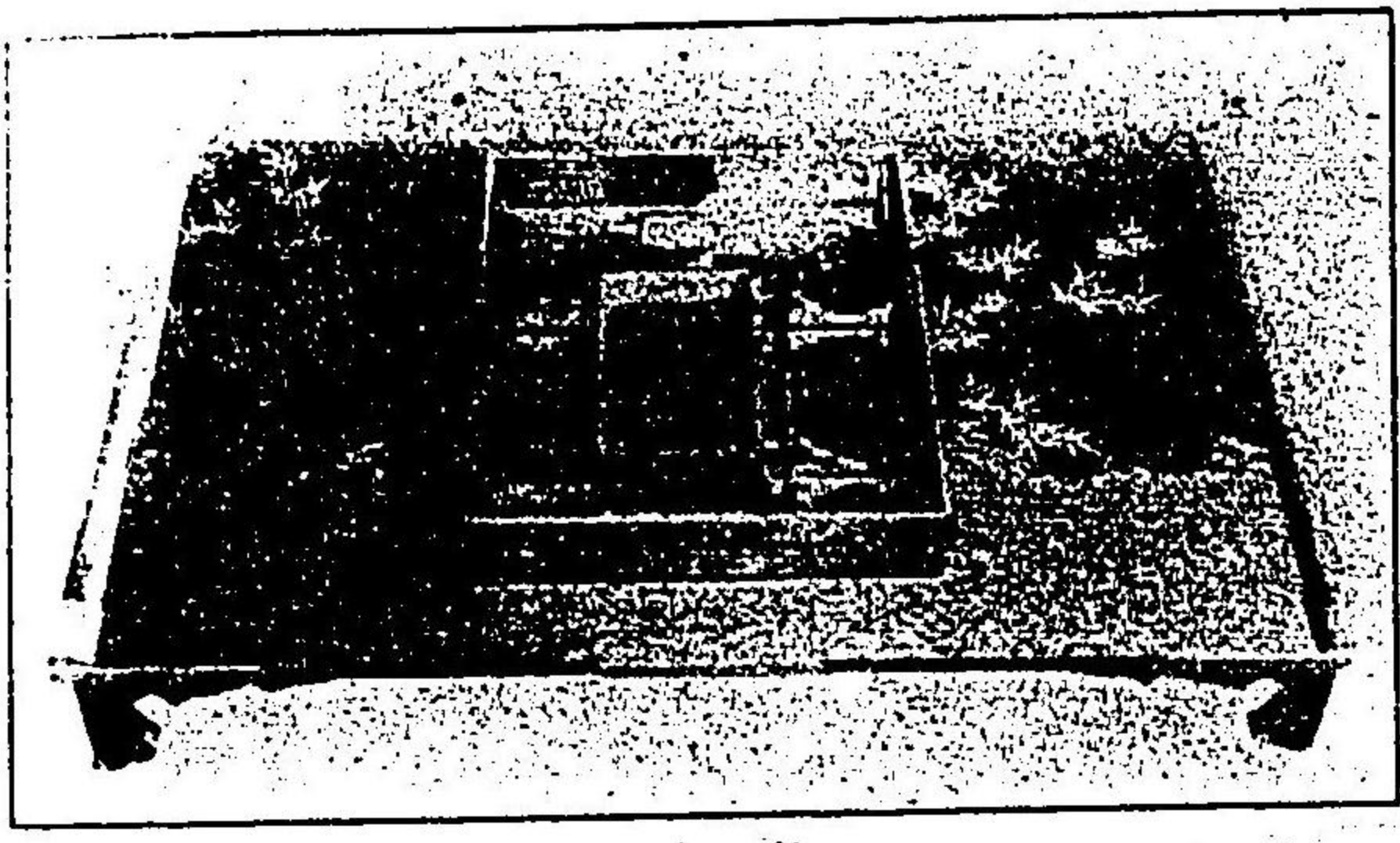
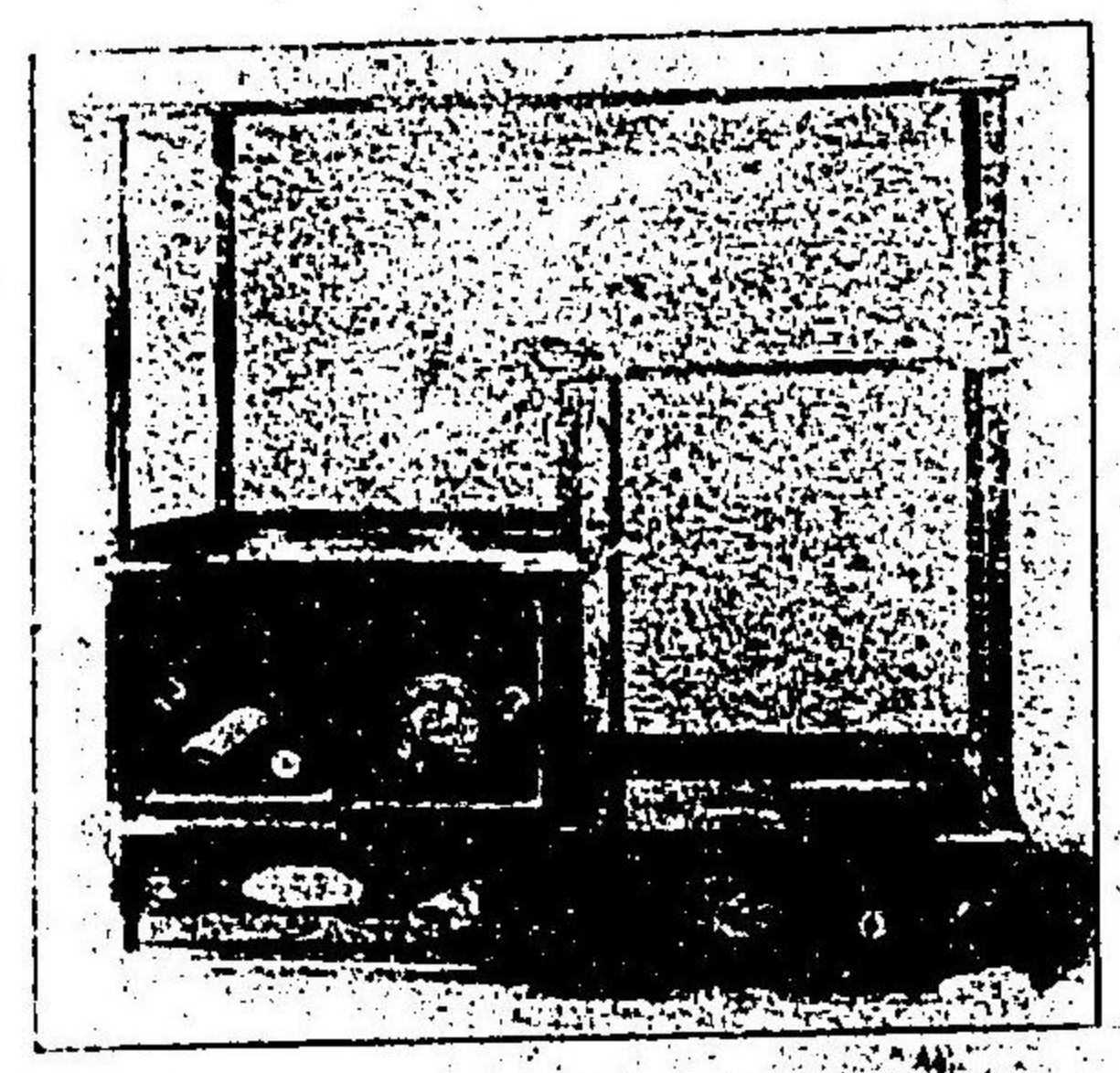
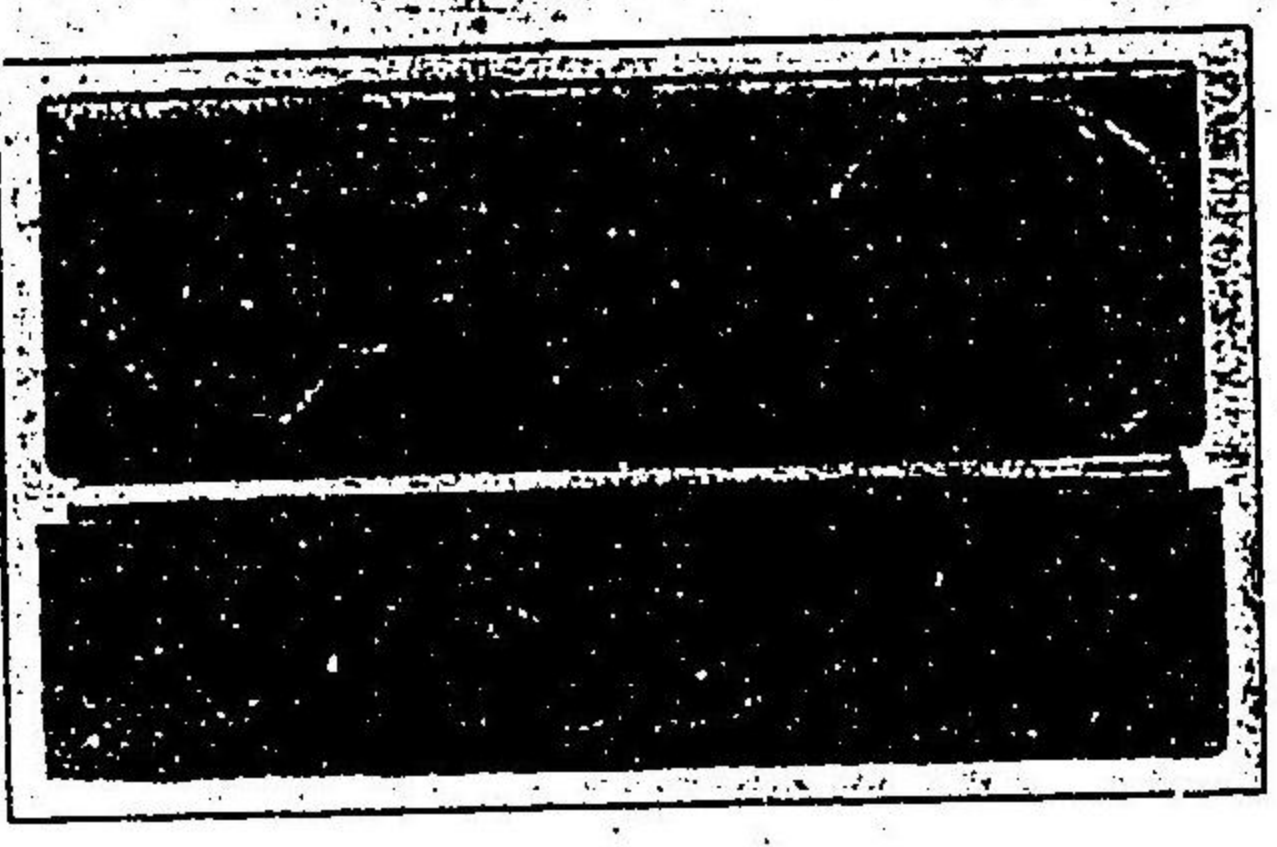
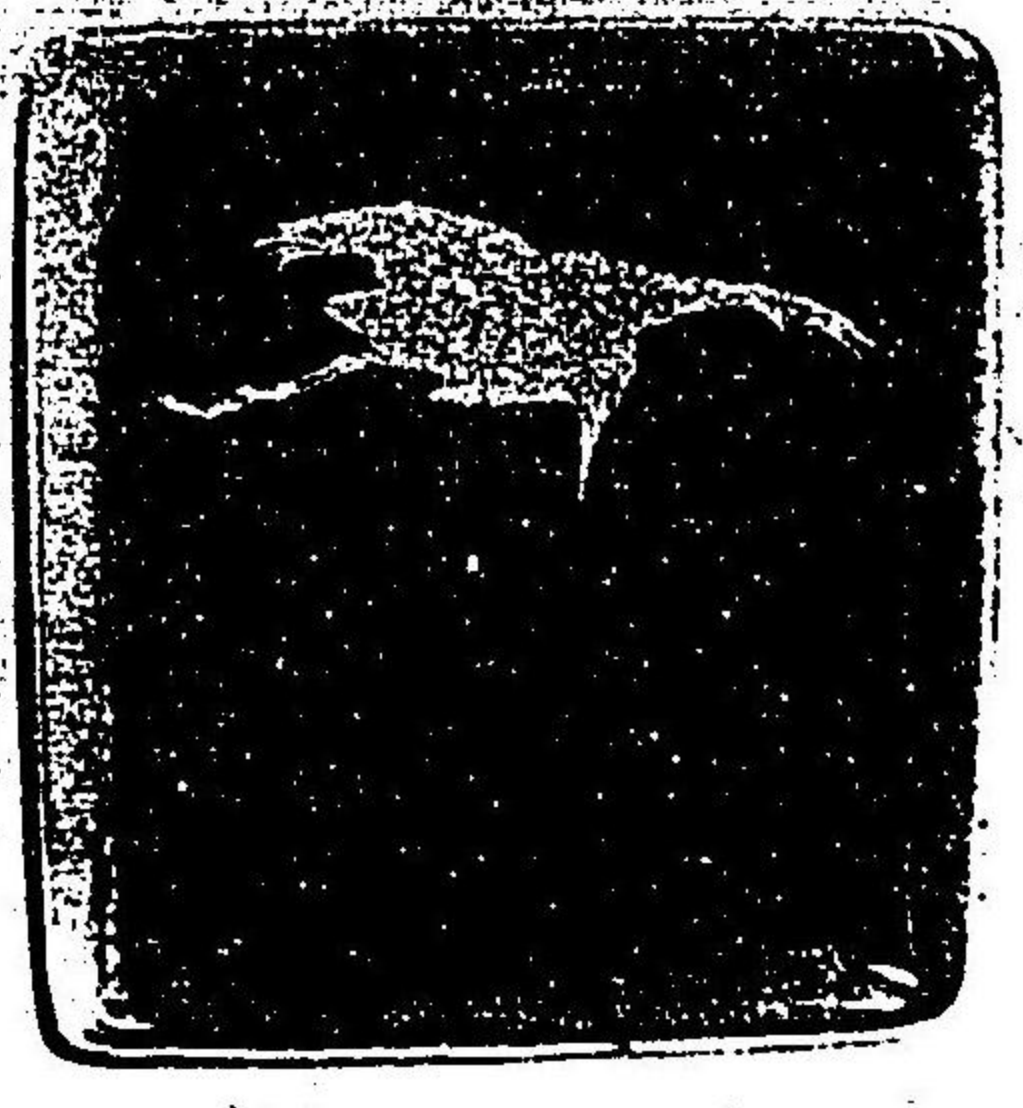
古藤書畫冊(六) (小川書畫冊) 第百六十圖

古藤書畫冊(七) (小川書畫冊) 第百六十一圖

絳嶺詩話(八) (勁嶺詩話冊) 第百六十三圖

...

絳嶺詩話(九) (勁嶺詩話冊) 第百六十二圖



雞蒔繪印籠 (第二百六十三圖)

帝室博物館藏

雞は高蒔繪にて、柳の葉は磨出なり。

二宮桃亭 桃亭は寛政年中の人、江戸の醫師にて、沈金彫に巧なり。沈金彫は漆器に陰文を彫り、金末を施せしものにて、支那製に倣ひ、享保年中長崎工人これを摸作せしを始とす。桃亭の作る所鼠の齒を以て刀に代へ、精密なる孔雀又は花草の圖を刻し、遂によく各種の筆意をも表はし得るに至れり。

古満寛哉 寛哉は五代休伯の門人なりしが、出藍の技術あるに依り、師家より古満の姓を許され、古満寛哉と號す。老後狂歌をよみ、眞砂庵道守といひけり。天保六年四月九日歿す。近世の名工、柴田是眞はこの門人也。

清水觀音堂蒔繪印籠 (第二百六十四圖)

帝室博物館藏

金地に京都清水觀音堂を蒔繪せり。

玉椿象谷 象谷は讃岐國高松の人なり。家は鞘塗を業とし、傍ら好みて彫刻をなせしが、中年に及びて一種の髹法を發明せり。其の法たるや、支那の漆法と我が國の古製とを參酌し、竹籃或は木材を質とし、緻密なる花卉草木等を彫刻し、青黄紅等の漆を以て其の彫刻したる模様を填め、其の光彩を鮮明ならしむるものなり。世人稱して象谷塗といふ。又堆墨は最も得意とする所なりき。後ち藩主松平頼恕にめされて、扶持を與へられたり。明治二年二月六十四にて歿す。

原羊遊齋 羊遊齋は更山と號す。江戸に住し、文化文政の頃、比類なき蒔繪の名工と稱せらる。其の下繪を抱一上人等に求め、多く風雅洒落なる作をなせり。

中山胡民 胡民は羊遊齋の門人にして、其の技術精巧緻密にして、最も摸古の術に長ぜり。明

治三年に歿す。其の門人に小川松民を出だせり。

陶磁工

前代に於て豊太閤茶道を好み、陶磁器の製に始めて新趣を加へ、又征韓の役従軍の諸侯多く朝鮮の陶磁工を率ゐて歸り、其の封土に窯を開かしめたり。故に徳川氏三百年間陶磁の製作は過半前代に於て基源を開きしものなり。而して茶事は當代に入りて益盛に行はれ、小堀遠州等斯道の宗匠器物の作に各新意を施せり、即ち旭輝照するが如き淡紅色を現はせし朝日燒、又陶質堅實にして蒼然たる古色ある志戸呂燒、其の他赤腐信樂伊賀の如き、何れも遠州の好みに出づ。此の時に當り京都には野々村仁清なる名工顯はれ、處々に窯を開き、茶器其の他雜品に多く佳品を出だし、京窯盛大の基を開けり。又肥前の伊萬里には吳洲權兵衛坂井田柿右衛門等、東島徳右衛門の支那傳に由り、新製に出藍の妙を隆はし、薩摩には島津侯の獎勵に由りて、牧平意等純白透明白磁に類する陶器を製し、筑前高取には五十嵐次郎左衛門各種の陶法を參酌し、又遠州の意匠を取りて、潤澤麗美なる茶器を作る。次て京都の栗田長門の萩肥前の唐津等、亦奇品を出だせり。而して昌平無事奢侈の風上下に普く、これが爲めに點茶、立生花、盆栽等の遊戯品に、又酒食の調度に精巧なる陶磁器の需用年に多きを加へ、京窯を始め各地の製陶次第に盛大を來たせり。其の昌平の極とも稱すべき享保時代に及びては、他の蒔繪彫金等の多作せられて、遂に粗造に流れしに似ず、陶磁の製作には新窯起り、熱心なる良工の佳品を製出せしもの少なからず。是れ製陶の地たる多く地方にありて、其の工人都下の如く、華奢遊惰の風に化せられざりしに由るべし。即ち此の徳川中世に業を創し、又は窯を中興せしは、京都の清水、尾張の瀬戸、加賀の九谷、出雲の出雲燒等、其の類少なからず。

かくて天明寛政の頃に及び、陶磁器の製作趣致に一變化を生じ、京窯の如き殆んど其の風趣を一新

するに至れり。是れ支那文學の流行と長崎舶載品の影響に因り、所謂文人好みと稱する支那明清の風尚を受けたるものなり。殊に陶磁器は近く支那より流行を來せし煎茶に因りて、其の製作を一變せり。近世煎茶の祖といふべきは、賈茶翁にして、姓は柴山名を元昭といひ、肥前に産れ、薙髮して禪(近支那より傳は)を學び、詩文を善くし、諸州を遊歴し、偏く奇勝を探り、遂に寶曆の頃京都に來りて、煎茶具を備へ、春は花に倚り、秋は紅葉を尋ね、自らこれを荷ひ、席を設けて、賓を待つ、風流雅客來りて、愛玩せざるは、なく人稱して賈茶翁といへり。これより煎茶の遊世に行はれ、隨ひて清國人多く茶具並に席上飾附の物品を長崎より輸入し來り、頗る世人の賞玩を惹けり。こゝに於て陶磁工の如きも、自ら支那品を摸し、煎茶器を摸し、栗田の陶工高橋道入の如き、専ら支那煎茶器を摸作し、畫家大雅堂、煎茶家餘齋等に交り、詩文文人畫の類を其の器に揮毫し、又奥田穎川の如きも、大に支那古今の陶磁を摸し、其の門に有名なる文人にして、製陶の技に長けたる青木木米を出だせり。これが爲めに一時明清風の陶磁盛に世に賞美せられ、九谷瀬戸を始め地方の陶工皆この風に化せらる。而して徳川幕政時代陶工の晩年は、遂に此の文人好みと内外の古器摸造とを以て、其の終りを告げたりき。

京窯 仁清燒、栗田燒、清水燒の類

京窯は前代に起れり。寛永年間に及び、陶工野々村氏仁清、京都各地に陶窯を開く。栗田口(今陶の初、御室、御善、薩清、閑寺、今の五條坂清、岩倉山等これなり。)其の他仁清の製陶は種類一ならず。陶器あり、砂器あり、其の陶器は多く細密の罅裂ありて、彩畫施釉甚だ巧に、大に雅致あり。信樂及び京地近傍各所の産土を用ゐ、資紳雅客の請求に應じ、意に従ひてこれを造る。其の流分れて二派となり、陶器にして、釉色軟滑、彩畫描金の法は、連綿として、栗田の陶器に傳はり、錦光山宗兵衛、丹山清海、寶山文藏等の良工出づ。又寛政年間、奥田穎川なるもの製陶を好み、栗田に窯を築き、好みて古染、附交

趾窯を摸す。其の門人に木米及び道八、龜助等の名工を出だせり。又其の一派は五條清水の磁となる。嘗て清閑寺村の陶工音羽屋九郎兵衛等も、寛永の頃より窯を開きしが、寶曆年間東山清水及び五條坂等に移り、尙ほ陶器及び砂器の一種を製せり。仁清の一派これに合し、文化に至りて高橋道八、和氣龜亭、水越與兵衛等肥の有田に倣うて創めて青華磁器を製せり。其の作指頭を以て形を造り、青華も亦甚だ巧なり。是を以て當時の所好に適し、茶家酒人之れを購需せざるなく、大に盛を來たせり。二代高橋道八、二代和氣龜亭、清水七兵衛、清水六兵衛、清風與兵衛、眞清水藏六等最も有名にして且つ一種有韻の製を専らとす。その造る所の品煎茶器酒器を多しとす。後ち各種の雜品をも出だし、其の窯、陶と磁とを兼ね、製造愈々盛なり。世人概して之れを清水燒といふ。今陶工四十戸の内、五條坂と清水とは其の業を分ち、何れも得意の作をなせり。

作家並に作品

野々村仁清 仁清は丹波の人、壯年の頃土佐國尾戸村に到り、歸化の韓人佛阿彌に従ひて陶法を學び、後ち元和中京都に來り、當時清閑寺に住せし陶工宗伯の門に入り、尙ほ陶法を學び成業の後ち京都の近郊粟田口、御室、御菩薩、清閑寺、岩倉、鳴瀧、鷹峰、小松谷等の各所において陶器を製し、遂に京窯盛大の基を開けり。其の作各種の變化あり。土質堅硬ならざれども皆雅致に富み、品位卑しからず。

白藏主置物 (第二百六十五圖)

京都 池田清助藏

白藏主は狐の老僧に化けしものにて能の狂言の所作なり。この置物能く其の風趣を寫せり。土鼠色、衣は黒釉を施せり。

水指 (第二百六十六圖)

大阪 平瀬龜之助藏

茶室に用ゐる水指にて、白釉細碎こぼりに色繪麗はしく、精好を極めしものなり。

鴨香爐 (第二百六十七圖)

大阪 村山龍平藏

仁清得意の作にて、黒吳洲くろごの彩色の如き筆意見えて、甚だ趣味あり。

幕繪鉢 (第二百六十八圖)

京都 毛利琴藏

白釉細碎美はしく、幕の繪の筆趣洒落なり。

錦光山茂兵衛 茂兵衛の祖を鍵屋徳右衛門といふ。正保二年より陶窯を洛東粟田町に築けり。其の製陶の畫様錦色燦爛たるを以て自ら錦光山と稱せり。茂兵衛は三代目なり。寶曆中將軍徳川家重の命を受け、天目茶碗俗に鷹野茶碗と稱するものを製せしより、年々この品を將軍家に調進せしといふ。

高橋道八 道八は二阿彌と稱す。文化八年京都粟田より五條に移り、和漢の陶器を摸し、又よく捏像を製す。紀州侯、薩州侯に召されて多く其の用器を製せり。其の作何れも雅致あり。後ち桃山に遁れて別窯を開けり。これを桃山燒といふ。安政二年五月二十六日、七十三歳にて歿せり。

布袋置物 (第二百六十九圖)

京都 飯田新七藏

土質粗にして彩色簡單、頗る雅致あり。

急須 (第二百七十圖)

京都 熊谷直行藏

南蠻形を摸せしものなり。

急須 (第二百七十一圖)

京都 熊谷直行藏

白土にて肩に詩を刻せり。

清水六兵衛、六兵衛は攝州の人なり。寶延中京都に來り、五條坂の陶工清兵衛の門に入りて

陶業を受け、其の後ち信樂にゆきて陶業を修めしといふ。明和中五條坂に陶窯を築き、一種の茶器類を製せり。常に常時の名家應舉、吳春を友とせり。寛政十一年歿す。

奥田穎川 穎川はもと豪商の家に生れ、製陶を好みて陶法を學び、窯を栗田に築き、支那の古陶器を摸せり。木米、龜助、喜助の徒その門に出づ。其の交趾窯を摸せしもの、如き妙味ありて世に賞せらる。文化八年五十九歳にて歿せり。

爵形香爐 (第二百七十二圖)

京都 建仁寺藏

支那古代の爵といへる銅器の形を摸せしものにて、紺緑紫などの交趾釉を施せり。

青木木米 木米の先は尾張名古屋の人なり。木米幼より書畫を好み、年十五家を出て、各地に遊び儒雅の交り多し。初め鑄工たらんことを欲せしが、難波の人藤蔭堂の説をき、其の所有せし清人朱笠亭の陶説を讀み、製陶の志を起し、享和中京都に歸り、陶工穎川の門に入りて陶業を修めしが、いくばくならずして出藍の譽あり。文化四年加賀侯の聘に應じて金澤に赴き、春日山窯を開き、居ること一年ばかりにして、又京都に歸り、専ら陶業に従事せり。されども栗田固有の陶法によらず、別に一機軸を出だしたり。また支那の古陶を摸するに妙を得たり。木米素より文字ありて當代の學者山陽竹田等と交り、書畫を能くし、風雅を好み、又意匠に富めり。さればその製する所自ら尋常の職工に異れり。天保四年六十七歳にして歿す。

梅月爐 (第二百七十三圖)

京都 熊谷直行藏

茶を煮る爐なり。白土素焼にて梅のみ彩色あり。

急須 (第二百七十四圖)

京都 熊谷直行藏

形狀釉とも交趾を寫せしものなり。

第二百六十五圖 (野々村仁清作白磁主置物)

第二百七十一圖 (高橋道八作急須)

第二百六十六圖 (野々村仁清作茶箱) (鉢、急須、茶箱、清、仁、村、野)

第二百七十圖 (高橋道八作急須)

第二百六十七圖 (野々村仁清作急須)

第二百六十九圖 (高橋道八作布袋置物)

第二百七十二圖 (奥田穎川作書形香爐)

第二百六十六圖 (野々村仁清作茶箱)

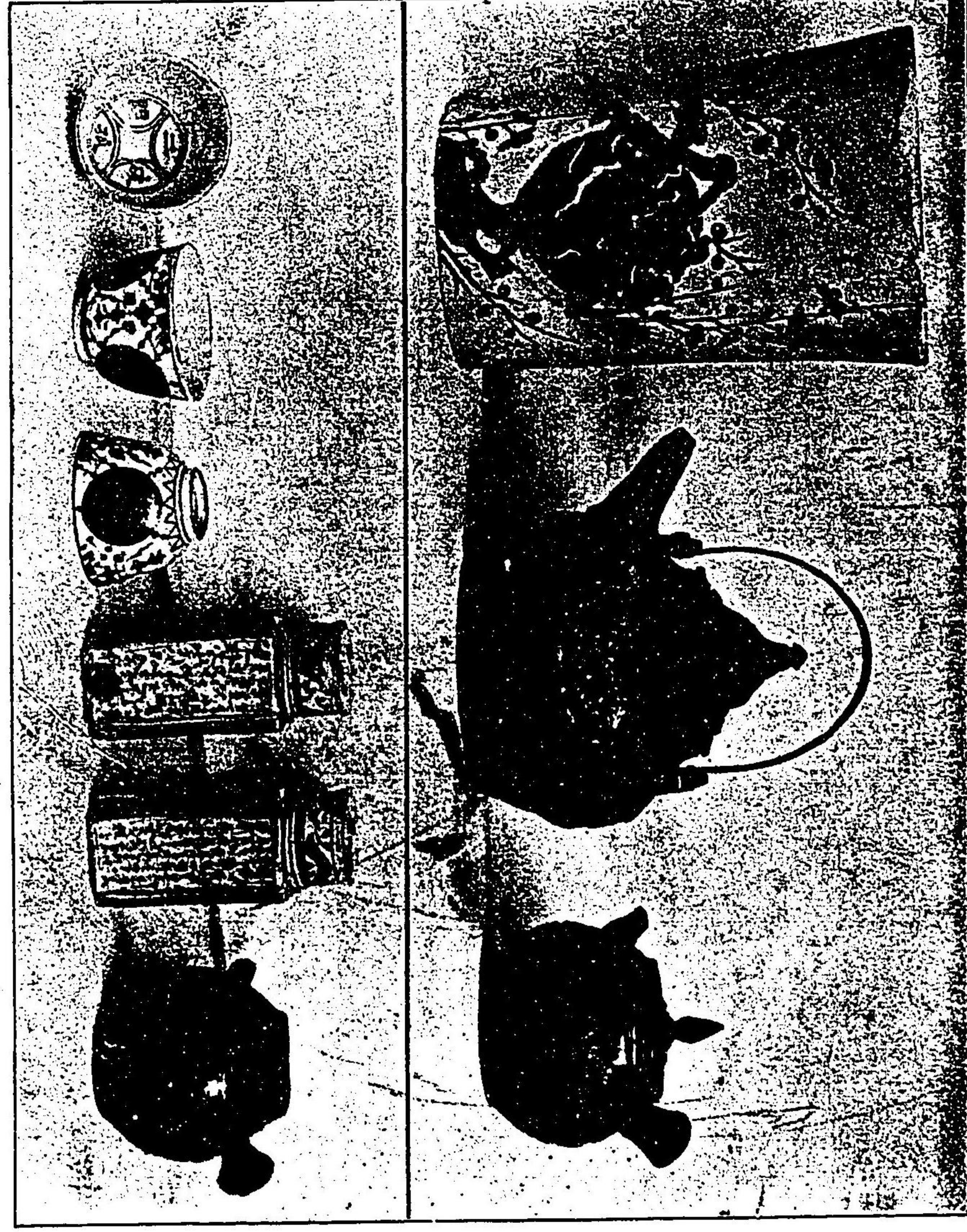
第二百七十三圖
（香木米米作梅月燈）

第二百七十五圖
（香木米米作茶筒）

第二百七十四圖
（香木米米作念贊）

第二百七十六圖
（香木米米作茶筒）

第二百七十七圖
（香木米米作念須）



(會水木米非餅凡器)
第 二 百 五 十 三 圖

(會水木米非茶器)
第 二 百 五 十 五 圖

(會水木米非盆器)
第 二 百 五 十 四 圖

(會水木米非茶器)
第 二 百 五 十 六 圖

(會水木米非器)
第 二 百 五 十 七 圖

茶碗 (第二百七十五圖)

京都 熊谷直行藏

赤繪にて支那南京様なり。

茶筒 (第二百七十六圖)

京都 熊谷直行藏

南京様にて詩を題せり。

急須 (第二百七十七圖)

京都 熊谷直行藏

白土素焼なり。

清風與兵衛 與兵衛は加州金澤の人なり。文政中京都に來り、高橋仁阿彌の門に入り、陶業を受け五條坂に開業し、和漢の古陶器及び樂焼を製せしが、後専ら青磁金襴の諸品を製せり。文久元年歿す。

眞清水藏六 藏六は山城國久我村の人なり。年十三にして陶業に志し、叔父和氣龜亭に學び、好みて和漢の古陶器を摸し、遂に一家の風をなしぬ。

乾山燒

乾山燒も亦京都に出づ。乾山は有名の畫家尾形光琳の弟なり。元祿年間京師鳴瀧村に住し、好んで仁清の陶法を倣ひ、又阿蘭陀の釉法を摸し、一種の茶器雜品を製す。晩年に至り江戸に來り入谷村に住し製陶せり。人之れを入谷乾山と稱す。其の質京都の作に比すれば較軟なり。每品紫翠深省紫翠乾山の落款あり。其の器には椀を用ゐるものあり、手頭を以てするものあり、共に樂焼に類せり。

作家並に作品

尾形乾山 乾山は光琳の弟なり。學問及び茶事を藤村庸軒に學び、畫を狩野安信に學びしと

ぞ。曾て陶窯を洛西鳴瀧村に築き、好みて陶品を製し、阿蘭陀風の釉を用ゐ、種々の自在畫を施し、自費を加ふ。頗る雅致ありて、時人の激賞を博せり。後江戸に來り、入谷村に窯を築く。寛保三年八十一歳にして歿す。

縞模様鉢 (第二百七十八圖)

京都 熊谷直行藏

横縞に梅花の模様を點す。こゝには底部の落款を出だせり。

松繪水指 (第二百七十九圖)

京都 池田清助藏

雪中の松及び椿の繪あり。

永樂燒

永樂燒も亦京都に出づ。其の先き茶用の土風爐を作るを業とす。十一世善五郎保全、文化年間始めて磁器を製し、和漢の古器を擬製する事に巧なり。就中赤酸化鐵を塗色し、後ち粉金を以て古紋様を描畫せるもの大に世に賞せらる。蓋し明初永樂年製の磁器に基けるものなり。當時幕府徳川氏の枝族紀伊侯之れを愛眷し、文政十年始めて保全を招き、同國西濱の庭前に於て製陶せしむ。之れを世に紀州の御庭燒と云ふ。此の時候永樂の銀章を賜ふ。爾來永樂を以て氏とし、且つ其の製品の名に被らしめ、永樂金襴手と稱す。金光燦爛金襴織の如きを以てなり。其の雜彩のもの單に錦手と稱する其の義亦同じ。十二世善五郎回全なるもの九谷窯の爲めに聘せられ、金襴手の製法を傳ふ。爾後該地の陶工亦大に其の技を進むと云ふ。

有田窯

有田窯は肥前國松浦郡にあり。慶長三年鍋島直茂の朝鮮より歸るや、陶工の隨ひて歸化するもの甚だ多く、窯を所々に起す。李參平といふもの白堊を松浦郡泉山に檢出し、始めて清潤潔白の磁

第二百八十七圖(肥前國松浦郡産物)

第二百七十八圖(尾形乾山作縞模様鉢)

第二百七十九圖(尾形乾山作松繪水指)

を。曾て陶器を洛西鴨池村に製し、好んで陶器を製し、阿蘭陀風の曲を用ひ、種々の目玉を施し、
費を加ふ。頗る雅緻ありて、時人の激賞を博せり。後江戸に來り、入谷河に窯を築く。其は、
十一歳にして歿す。

鍋島漆師 第二百七十八回

京都 熊谷庄行藏

漆師に梅花の模様を點す。こゝには底部の落款を附せり。

松繪水指 第二百七十九回

京都 池田清藏

中の松及び椿の繪あり。

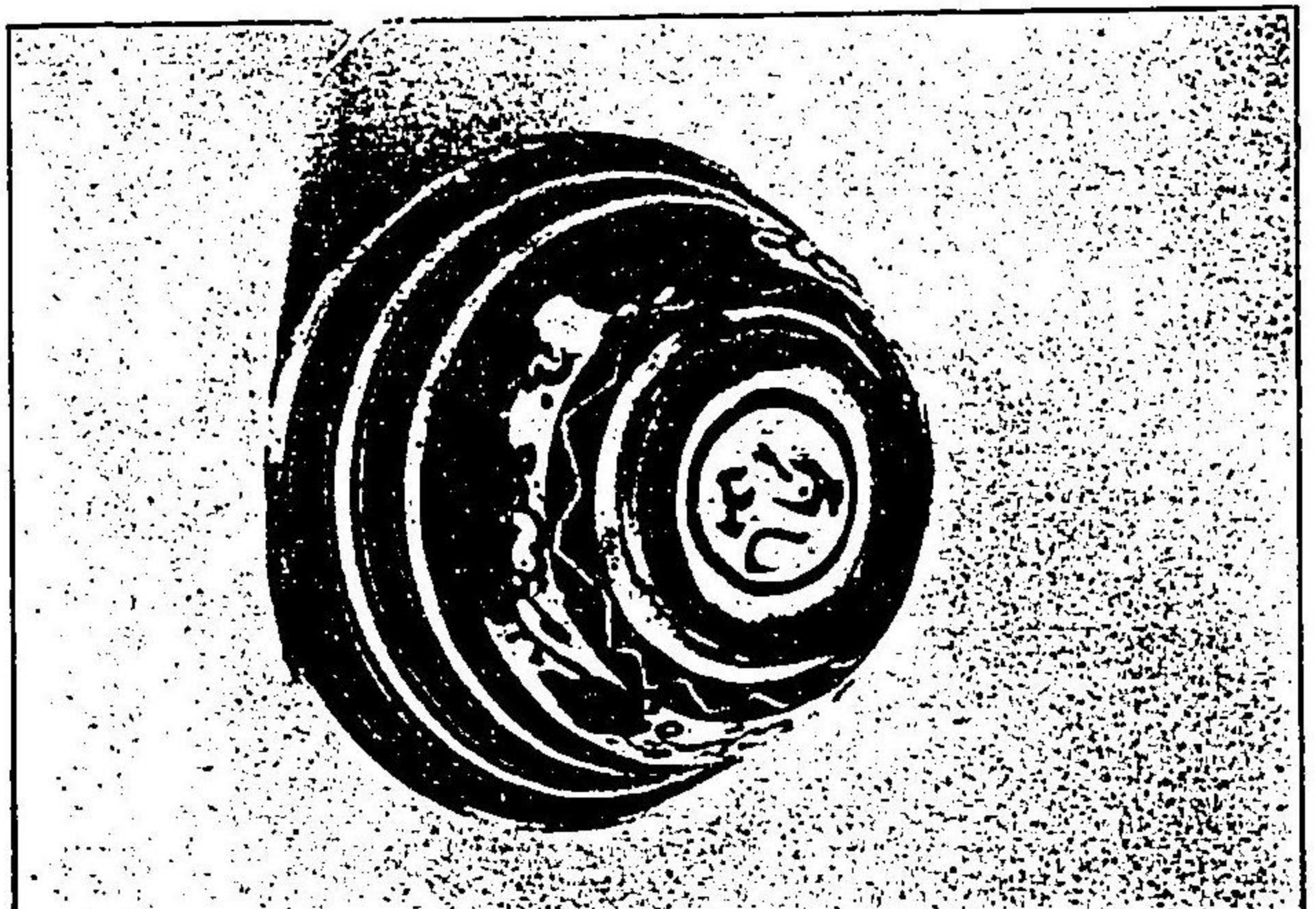
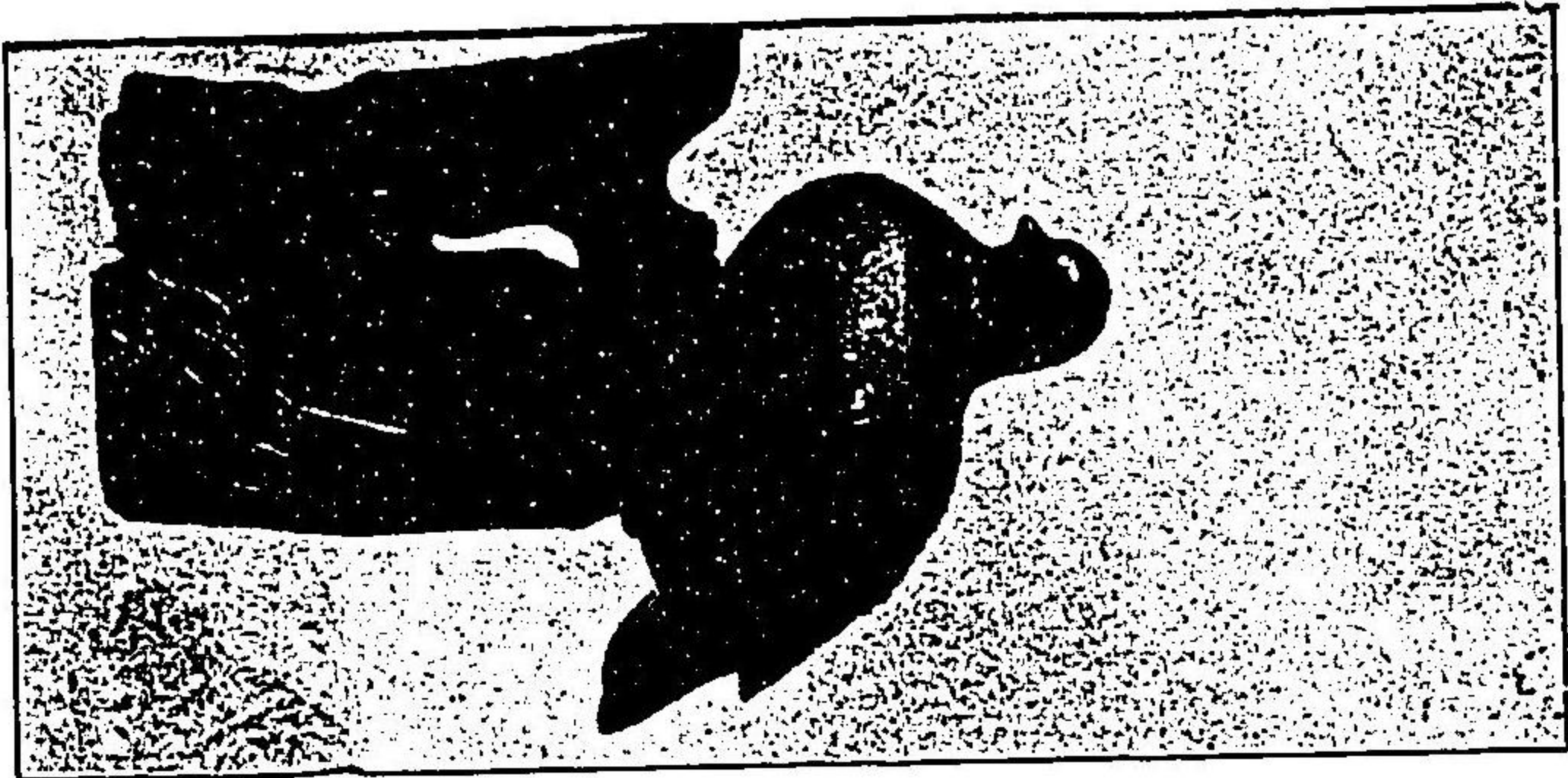
永樂燒

永樂燒 亦京都に出づ。其の先、赤川の土風爐を作るを業とす。十一世、五郎保を文化年間

始めて磁器を製し、和漢の古器を擬製する亦に巧なり。就中赤黄化妝を特色とす。後、粉金を以て古
紋様を畫せるもの大に世に賞せらる。蓋し、明初永樂年製の磁器に當けるものなり。當時、
徳川氏曾枝族紀伊侯之れを愛眷し、文政十年始めて保全を招き、阿蘭陀風の庭に於て其の
之れを世に紀州の御庭燒と云ふ。此の時、永樂の銀章を賜ふ。爾來、永樂を以て氏とし、且つ其の
製品の名に被らしめ、永樂金襴手と稱す。金光燦爛、金襴織の如きを以てなり。其の鑲嵌、
錦手と稱する其の義亦同じ。十二世、善五郎回全なるもの九谷窯の爲めに聘せられ、金襴手の製
法を傳ふ。爾後、該地の陶工亦大に其の技を進むと云ふ。

有田窯

有田窯は肥前國松浦郡にあり。慶長三年鍋島直茂の朝鮮より歸るを、陶工の請ひて、
其の長を多く、其の技を傳ふ。其の先、赤川の土風爐を作るを業とす。十一世、五郎保を文化年間



器を製す。是れより遠近製陶を業とするもの相率ゐて來聚し尋て一部落を爲せり。爾來陶業大に進歩し、白磁に青華を描き、氷裂紋を青磁に現し、模形を白磁に施し、之れを畫様に換ふる等、何れも製作せられたり。

伊萬里の人東島徳左衛門嘗て長崎來舶の支那人總官某に就き、盡く彩畫着色の法を得、之れを吳洲權兵衛坂井田柿右衛門等と相謀り、多年の試験を経遂に發明する所あり、始めて各色及び金銀泥の模様を施し、これを齎らして長崎に至り、清商に售れり。これを陶磁器を外人に賣與するの權與とす。實に正保三年なり。是れより屢、清客蘭商と相貿易し、盛に描金彩畫の者を製するに至れり。寛文年間に至り、有田の工人辻喜左衛門(二代)と云ふ者あり。頗る良工の名あり。時に仙臺侯伊達氏、江戸の陶器商今利屋五郎兵衛を有田に遣し、磁器を求めしむ。是に於て辻喜左衛門所製の器を齎し、歸り、之れを侯に納る。辻氏の製世に傳播し、後之れを京都に獻ず、内廷命あり、以後年々調進せしむ。其の磁たる青華淡清品位極めて高尚なり。其の菊章を附するものは、特に御器及び皇族諸家の用具に係る。喜左衛門の孫喜平次、安永三年常陸大掾に拜す、頗る良工の名あり。嘗て一日窯戸を啓く、一器臺上より落ち、他器と相抱合したるを見る、出だして之れを壞けば、中に一個の磁器あり、蓋潤常に異なり、て他の比にあらず。此に於て大に發明する所あり、精巧の器は別に外包の砂器を製して、其の内に安置し、蓋定して糊藥を縫合の所に施す。此の製を極真と云ふ。其の縫合に銹過せざるを帽子入りと云ふ。而して極真なるものは、毎に外器を毀つを以て、重貴の品にあらずれば、容易に之れを製せずと云ふ。

天保中有田の豪商久富與次兵衛と云ふ者あり。家素と富み且つ風流好事の人にして、畫術及び茶事を善くし、磁器の形狀畫樣等を工夫して、之れを各工に授け、大に進歩を助けけり。親ら長崎に

來往し盛んに有田磁器を外商に售る。其の器物には皆三保の銘を記せり、三保は與次兵衛の號なり。大小花瓶及び皿附の茶碗(咖啡碗)等外國向の品を造る事此に始まる。

作家並に作品

坂井田柿右衛門 柿右衛門は肥前松浦郡有田郷の人なり。豊臣氏の陶器師なりし竹原五郎七に就て製陶の法を習ふ。伊萬里の人東島徳左衛門長崎にて清國人總官より磁器に金銀泥着色の法を受け、これを柿右衛門に謀り屢試みしも其の功をなさざりしが、遂に柿右衛門、吳洲權兵衛と謀り種々工夫して、其の法を得、之れを自から製せし所の磁器に施し、遂に當時に於て外人にまで賞美せらるゝに至れり。

八角花卉繪鉢 (第二百八十圖)

京都帝室博物館藏

磁製色繪にて圖畫よく整へり。

唐津燒

窯は肥前國にあり。世に掘出唐津と稱するは、寛永年間製する所のものなり。陶質堅く青黒を帯び、其の高臺の内に皺紋あるを以て良とす。其の形狀多くは正圓ならず。其の掘出と名づくる故は、火候度に過ぎ、或は窺み或は缺損するものありて、工人之れを不用のものと爲し、土中に埋めしを後世に至りて掘出し得て之れを賞し以て名とせしなり。又朝鮮唐津と稱するは、寛永以降製する所のものにして、朝鮮の土及び釉を用る唐津に於て製す故に、火ばかりの稱あり。蓋し土、顏料皆他邦のものにして、唯火のみを本邦のものなりと云ふの意なり。土質は赤黒にして青白を雜へたる釉を流布す。水壺、皿鉢等の雜器多し。

高取燒

高取燒は筑前國高取に於て製する所のものなり。慶長の初め國主黒田長政征韓の時、朝鮮人の從ひて歸化するものあり、更名して八藏と云ふ。最も製陶の名手と稱す。

又肥後の國主加藤清正に從ひて歸化するものあり、更名して新九郎と云ふ、俱に高麗韋登の人なり。八藏は新九郎の婿なるを以て、長政、新九郎を肥後より招く、新九郎も亦陶法に巧なるを以て二人に命じて陶器を造らしむ。世に是れを古高取と云ふ。土質堅硬にして緻密なり。釉は柿澁色にして濁黄或は眞黒色を雜釉し、色澤美麗なり。

寛永年間肥前唐津の人五十嵐次郎左衛門と云ふものあり、能く瀬戸の法を得且つ諸國の陶法を兼ね善くす。黒田侯忠之これを召し、八藏と共に高取に於て陶器を製せしむ。是れより盛に諸器を製出す、殊に點茶器は小堀遠州の意匠を傳へ、頗る佳品を出だす。其の陶質緻密にして、其の釉は白色淺碧又は暗灰色を帯び、並に潤澤あり。陶窯火度によりて自ら金色を現はし、甚だ美なり、世に之れを遠州高取と云ふ。寛永七年窯を穂波郡白旗山麓に移せり。

大河内燒

大河内窯は肥前有田の近隣にあり。享保年中鍋島侯の命に由りて開窯せり。其の初め藩士等をして其の工に充て、特別精良の品を作らしめ、以て進獻の用に供し、又各諸侯の需に應じ、其の費用を惜まず、製せしものなり。碗皿の如きは高臺に櫛齒狀の青華紋を描き、公窯の製なるを證す。今呼びて櫛手と謂ふ。世人偶、之れを得れば甚だ之れを貴重せり。其の品質最美にして、意匠餘りあり。後漸く衰へ粗製に流るゝに至れり。

作品

睡眠童子置物 (第二百八十一圖)

帝室博物館藏

磁製色繪にて畫帖に倚り睡眠の様頗る温雅なり。安永頃の製なるべし。

薩摩燒

薩摩燒の創始は文祿年間征韓の役國主島津義弘父子從軍歸國の時歸化の韓人芳仲平意等若干名を率來れるに起因す。即ち彼等相議して高麗傳の陶業を開き、一の國産と爲さんことを請ふ。時に義弘は大隅國帖佐郷に居城し、芳仲等を召し陶窯を建設し、以て器物を造らしむ。之れを薩摩燒の始めとす。義弘深く茶を嗜む。故に己れが意匠を加へて種々の陶器を造らしむ。芳仲等大に勉むる所あり。其の器質緻密にして青黄黒を兼ねたる釉を施せり。又蛇蝎と唱ふる白色凝釉の斑々たるものあり、之れを良器とす。義弘其の最も適意のものには、自ら捺印して愛賞せりといふ。今世に傳へて御判手と稱するもの、即ち是れなり。又更に支那黄河の産土及び顔料等を求めて茶器を造らしむ、今之れを古帖佐の「火ばかり」と稱す。其の後義弘居城を加治木郷に移し、又芳仲を同郷龍口の地に居らしめ、製陶場を築設して工人を教授せしめたり。

又朴平意は義弘の命に由り領内に於て専ら各種の釉藥の探索に従事し、頗る良質用ゆべきものを發見せり。義弘深く之れを歎賞し、直に苗代川村に製陶場を建設し、以て陶器を製せしめしに、果して良器を得たり。乃ち平意をして陶器場を總理し、工人を教授せしめたり。遂に白磁に類する純白透明の器及び朝鮮摸造の刷毛目、三島寸古祿などを製出するに至れり。

作品

茅屋の置物 (第二百八十二圖)

帝室博物館藏

陶製白釉にて寶曆頃の作なるべし。

狗兒香爐 (第二百八十三圖)

京都 池田清助藏

寛文頃の製陶にて形狀穩雅なり、老工の手に成りしものなるべし。

冠形香爐 (第二百八十四圖)

大阪 上野理一藏

金入色繪にて精巧の作なり。寛政頃の製なるべし。

萩燒 附松本燒

萩燒は長門國阿武郡萩に於て製する所のものなり。慶長三年毛利輝元の朝鮮より歸るや、陶工李敬なるもの投化して此の地に住し、名を高麗左衛門と改め製陶を事とす。故に其の器高麗品に似て高臺に一の缺所をなすを常とす。世に割高臺と云ふ。凡そ朝鮮傳の陶器其の高臺に缺所をなすは、特り此の地の製のみならず、薩摩燒、肥後の八代燒其の他皆同じ、以て其の傳來を徴するに足る。其の器質緻密ならず、釉色白黄にして淡薄なり。

松本燒は長門國松本にあり。大和三輪村の人、三輪休雪といふもの喜んで樂陶を製し、長門に來り藩侯に仕ふ。後韓黨を創開し松本燒と稱す。其の製萩の陶に同じきを以て、人呼んで松本萩と云ふ。寶永中に歿す。今の東藏に至つて七世なりといふ。

出雲燒

出雲燒は樂山燒、布志名燒の二種あり。前者は慶安年間島根郡松江の樂山に於て始めて製出せらる。延寶年中長門の工人に倉崎權兵衛といふものあり、萩の陶工高麗左衛門の門人にして製陶を善くせり。松江侯之れを聞き聘して樂山燒を改良せしむ。萩の土及び釉を用ゐて之れを作りしが故に、其の質萩燒に似て一層の奇を帶ぶ。多くは抹茶碗、水指等の類なり。世人權兵衛燒と稱して之れを珍賞す。權兵衛の歿後門人加田半六その製を學び、二代にして絶ゆ。

寛政年間出雲の國主松平治郷致仕して不味と號す。深く點茶を好み、終に一家の茶式を定む。

當時陶工長岡住右衛門に命じて茶器を造らしむ。住右衛門不昧の意匠に依りて高麗風の諸器を製す。文化十三年江戸なる藩主の別墅中にも窯を築き、又種々の茶器を作る。其の二代三代また住右衛門といふ、皆樂山に在り。子孫業を傳へて今に至る。

布志名焼は意宇郡布志名村より出づ。明和元年船木與次兵衛といふものゝ創始に係る。其の陶器軟釉にして光滑あり。又御立山に樂燒工土屋善四郎と呼ぶものあり。不昧召して陶師とす。安永中布志名に移り、公の指示に従ひて茶器を製し、頗る巧手の名を得たり。爾來布志名の陶名四方に喧傳し、二代善四郎、三代善六、四代善六等其の業を繼げり。

備前燒

窯は備前國和氣郡伊部村にあり。前代より森木村寺見大辨、頼宮金重の六氏舊來經驗の法を傳へて日用の雜器又茶器香爐置物の類を製せり。土質極めて堅硬にして自然の色澤を有し、殊に古朴の雅致あるを以て賞せらる。

正徳年中に雲貞といふもの徳利瓶類の作に名あり。延享年間に木村甚七といふもの巧に小獅子を作る。世に五分獅子と稱せらる。又寶曆年中平四郎といふもの意匠に富み、各種の置物を作る。明和年中作十郎亦置物の作に名あり。享和年中森良明といふもの茶器に巧なりき。天保三年に至り燒製の便法を按出し、古來の大窯を廢して數個の小窯を造り、舊來三十日餘晝夜間斷なく燒さしを、日數僅に十二三日にして燒き出だせり。されどこれが爲めに品質は大に愈惡となり、自ら濫製に流るゝに至れり。

作品

猿置物 (第二百八十五圖)

男爵 九鬼隆一藏

第二百八十四圖
(備前燒冠形香爐)

第二百八十五圖 (備前燒猿置物)

第二百八十四圖

(坂井田 右衛門作八角花卉鉢)

第二百八十三圖

(備前燒狗兒香爐)

第二百八十一圖

(大河内燒睡童子置物)

第二百八十二圖

(備前燒茅屋置物)

第二百八十六圖

(備前燒布袋置物)

當の時代は、長閑な生活を送り、文化の発展を遂げた。その結果、多くの優れた作品が世に送り出された。その中でも、特に有名な作品は、その美しさと巧みさで、後世に大きな影響を与えた。

(大佛殿の彫刻) 第 二百八十一圖

(彌勒菩薩像) 第 二百八十二圖

(彌勒菩薩像) 第 二百八十六圖

また、この時代には、多くの優れた彫刻作品が世に送り出された。その中でも、特に有名な作品は、その美しさと巧みさで、後世に大きな影響を与えた。

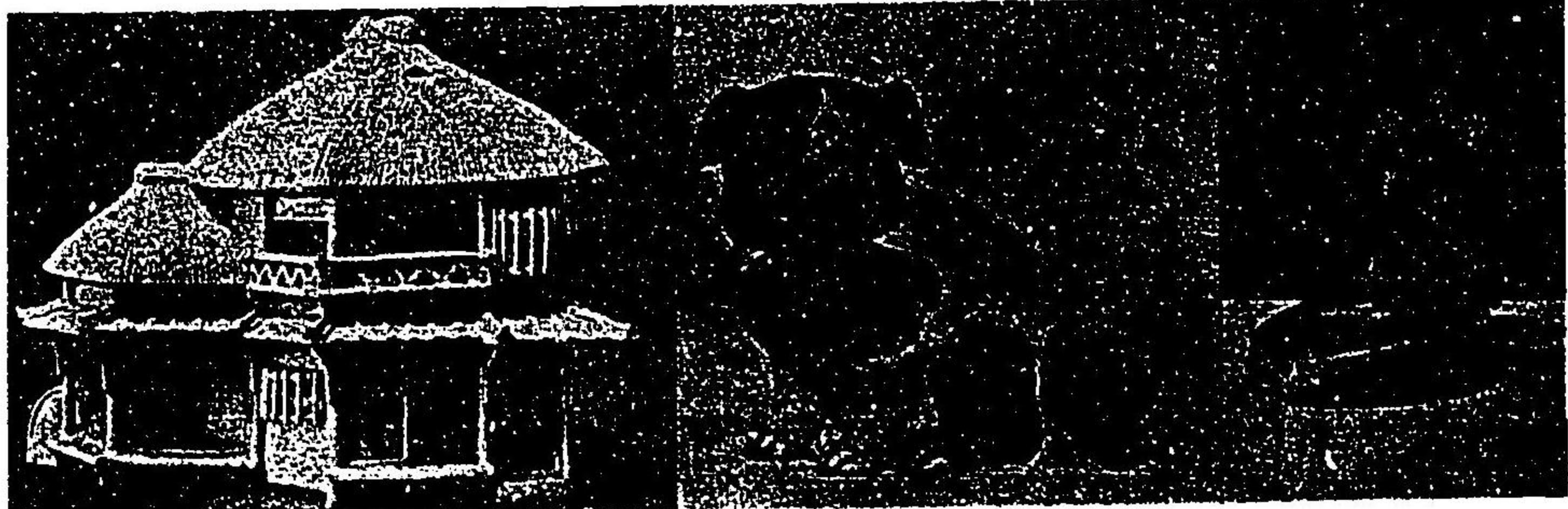
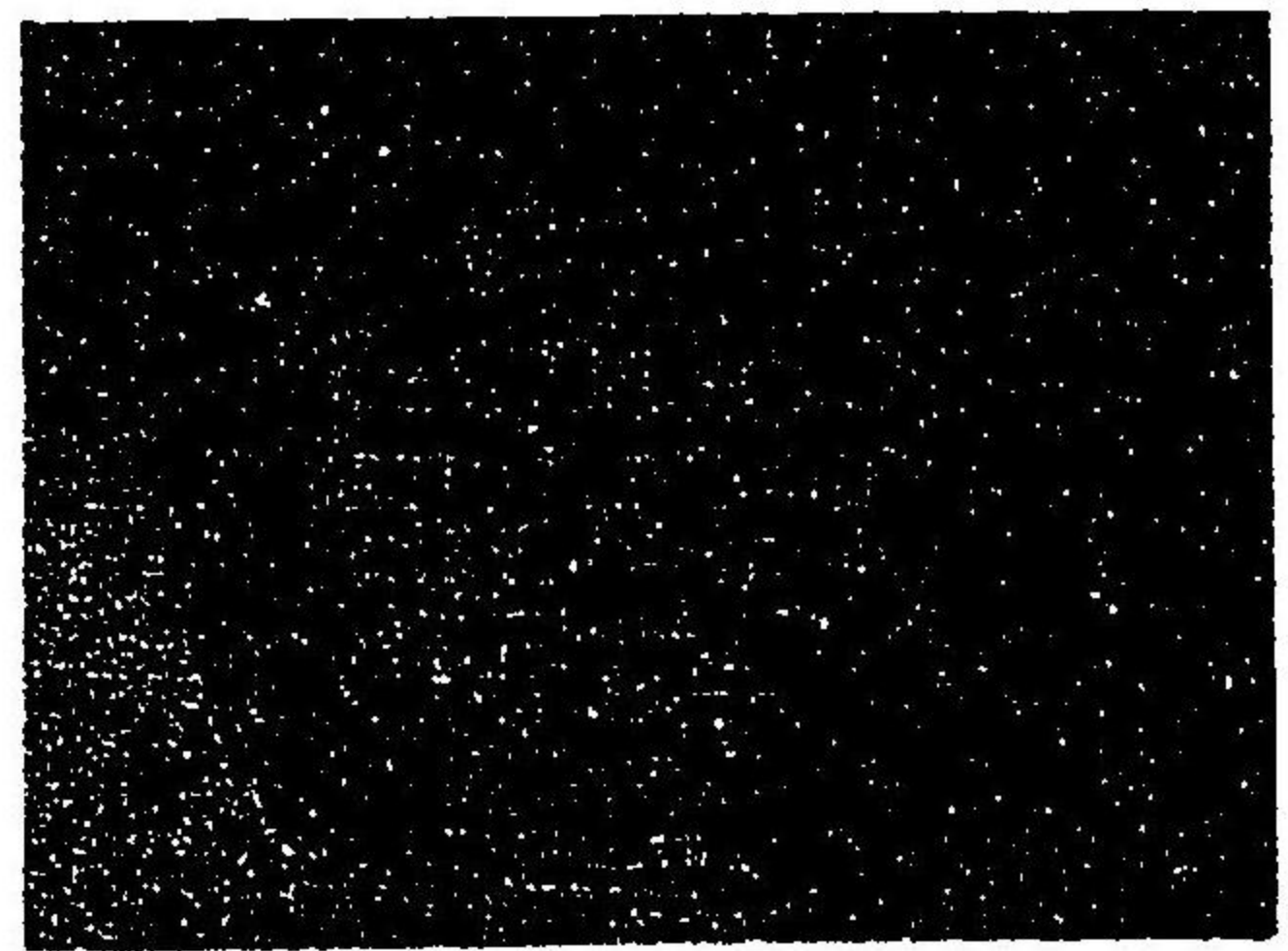
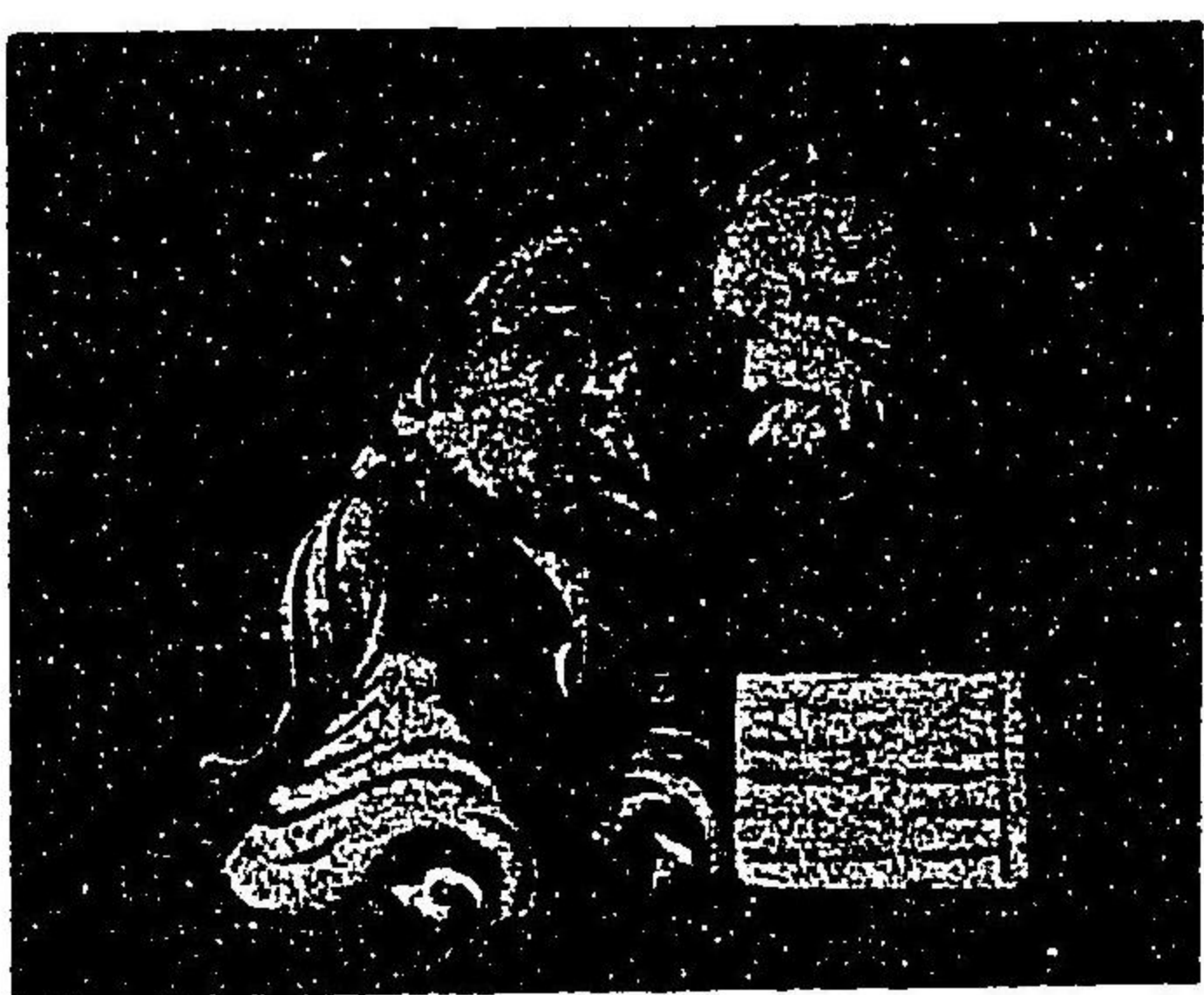
この時代には、多くの優れた彫刻作品が世に送り出された。その中でも、特に有名な作品は、その美しさと巧みさで、後世に大きな影響を与えた。

また、この時代には、多くの優れた彫刻作品が世に送り出された。その中でも、特に有名な作品は、その美しさと巧みさで、後世に大きな影響を与えた。

この時代には、多くの優れた彫刻作品が世に送り出された。その中でも、特に有名な作品は、その美しさと巧みさで、後世に大きな影響を与えた。

また、この時代には、多くの優れた彫刻作品が世に送り出された。その中でも、特に有名な作品は、その美しさと巧みさで、後世に大きな影響を与えた。

この時代には、多くの優れた彫刻作品が世に送り出された。その中でも、特に有名な作品は、その美しさと巧みさで、後世に大きな影響を与えた。



高さ二尺八寸の大作にして、篋痕深くして雄健の趣を表はし、色澤亦美なり。猿の臀部に森克長作の銘あり。

布袋置物 (第二百八十六圖)

大阪 村山龍平藏

製作極めて精巧にして、光澤漆の如し。袋は藍色の釉を施し、唐草を描けり、これを繪備前と云ふ。

鳩置物 (第二百八十七圖)

京都 池田清助藏

これも繪備前にして、鳩の羽毛悉く真物の如く着色せられたり。

尾戸焼

尾戸焼は土佐國土佐郡高知の尾戸に於て製する所のものなり。承應二年土佐の國主山内忠義、京都の良工野々村仁清の門人久野正伯を大阪より召し、窯を尾戸に開きて製出せしめたるものなり。既にして正伯大阪に歸る。延寶中森田光久と云ふ者、乃ち更に命を受けて大阪に至り、正伯に就きて學ぶこと數年、又諸國に遊歴して各地の陶場を探り、遂に朝鮮の御本に倣ひて一種の茶器を製す。其の松竹梅を畫きし茶碗の如きは、茶家の殊に珍愛する所なり。

淡路焼

淡路焼は天保年間加集珉平と云ふ者、京都五條坂の陶工尾形周平に從ひ、陶法を受け、窯を三原郡稻田村に開きしに始まる。藩主蜂須賀氏之れを聞き、資を出だして官窯となし、珉平をして陶業を統督せしむ。其の器土質軟にして、釉畫鮮妍なり。又青色若しくは黄色の二種あり。世人或は珉平焼と呼ぶ。珉平の子孫能く其の業を傳へ、遂に淡路の特産となる。

作家

加集珉平、珉平は淡路國稻村の富豪なり。人と爲り國書に通じ、茶事を能くす。嘗て淡路國産を興さんことを志し、京都に出て五條坂の陶工尾形周平に就て陶法を學び、天保五年淡路國三原郡伊賀野村に陶窯を築き、専ら心を陶業に用ゐ、安南燒、古染附、繪青磁等を摸して精巧のものを出せり。其の産出の價額、近隣十一村の收穫米價と均しきに至る。文久二年歿す。

紀州燒

紀州燒は天保年間國主徳川氏京都の陶工永樂善五郎保全を招き、窯を開き製せしむる所のものなり。其の器は交趾風の陶窯を製す。而して釉色は紫黃青の三種の釉を施せり。其の器頗る研美のものあり。保全歿して後、其の地の工人業を傳へて今に至る。

三田燒

三田窯は攝津國有馬郡三輪神社の傍にあり。天明八年神田宗兵衛と云ふ者始めて陶窯を築き、京都より陶工龜助、肥前より太一郎、定次郎を呼び、青華磁器を製す。享和初年始めて同郡香下村に於て青磁の釉料を發見し、千辛萬苦遂に支那明時代の作に等しき青磁を製出するに至る。其の巧殆んど眞に逼る。又天保六年九谷陶工松平菊三郎といふもの、此の地に來り陶業に従事し、赤畫を善くせり。後去つて九谷に歸る。爾來猶之れを製出すれども昔時の巧に及ばず。

九谷燒

九谷燒は加賀國江沼郡九谷村にあり。慶安年間大聖寺藩主前田利治、其の臣後藤才次郎、田村權左衛門の二人に命じて陶窯を築き、製陶せしめたるを以て之れが濫觴とす。其の質頗る瀬戸に類す。然れども當時の製、苦窳多くして未だ精良なること能はず。利治の男利明父の志を繼ぎ、萬治年間後藤才次郎を肥前の有田に遣し、磁器彩畫の法を學ばしむ。然れども有田の工人深く、其の法

を秘して容易に之れを傳へず。是に於て後藤身を委して陶家の傭奴となり、勞役すること凡そ三年、始めて主家の信用を得、其の媒介に依りて妻を娶り、陶業に従事することを得、日夜電勉して、悉く製陶の秘訣を得たり。而して業既に成るや、妻を捨て、逃れ歸り、其の主前田利明に復命し、尋て陶土を吸坂に發見し、之れを試むるに果して良品を得たり。今吸坂に秘藏する所の佛坐の蓮臺は、其の試作なりと云ふ。偶、畫家久剛守景來たりて、金澤に遊ぶ。因つて之れを招き、陶器に描かしめたるに、陶工畫手兩ながら相備はり、大に佳品を出せり。世にこれと呼びて、守景下畫と稱し、頗る珍貴す。幾許ならずして、其の業衰ふ。文化七年大聖寺の商賈吉田屋傳右衛門、陶窯を再興し、交趾風の釉を用ゐ、茶器を製せり。天保六年宮本屋理右衛門といふもの、吉田屋の後を受け、陶畫工飯屋八郎右衛門をして、赤繪に金彩を加へしむ。八郎右衛門模様を古墨譜に求め、古雅にして麗美なる彩色を施せり。又京師の陶工永樂善五郎和全も亦加州に行き、赤地金襴手を製出せりといふ。近時に至るまで、其の製する所亦繪金襴のもの多し。

作家

後藤才次郎、才次郎は加賀の人なり。萬治年中藩主前田利明、才次郎を肥前に遣し、陶法を習はしむ。才次郎身を奴僕にやつし、陶場へ入込みて、其の蘊奥を探りて、潜にのがれ歸り、九谷に於て陶窯を開き、且つ當時有名の畫工久剛守景を金澤より招き、陶畫を畫かしめしかば、陶工畫手相備はり、頗る精巧のもの出づ。後世之れを古九谷燒と稱して珍重せり。

信樂燒

近江の信樂燒は元和八年徳川幕府命じて白腰附耳の茶壺を作らしむ。爾來尤も茶壺に名あり。此の壺久しく茶を貯へて香味を變ぜずと云ふ。寛永中茶家小堀政一工人に命じて更に一種の茶

器を作らしむ。其の器前製に比すれば一層精巧なり。之れを遠州信樂と云ふ。又陶工仁清新兵衛等信樂の土を取りて製せしものを仁清信樂、新兵衛信樂と唱ふ。

萬古燒

萬古燒は元文年間伊勢國桑名の豪商沼浪五左衛門(守方又秀)と云ふ者あり、其の地の小向村に於て始めて之れを製す。五左衛門點茶を好み千家の門に遊ぶ。好みて樂燒を造り、又交趾或は和蘭の彩色釉畫を摸し、其の製眞に逼る。然れども工人にあらざるを以て價を求めて之れを需がず賞翫するものあれば之れを興ふ。天明六年幕府命じて五左衛門を江戸に召す。五左衛門因つて居を江戸小梅村に卜し、専ら陶器を作り、萬古の印を欸す。世に古萬古又江戸萬古と稱し貴重する所なり。亦一種萬古青磁と稱するものあり、支那の青磁に似ず青色鮮明琅玕の如く、甚だ愛すべし。其の何れの時に亡びたるを知らず。其の品又至つて稀なり。

天保年間に至り桑名に松本屋某有節と稱するものあり、陶法を巧にし、樂燒を製し、又古人の器を摸造す。而して五左衛門の孫五郎兵衛に乞ひ、其の器に萬古の印を欸せり。現今此の傳に由り盛に製出せり。

瀬戸燒

尾張國瀬戸窯にて磁器を製出するは享保年間加藤民吉の創始に係る。抑、瀬戸は古來陶器に名ある地にして、其の業甚だ盛なりと雖も、單に陶器を造るのみにして、磁器を製することなし。享和中陶工加藤吉左衛門の弟民吉といふもの肥前有田郷に至り、製磁の妙訣を探り、四年を経て舊邑に歸り、細かに土石を檢し、青華磁器を製することを得たり。後ち岡村皆製陶を業とし、進歩今日に至る。

作家

加藤民吉 民吉は尾張瀬戸の陶工なり。享保中瀬戸の陶業の衰頹するを慨し、到底古法を墨守すべからざるを論じ、試に新窯を築き、南京染付風の磁器を燒さしが、研究の法未だ至らざりしため、皆意の如くならざりき。後ち民吉奴隸の風をなし、九州に至り、平戸、圓山高田、有田の間を歴遊し、遂に其の秘術を探り得て、瀬戸に歸り、改良を計る。これより新製磁器を染付燒と稱し、舊陶器を本業燒と稱して、區別して製出するに至れり。新製燒は獨り瀬戸に止まらず、延いて美濃國土岐郡多治見村に及びたりといふ。

美濃燒

美濃窯にて磁器の創始は文化元年にあり。大阪の陶商西川茂平といふもの肥前の磁器を齎らし、土岐郡多治見村に來り、之れを摸本とし、磁碗を作らしむ。是れ磁器を造るの始めなり。既にして笠原妻木、一の倉の諸村に及び、今土岐郡内の陶窯概ね百三十所あり。其の業頗る盛なり。陶質透明にして、青華磁器のもの多し。

豐樂燒

豐樂燒は尾張名古屋の近傍にあり。天保年間豐助と云ふ者創製す。其の器樂陶に原づく。故に此の稱あり。豐助の製するもの多くは樂陶の外に、漆し、蒔畫を施せしものにて、頗る世に行はる。下品にして、茶家の用に供するに堪へず。唯日用の食具菓子器の類に止まるのみ。

作家

大喜豐助 豐助は筆札及び茶道又俳句をよくせり。天保十三年尾張藩の陶器師となれり。豐助陶器の外に、漆を塗り、いろくの蒔繪を施し、裏面には樂燒の陶質を存することを發明し、豐

樂燒として世人にもはやされたり。安政五年十一月十三日歿す。

相馬燒

相馬燒は磐城國宇多郡中村にあり。明暦年間創製せる一種の砂器なり。是れより先き相馬氏の臣田代某命を受け、京師の野々村仁清に就きて陶法を學び七年にして歸る。其の製する所陶質粗糲にして灰色釉を施し、常に走馬を墨畫す。其の下畫素と狩野尙信の筆を用ふといふ。此の窯相馬氏の領地にあるを以て相馬燒と呼ぶ。

今戸燒

今戸燒は武藏國豐島郡今戸村にあり。貞享年間土器の工人白井半七と云ふ者あり始めて今戸に於て點茶に用ゐる所の土風爐を製し、又火鉢等種々の瓦器を造る。世人之れを今戸の土風爐師と稱せり。享保年間二世半七始めて瓦器に釉藥を施し、樂燒と等しきものを製出す。爾後工人又之れに倣ひ業を開く者數十戸に及ぶ。其の製出する所多くは食器にして雜器は甚だ少し。三世より五世に至る。又多く婦女の塑像を造る、磁器なり。其の製伏見人形に似て甚だ兪朴なり。而も精巧ならざる所に奇作ありて、好事の士の愛翫する所なり。

乾也燒

乾也燒は天保年間三浦乾也と云へるもの始めて造る所のものなり。乾也は江戸の人なり、尾形乾山の陶法を摸して之れを製す。初め元祿年間小川破笠好みて樂燒の草花小虫等を手製し、之れを漆器中に嵌せり。こゝに至り乾也之れに倣ひ細小なる動植物を製造す。其の巧真に逼るもの多し。

織工

南北朝以來戰亂に由りて織業の衰へたるや久し。天正年間豐臣秀吉海内を統一するに及び京都の織工を督勵して、其の機塲を今の西陣の地に轉せしめ、専ら其の發達を謀れり。是れより先き明の織工泉州堺に來りて、絹類の製法を傳へたるあり、京都の工人之れに就き、其の織法を習ひ、紋紗、金紋紗及び羅を織ることを得たり。又襟準人といへるものあり、明人より錦の織法を傳へて、明風の錦は勿論大和錦をも織製せり。次で西陣の織工にして糸錦を織出せるものあり、甚だ優美なり。之れを大和錦の一進化なりとす。又俵屋某も一種の錦を織製せり。之れを唐織錦と稱へたり。彼の明製なる蜀江錦に由りて考按を起したるものにして、極めて高尚に且つ鮮美なり。又和蘭陀及び南蠻の製品に倣ひて金銀毛宇留を織れるものあり。而して其の金銀線を用ゐざるものを風通毛宇留とす。婦人の帯に適せりとて大に稱せられたり。又天正の末年に至りて野本某といへる工人あり。堺に於て明人より金襴の製法を學び大に得る所ありて、種々の金襴を織出し、頗る精妙を究めたり。又明製に擬して緞子を織製せるものあり、専ら其の織法に工風を凝らし、文彩模様を顯はすことを得たり。七絲緞子即ちこれなり。尋て此の工人技術に練達して、彌精巧緻密を極め、これ亦一般婦人の帯に恰當なりとて稱揚せられ、今尙行はるゝこと最も盛なり。かくて京都の機業月に發達して、遂に許多の美術的の製品を織出すに至れり。

慶長の末に至りては、西陣の工人其の技術に達するもの續々輩出して、和蘭陀の製品なる羅紗に因りて、其の織法を究竟し、兎毛を綿糸に混交して一種の織物を按出せり。之れを兎羅綿織といへり。又此の際綸子を織出せり。其の製は明法に依ると雖も、圖様を我が國古代の織物に取り、楡垣に菊花などの模様を顯はしたり。其の優美なるを以て時人太だ稱揚せり。殊に各種の織物皆糸質を撰み、染物を更め、其の精巧にして、品格の高き、終に明國製を凌駕するに至れり。是れが爲めに一時隆盛を

極めたりし堺の機業は忽ち衰へ、また見るべきものなく、其の織工京都に來りて該業に従事するもの尠なからざりき。後世京都の製品にして或は精巧を究むるものなきにあらざるも、到底慶長年中の優美高尚にして規模大なるに及ぶこと能はず。

元和年中支那の工人泉州堺に來り、金紗の織法を本邦人に傳ふるものあり。京都の織工松屋某、錢屋某堺に抵り其の支那人につきて織法を習ひ、西陣に於て頻りに之れを製作し、遂に其技に達して、金糸を以て横柳條金紗を織り初む。精巧美麗にして品位も亦卑しからず。之れを錢屋金紗、松屋金紗と稱して、世人大に賞愛したり。又慶安年間京都の織工支那の製品に倣ひて始めて天鷲絨を試織せしに、敢て其の支那製に劣らざりしを以て、尙ほ織法を研究して和那天鷲絨、柳條天鷲絨を製出せり。これ亦品質佳良にして支那の品に優れりと稱せらる。

天和年間には京都西陣の織工の技術大に進歩し、種々の考按に依り新機軸を出だすこと少からざりき。即ち紗綾に華文を現はし、又進んで紋縮緬、柳條縮緬を織出し、且つ紋琥珀をも製せり。これより貞享年間に至りて京都織工の技藝は益々熟達し、金襴の如き、殊に精巧を極めて、遂に全く支那舶來品を購ふものなきに至れり。これより元祿を経て元文に至る六十年間に於ては西陣機業また進み、工人の技術は大に發達して織製頻りに行はれ、其の製出する物は意匠優雅にして、織工緻密の華章紋様を織出し、又配色の鮮麗を極めたり。延享年中幕府西陣機業の保護獎勵の爲め、非常の關涉をなせり。即ち錦、緞子、紗綾等の高尚なる織物にして、華章紋様を織出すべきものは、他國の機場之れを製することを禁じ、又其の織製する絹布をして京都に輸するを止め、或は其の職工を傭使するの制限を定め、或は他の機場にして京都特有の織物を募して織出だすときは、之れを罰する等、他の工場を檢束する法を設け、之れを勵行せしむ。然るに此の結果は却つて自由の働を檢束し、織業者をして小康に安んぜ

しめ、自然に技術の發達を挫折せしめたり。故に爾後天明に至る四十年間、毫も其の成績の見るべきものなし。唯此の際獨り金田忠兵衛といふものあり。大に意匠を凝らし、袋物用織物を製し、又其の子及び孫相繼ぎて精巧の品を出だせしあるのみ。

是れより先き上州桐生、野州伊勢崎、武州秩父等の地方に於て種々の絹布を製し、頗る精巧の品を織出せり。之れが爲め京都の機業に影響を及ぼし、自ら衰兆を現出せり。

天保年間都鄙一般の奢侈は、終に極點に達したるに依り、幕府大に之れを憂ひ、其の弊害を匡正せんと欲し、嚴命を下して節儉を實行せしむ。即ち庶人をして絹布を着することを禁じたり。其の影響に依りて西陣機業は頓に萎微せり。是に於て工人等は慘憺たる中に意匠を凝らし、一種の織法を按出し、緯に綿糸を用ゐて綿緞子、綿繻珍、綿博多を織出せり。而して數月にして其の技大に進み、綿緞子の如きは經緯蠶糸を以て織製したるものと等しく、一見よく之れを辨別しがたきの妙所に達し、且つ其の價格頗る廉なるに由りて、盛に行はれたり。されど此の時に於て既に西陣機業は關東の盛況に及ばざりしが、上野桐生の石田九郎と云ふ機業の熱心者現はれ、種々の紋織を案出し、盛に佳良の製品を出だせり。

然るに徳川幕政の末に至りて一良工また西陣の方に現れたり。之れ伊達彌助といふ。彌助嘗て西陣の衰微を嘆慨し、之れが回復を謀り、自ら率先して錦、金襴、大和錦、緞子等の優雅鮮麗なる製品を顯はし、又有職故實を調査して機織の古法を探り、又は支那古代の製品及び印度、以太利の織物に就き、其の製法を穿鑿し、又其の器械を推考し、以て之れを我が織法に應用して、西陣機業の改良を爲さんと欲し、其の機場に於て之れを試み、他の職工を誘掖し、又其の利害得失を説きて、機業家の奮起を促せり。然るに機業家輩は之れを目して投機的所爲なりとし、却つて彌助を嘲弄するもの多く、終に其の言議

も行はれざりき。かゝる情狀なれば西陣機業は月に衰頹して纔に絹布を織製し、機場を維持せしに過ぎず。文久年中將軍徳川家茂上洛の事あり、尋て各藩も多く京に入る。是の時に方りて京都は忽ち東西輻湊の街となりて、其の繁昌は即ち都ての物品の需要を來し、就中京都織物の賣買はまさに非常の盛況を呈せんとせり。こゝに於て商估等力を盡して離散せし工人を集め俄に機械を製造し、機業を回復せしめ、機聲憂々たるを聞くに至れり。然れども此の時の製品は糸質善良ならず、文彩整正ならず、頗る輕薄を免かれざりき。其の眞正の回復と技術の進歩とは全く後の明治時代に屬せり。

作家並に作品

竹田庄九郎 庄九郎は尾張國有松村の人なり。慶長年中木綿に纈縷を施すことを工夫し、徳川義直の尾張に入國せらるゝ際、其の製品を獻じ、大に美麗なるを賞せられしといふ。子孫代々その業を繼ぎ、地名に因りて有松絞と云ふ。後ちこの業を爲すもの數十戸に及び、屋舎相接し、紅白青綠參差美を競ふ。朝鮮支那の聘使の此の驛を過ぐるもの、毎に車を駐めて詩句を寄せ、其の品を購ひ去るに至れり。

友禪 友禪は寛永中京師にて染物を業としけるが、元來意富み畫を善くし、遂に草花鳥獸を細かなる筆意色彩を以て描ける如く、染物の上に顯はし、友禪染とて大に時人の好評を博し、其の巧を今日に傳へたり。

金田忠兵衛 代々金田忠兵衛と稱し、名匠相續けり。三世忠兵衛は元文頃の人にして、中興の祖なり。西陣の機業に力を盡し、種々の新様を織出だせり。又七世八世の忠兵衛父子大に力を意匠に凝らし、圓山應舉に加茂葵祭圖、競馬圖等を畫かしめ、之れを縞珍に織出し、又駒井源琦をして朝鮮王子來朝の圖、又景文、素絢等の畫伯に山水花鳥の下圖を畫かしめ、これを綴子又は琥珀に織出し、

大に時人の耳目を驚かせり。當時江戸の風俗として皆美麗なる懐中巾又煙草入を用ひたりしが、忠兵衛これに應用すべき金入、漢東金入、更紗を織出し、其の品質紋様の美なる、支那輸入船齋物も遠く及ばざるの精巧に達し、大に世に行はれたり。九世十世の忠兵衛文政年間益々江戸向きの袋物裂に力を用ひ、種々の新案を凝らし、多くの珍品を製出し、以て現今十三世の忠兵衛に至る。

梨子地織菊桐文金襴 (第二百八十八圖)

京都 金田忠兵衛藏

四世忠兵衛の作品にして、詩繪の梨子地に擬し、地質に細かなる金點を顯はし、燒金にて菊桐文を現はせり。

山道文金莫爾織 (第二百八十九圖)

京都 金田忠兵衛藏

七世忠兵衛の作にて、豊臣秀吉の陣羽織に由り、支那明朝製に勝る精巧を顯はせしものなり。

白茶地苳唐織 (第二百九十圖)

京都 金田忠兵衛藏

八世忠兵衛の作にて、其の地質を支那の苳唐織に倣ひ、これに古代の風文を配せし袋物用の奇品なり。

黒地古法帖文琥珀織 (第二百九十一圖)

京都 金田忠兵衛藏

九世忠兵衛の作にして、有名なる書家晋の王羲之石摺の法帖(手本)を織り出だしたる奇品なり。

漆箔孔雀文本極織 (第二百九十二圖)

京都 金田忠兵衛藏

同九世忠兵衛の作にて、經緯の糸に漆を施して織成し、孔雀尾を箔押にて現はせり。この漆箔の織物は夏季に用ゐる懐中袋に適し、大に行はれたりといふ。

金閣寺圖厚板織 (第二百九十三圖)

京都 金田忠兵衛藏

第三編 第三章 徳川氏幕政時代 第五節 美術的工藝

十世忠兵衛が文政年中の作にて、白茶地に黒線にて金閣寺庭園の景色を六寸幅に織り出だせし緻密の製なり。

地圖模様厚板織 (第二百九十四圖)

京都 金田忠兵衛藏

十一世忠兵衛天保年間の製にて、圖様斬新にして精密なる作なり。

鑄茶地烏帽子織 (第二百九十五圖)

京都 金田忠兵衛藏

十三世忠兵衛の作品にて紙製の採烏帽子うまぼうしの形を織り出だし、凸凹の地質に金糸の平かなる紋様を現はせし奇品なり。

天野房義 房義は文政年中の人、西本願寺の家來にて、後ち作十郎と改む。文政年間阿波侯の家來生駒兵部と共に綴錦を織りて業とせり。その精巧なることは當時綴錦を中興し、名手といはれし紋屋次郎兵衛にもとらざりしとぞ。房義の作品にして有名なるものは、西本願寺の兆殿司筆五帝の圖を下畫とし織りたるもの、並に松尾神社稻荷神社御輿の胴巻に貫名苞のかさし神號を織り出だしたるものなり。門下にしてその技をよくせしは、弟彌助其の妻ちもん並に山科屋清助なり。ことにちもんが織り出だせし藤森神社の紫地錦の鍍直垂は、最も世に有名なり。

石田九郎 九郎は上野國桐生の織工にて、文政天保間大に機業に熱心し、意匠を凝らし考案を盡し、錦の類に模様を織り出だすの便法を發明し、桐生に於て盛に佳良の製品を出だせり。

藤井庄左衛門 庄左衛門は泉州堺車町の糸物商なりしが、天保二年五月相良段通支那製敷物などに倣ひ己れが考按に依り同所絹町の泉利兵衛といふものに織らしめしに、よく其の意に適ひしを以て堺段通と稱して販賣することゝなれり。これを手編段通の始めなりとす。爾來其の業一時衰へたりしが、其の孫庄太郎に至り種々工夫の末天鷲絨織法にならひて一種の段通織法を發

圖八十八百二第 (鑄金文桐葉織地子梨製衛兵忠田金)

圖九十八百二第 (鑄甲其金文道山製衛兵忠田金)

圖十九百二第 (鑄唐行地茶白製衛兵忠田金)

第二百九十一圖 (金田忠兵衛製黒地古法結文琥珀織)

圖二十九百二第 (鑄極本文畫孔信漆製衛兵忠田金)

第二百九十三圖 (金田忠兵衛製金閣寺圖厚板織)

第二百九十四圖 (金田忠兵衛製地圖模様厚板織)

第二百九十五圖 (鑄茶地烏帽子織)

圖六十九百二第 (鑄文皮蛇製助彌遠伊)

圖七十九百二第 (鑄板庫文畫雲地銀製助彌遠伊)

十世忠兵衛が文政年中の作にて、白茶地に黒線にて金閣寺庭園の景色を六寸幅に縫り出だせし緻密の製なり。(加賀藩御用掛 金田忠兵衛 二百六十四圖)

地圖模様厚板織 (二百九十四圖)

京都

金田忠兵衛

十一世忠兵衛天保年間製の製にて、圖樣斬新にして、(加賀藩御用掛 金田忠兵衛 二百六十五圖)

茶地鳥帽子織 (二百九十五圖)

金田忠兵衛

二百六十五圖

十三世忠兵衛の作品にて紙製の採鳥帽子の形を縫り出だし、西四の地質、糸の平か、(加賀藩御用掛 金田忠兵衛 二百六十六圖)

紋様を現はせし奇品なり。(加賀藩御用掛 金田忠兵衛 二百六十七圖)

天野房義

二百六十八圖

家來生駒兵部と共に綴錦を織りて業とせり。その精巧なることは當時綴錦を中興し名手といは

れし紋屋次郎兵衛にもおとらざりしとぞ。房義の作品にして有名なるものは、西本願寺の兆殿司

筆五帝の圖を下畫とし織りたるもの並に松尾神社稻荷神社御輿の扇卷に貫名苞のかさし神號を

織り出だしたるものなり。門下にしてその技をよくせしは、弟贈助其の妻おもん並に山科屋清助

り。ことにおもんが織り出だせし藤森神社の業地錦の織直垂は最も世に有名なり。(加賀藩御用掛 金田忠兵衛 二百六十九圖)

石川九郎 九郎 (加賀藩御用掛 金田忠兵衛 二百七十圖)

し錦の類に模様を (加賀藩御用掛 金田忠兵衛 二百七十一圖)

藤井庄左衛門 (加賀藩御用掛 金田忠兵衛 二百七十二圖)

どに倣ひ己れが考 (加賀藩御用掛 金田忠兵衛 二百七十三圖)

を以て異段通と稱して販賣することゝなり。(加賀藩御用掛 金田忠兵衛 二百七十四圖)

時衰へたりしが其の孫庄太郎に至り種々工夫の末天鷲絨織法にならひて一種の段通織法を發

見せし奇品なり。(加賀藩御用掛 金田忠兵衛 二百七十五圖)

天野房義 房義 (加賀藩御用掛 金田忠兵衛 二百七十六圖)

家來生駒兵部と共 (加賀藩御用掛 金田忠兵衛 二百七十七圖)

れし紋屋次郎兵衛 (加賀藩御用掛 金田忠兵衛 二百七十八圖)

筆五帝の圖を下畫 (加賀藩御用掛 金田忠兵衛 二百七十九圖)

織り出だしたるもの (加賀藩御用掛 金田忠兵衛 二百八十圖)

り。ことにおもんが (加賀藩御用掛 金田忠兵衛 二百八十一圖)

石川九郎 九郎 (加賀藩御用掛 金田忠兵衛 二百八十二圖)

し錦の類に模様を (加賀藩御用掛 金田忠兵衛 二百八十三圖)

藤井庄左衛門 (加賀藩御用掛 金田忠兵衛 二百八十四圖)

どに倣ひ己れが考 (加賀藩御用掛 金田忠兵衛 二百八十五圖)

を以て異段通と稱 (加賀藩御用掛 金田忠兵衛 二百八十六圖)

時衰へたりしが其 (加賀藩御用掛 金田忠兵衛 二百八十七圖)

孫庄太郎に至り種 (加賀藩御用掛 金田忠兵衛 二百八十八圖)

々工夫の末天鷲絨 (加賀藩御用掛 金田忠兵衛 二百八十九圖)

織法にならひて一 (加賀藩御用掛 金田忠兵衛 二百九十圖)

種の段通織法を發 (加賀藩御用掛 金田忠兵衛 二百九十一圖)

見せし奇品なり。(加賀藩御用掛 金田忠兵衛 二百九十二圖)

天野房義 (加賀藩御用掛 金田忠兵衛 二百九十三圖)

家來生駒兵部と共 (加賀藩御用掛 金田忠兵衛 二百九十四圖)

れし紋屋次郎兵衛 (加賀藩御用掛 金田忠兵衛 二百九十五圖)

筆五帝の圖を下畫 (加賀藩御用掛 金田忠兵衛 二百九十六圖)

織り出だしたるもの (加賀藩御用掛 金田忠兵衛 二百九十七圖)

り。ことにおもんが (加賀藩御用掛 金田忠兵衛 二百九十八圖)

石川九郎 九郎 (加賀藩御用掛 金田忠兵衛 二百九十九圖)

し錦の類に模様を (加賀藩御用掛 金田忠兵衛 三百圖)

藤井庄左衛門 (加賀藩御用掛 金田忠兵衛 三百零一圖)

どに倣ひ己れが考 (加賀藩御用掛 金田忠兵衛 三百零二圖)

を以て異段通と稱 (加賀藩御用掛 金田忠兵衛 三百零三圖)

時衰へたりしが其 (加賀藩御用掛 金田忠兵衛 三百零四圖)

孫庄太郎に至り種 (加賀藩御用掛 金田忠兵衛 三百零五圖)

々工夫の末天鷲絨 (加賀藩御用掛 金田忠兵衛 三百零六圖)

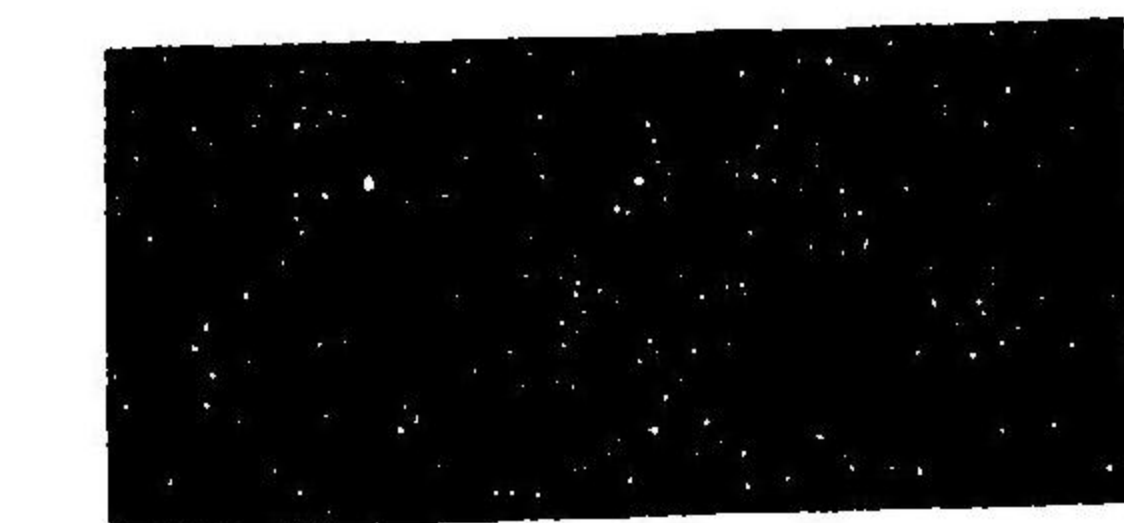
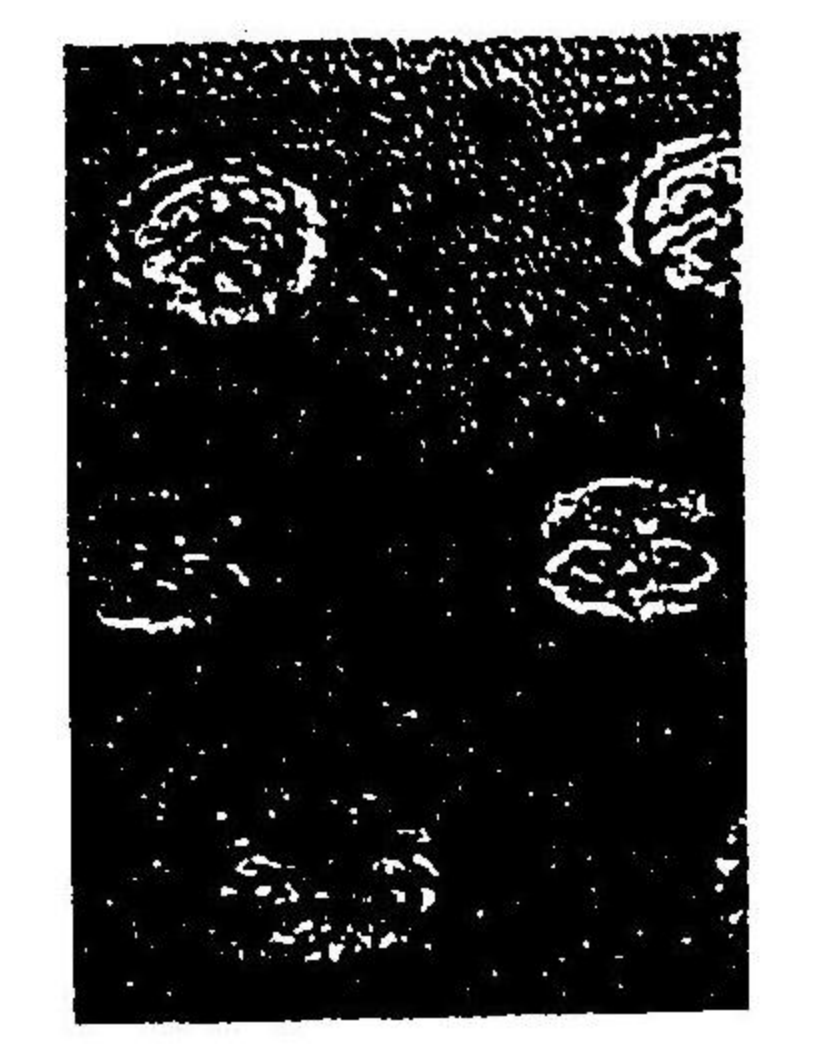
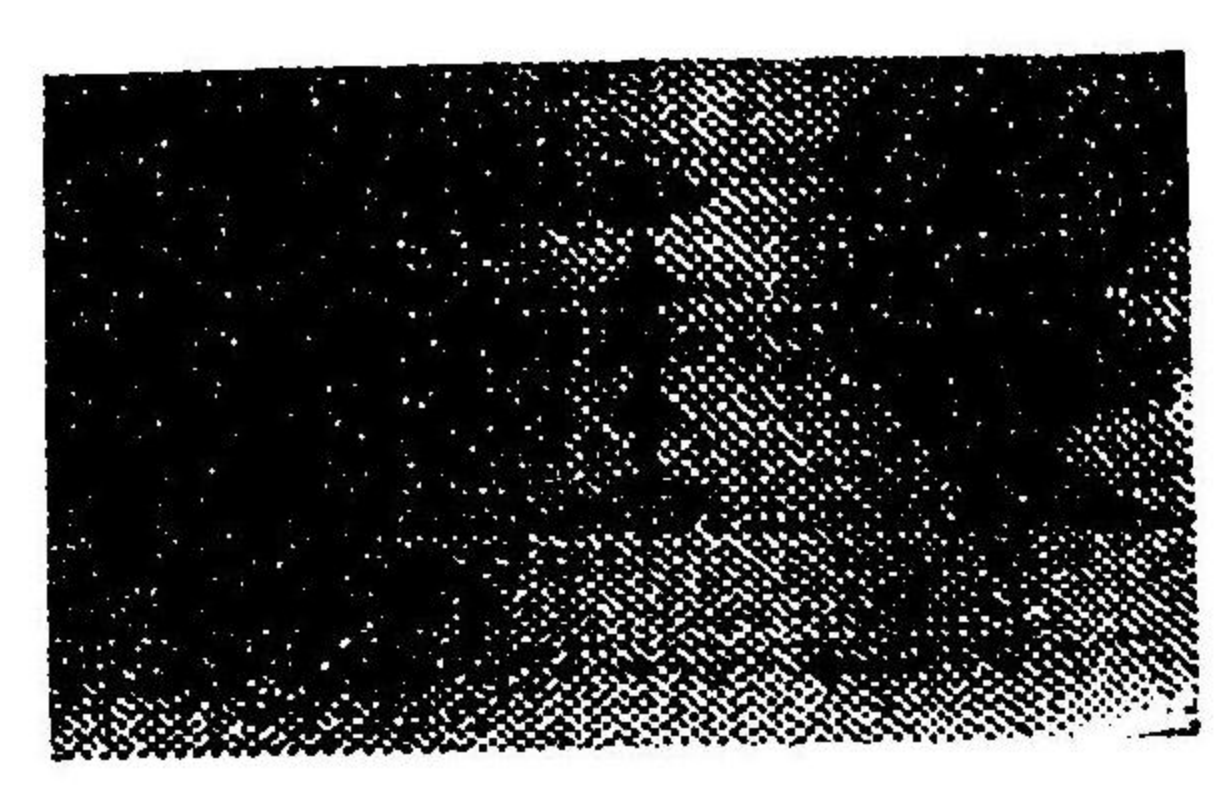
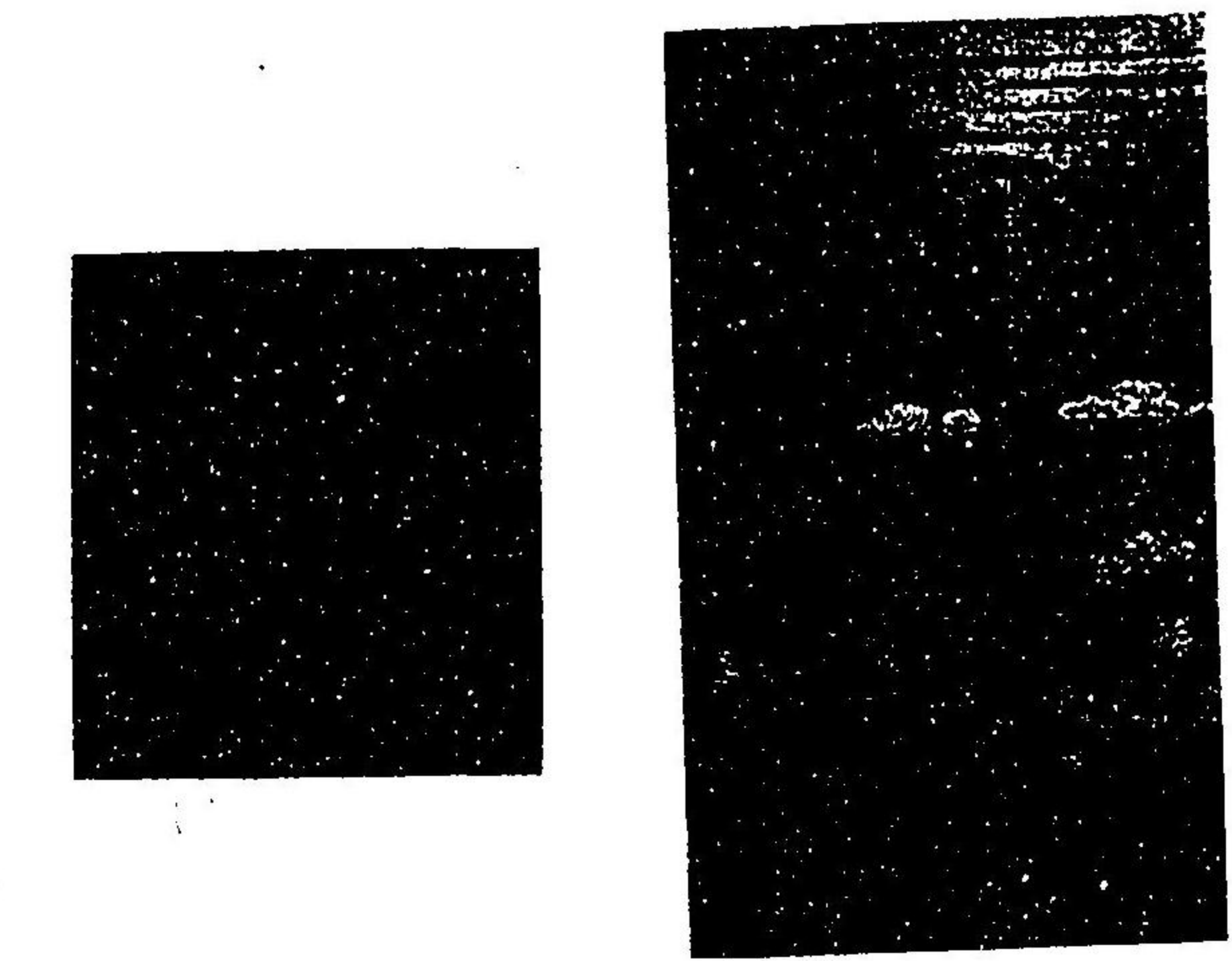
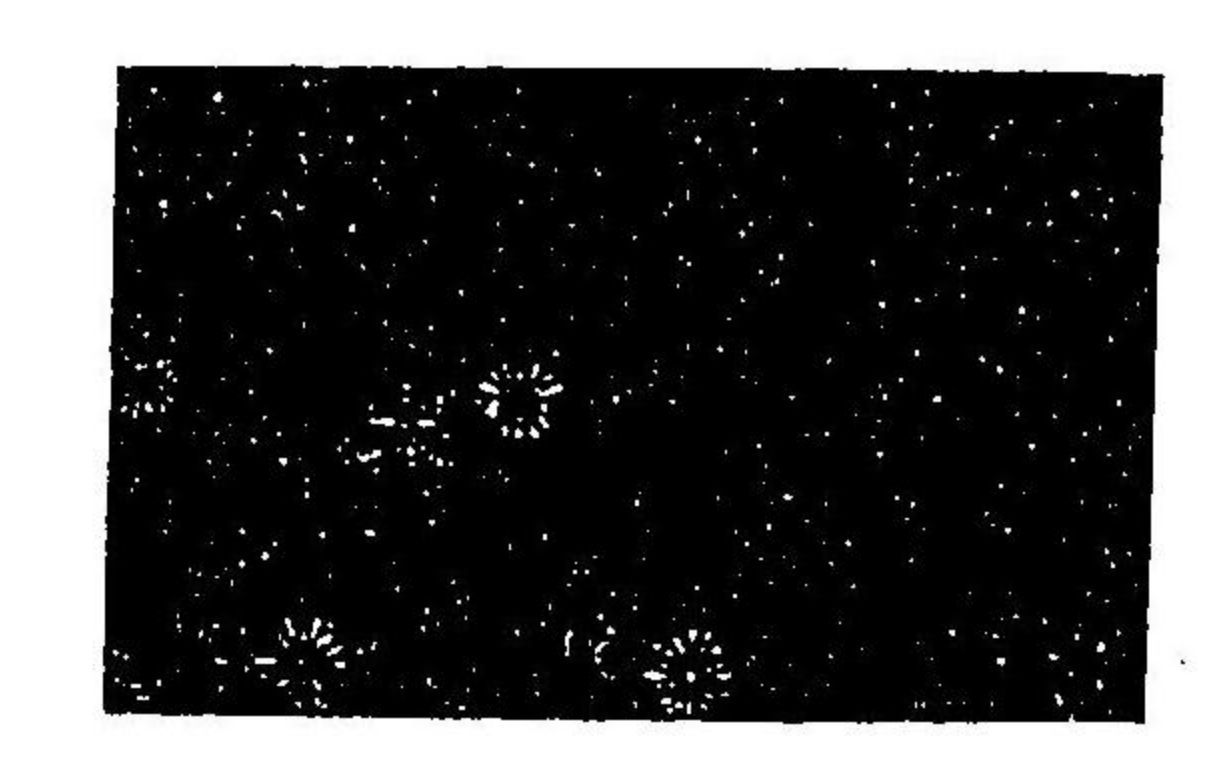
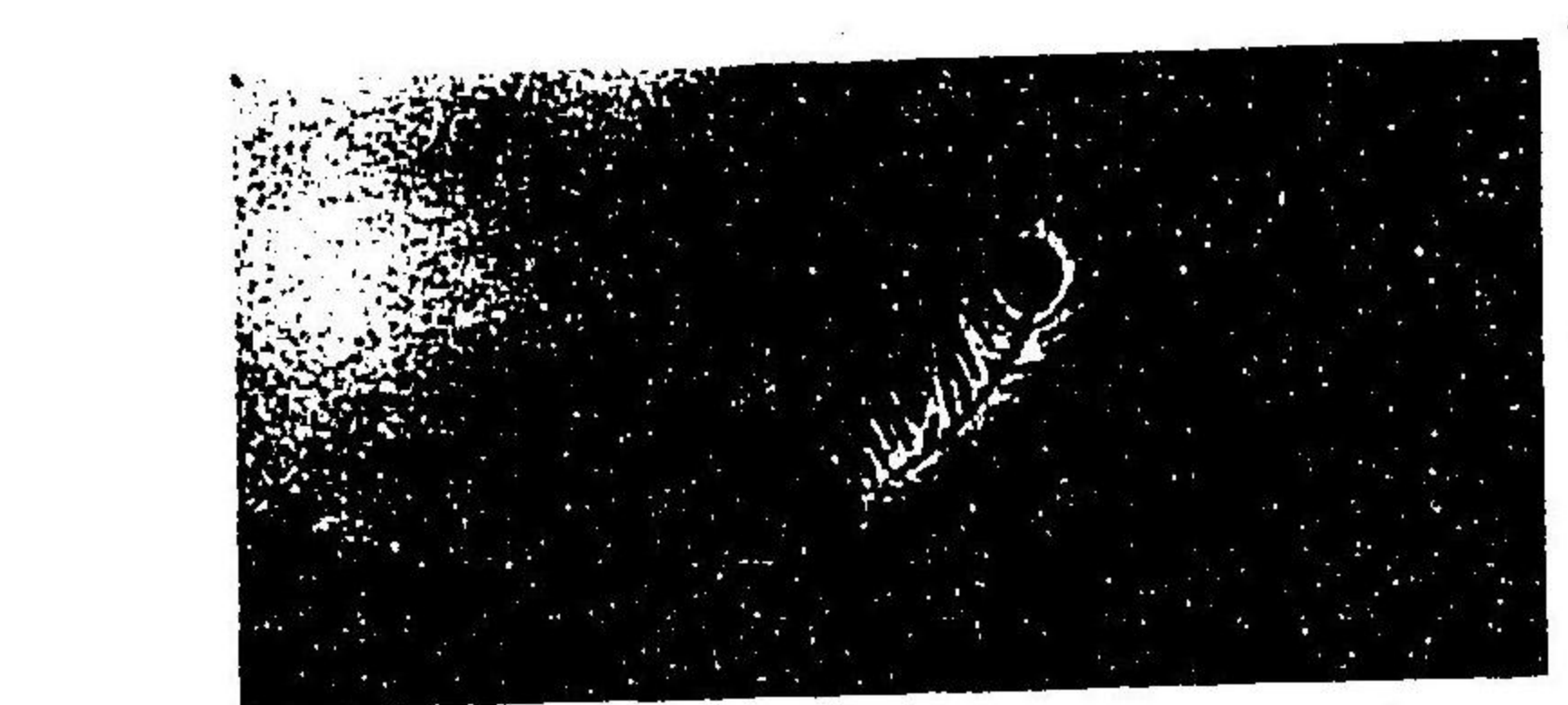
織法にならひて一 (加賀藩御用掛 金田忠兵衛 三百零七圖)

種の段通織法を發 (加賀藩御用掛 金田忠兵衛 三百零八圖)

見せし奇品なり。(加賀藩御用掛 金田忠兵衛 三百零九圖)

天野房義 (加賀藩御用掛 金田忠兵衛 三百一十圖)

家來生駒兵部と共 (加賀藩御用掛 金田忠兵衛 三百一十一圖)



し、文久三年三月漸く一帖十二枚を織出したり。これを摺込段通の始とす。爾來技術も著く進歩し、堺の一大物産とはなれり。

伊達彌助 彌助は西陣に於て世々綸子を織ることを業とせり。壯年に及びて畫を學び、化學を研究し、西陣の織業を回復し其の發達を計らんことを志し、我が國機織の古法を探り、又支那西洋各國の織物を研究し、自ら種々の新製を試み、又大に他の織工を誘接せり。其の古製の華紋を摸せしものゝ如き、伊達錦織と稱せられ、色彩溫雅にして品位頗る高し。其の他稱絲を以て織出せし觀音四十餘體の如き、其の精美なること毫に繪畫に異らず。終に帝室技藝委員となり、明治二十五年五十四にて歿せり。養子伊達虎市其の薰陶に由り、幼より紋織の修業に勵み、又意匠の巧を練り、固有の手織の法を傳へて、聲譽を今日に持續せり。

蛇皮文綿 (第二百九十六圖)

京都 伊達虎市藏

伊達彌助天保年間の製にて、黒焦茶、藍、綠、眞紅等の料糸に、天蠶糸を併せ、巧に蛇皮の文を現はし、其の色澤眞に逼りし奇巧の品なり。

銀地雲鷹文厚板織 (第二百九十七圖)

京都 伊達虎市藏

同人嘉永年中の製なり。銀糸にて地質を作り、鷹の雲間に翱翔する様を織出だし、巧に其の羽毛に濃淡を現はせり。

天鷲絨鱗龍文友禪染 (第二百九十八圖)

京都 伊達虎市藏

同人が嘉永年中の製品なり。三色織分天鷲絨地に鱗龍文を染め出だせしものにして、實に現今盛に製作する天鷲絨友禪の濫觴にて、當時初めて彌助の創意せしものなり。

廣東綺入胡蝶文風通織 (第二百九十九圖)

京都 伊達虎市藏

同人晩年の作にて、所謂錆織として古色を帯びしものなり。風通地に蝶の形を現はし、其中に各種の廣東縞(支那宋元時代廣東にて織りし縞模様の名なり)を織り出だし、配色穏雅にして古色を呈せる極めて巧妙の作なり。

作家未詳織成品

能衣裳花車文紗織 (第三百圖)

侯爵 前田利嗣藏

この能衣裳は文化年中の製にて、濃紫の紗地に金糸にて花車を織り出だせり。配色よく遠見甚だ美なり。

能衣裳藤棚文倭錦 (第三百一圖)

侯爵 前田利嗣藏

文化年中の製にて、各種の色糸にて藤の棚を織出し、圖様よく整ひ配色亦穏雅なり。

能衣裳龜甲地扇散倭錦 (第三百二圖)

侯爵 前田利嗣藏

赤、綠、茶等の各地にて、龜甲の地文を配し、扇面には鳳凰、雲に花波に橋などの模様を出だし、配色殊に美はしく、精巧を極めし織物なり。これ亦文化年中の製なり。

能衣裳花籠文倭錦 (第三百三圖)

侯爵 前田利嗣藏

各種の色糸にて地に基盤目を現はし、各様の花籠を織り出だせり。凡て倭錦は、若き婦人が手取にせし絹糸を料とし(年若き女子の手にて繭より引き出だせし糸は弾力強く色澤殊に美はし)これを、手機にて織り出だし、地質柔軟にして、文様浮き上り、温暖なる感あるを特色とす。其の品位高きこと機械織の類にあらず。

稿本 日本帝國美術略史終

第二百九十八圖
伊豆山田
天幕織物
友友織物

第二百九十九圖
伊豆山田
天幕織物
友友織物

第三百三圖(能衣裳花車文紗織)

(能衣裳藤棚文倭錦)圖一百三第

(能衣裳龜甲地扇散倭錦)圖二百三第

第三百三圖(能衣裳花車文紗織)

同人晩年の作にて、所謂錯織とて古色を帯びしものなり。風通地に蝶の形を現はし、其の中に各種の廣東縞(支那宋元時代廣東にて織り出だし縞模様の名なり)を織り出だし、配色穩雅にして古色を呈せる極めて巧妙の作なり。

作家未詳織成品

能衣裳花車文紗織

(第三百一圖)

侯爵 前田利嗣藏

この能衣裳は文化年中の製にて、濃紫の紗地に金糸にて花車を織り出だせり。配色よく遠見甚だ美なり。

能衣裳藤棚文倭錦

(第三百二圖)

侯爵 前田利嗣藏

文化年中の製にて、各種の色糸にて藤の棚を織出し、圍様よく整ひ配色亦穩雅なり。

能衣裳龜甲地扇散倭錦

(第三百三圖)

侯爵 前田利嗣藏

赤、綠、茶等の各地にて龜甲の地文を配し、扇面には鳳凰、雲に花波に橋などの模様を出だし、配色殊に美はしく、精巧を極めし織物なり。これ亦文化年中の製なり。

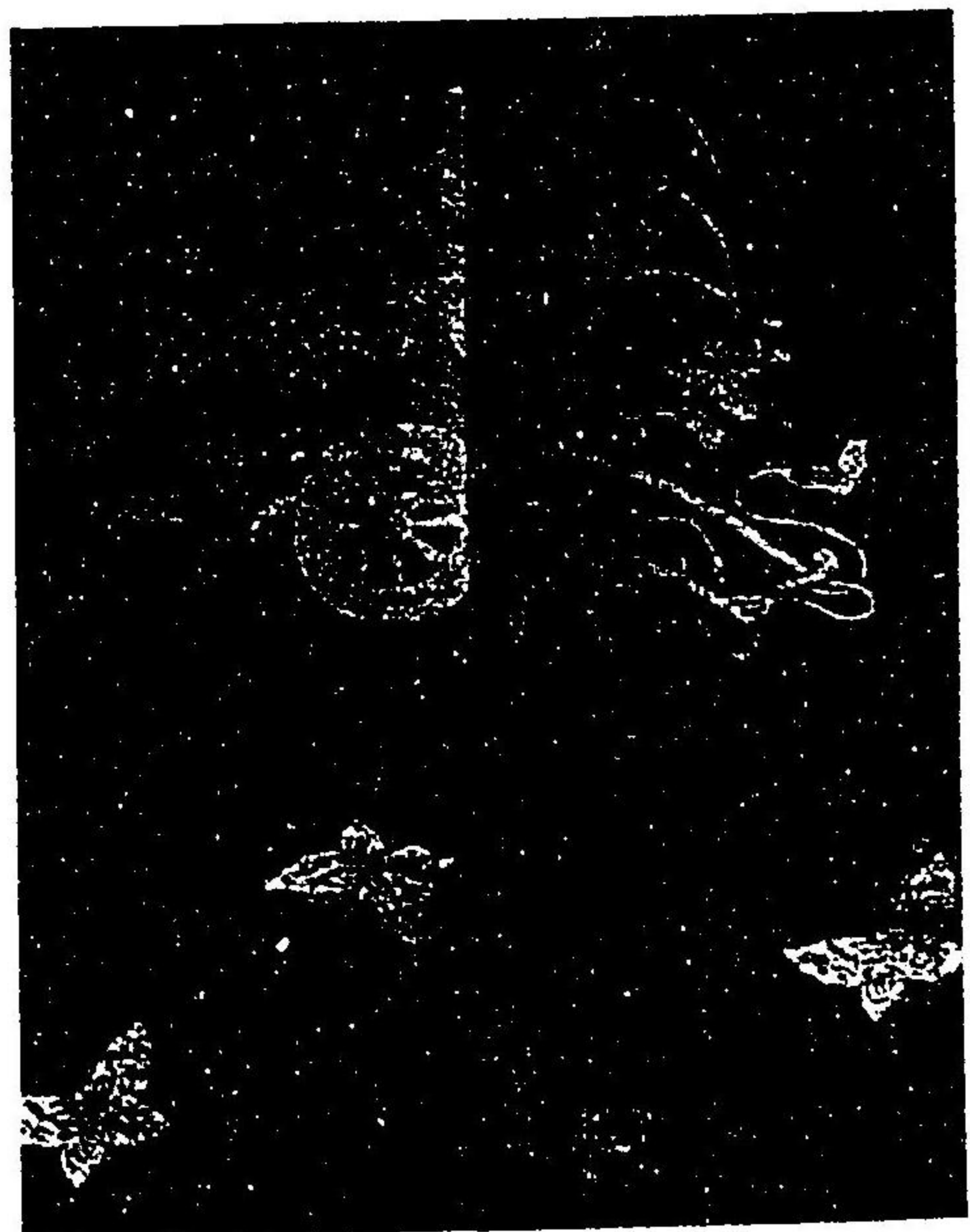
能衣裳花籠文倭錦

(第三百四圖)

侯爵 前田利嗣藏

各種の色糸にて、地に翡翠目を現はし、各様の花籠を織り出だせり。凡て倭錦は若き婦人が手取にせし細糸を料とし(年若き女子の手にて織より引き出)これを手機にて織り出だし、地質柔軟にして、文様浮き上り、温暖なる感あるを特色とす。其の品位高きこと機械織の類にあらず。

稿本 日本帝國美術略史終



稿 日本帝國美術略史 建築之部

總說

凡そ木造の楣式建築にして其の最も能く發達したるものは、世界獨り我が日本建築あるのみ。是れ蓋し我が國土の木材に富みて伐れども盡きざると、其氣候が未だ曾て堅實強固なる障壁を築きて、寒暑を防ぐの必要を感ぜしめざりしに由るが如し。而して我が建築の漸く發達して今日に至りしは、自働的にあらずして、多くは隣邦の文物を取り、之を同化したるに由る。特に佛教の影響極めて顯著なり。本邦建築術は佛教渡來に由りて、始めて、光彩を發し來れるなり。佛教建築は各種の建築に影響を及ぼせり。宮殿も、住屋も、神社も、皆之が影響を受けて、漸次に發達し來れるなり。是の故に本邦建築の沿革は、佛教建築の沿革と云ふも過當にあらず。

本邦建築の沿革は之を四大期に區分するを得べし。第一は佛教渡來以前の建築にして、又純正日本の直寫及び日本化の時代なり。第二は佛教渡來より藤原末に至るまでにして、即ち支那六朝及び唐の文物の影響を受けたるもの及び之が日本化の時代なり。第三は鎌倉以後より足利末に至るまでにして、即ち支那宋朝以降の文物の影響を受けたるもの及び之が日本化の時代なり。第四は豊臣徳川の時代にして、支那明清の道建築第二期は佛教の奈良六宗及び天台真言の建築第三期は主として禪宗の建築、第四期は各宗の

建築と稱すべきもの也。而して別に佛式を加味せる神社建築の一系は第二期以後各時代を通じて出沒せり。

之を要するに日本建築の沿革は二千有餘年間幾回の波瀾ありしと雖も主として細部に於ける手法の變遷にして根本的變化にあらず其の大體の方針は常に不變なり。即ち其のスタイルは唯一にして始終一貫し各時代の建築的性質の差異は即ちその「デテール」の差に過ぎず。今假りに之を左の八期に分ちて順次之を畧説せむ。

- 一 佛教渡來以前
- 二 飛鳥時代 (推古時代)
- 三 奈良時代
 - 前期 (和銅時代)
 - 本期 (天平時代)
- 四 平安時代
 - 前期 (弘仁時代)
 - 本期 (藤原時代)
- 五 鎌倉時代 (北條時代)
- 六 室町時代 (足利時代)
- 七 桃山時代 (豊臣時代)
- 八 江戸時代 (徳川時代)

第一章 佛教渡來以前

(造元 棟 地 天)圖四三三第

(圖 面 平 の 社 大)圖五三三第

(圖 面 前 の 社 大 圖 六 百 三 第

建築と稱すべきもの也。而して別に佛式を加味せる神社建築の一系は第二期以後各時代を通じて出沒せり。

之を要するに日本建築の沿革は二千有餘年間幾回の波瀾ありしと雖も主として細部に於ける手法の變遷にして根本的變化にあらず其の大體の方針は常に不變なり。即ち其のスタイルは唯一にして始終一貫し各時代の建築的性質の差異は即ちその「デテール」の差に過ぎず。今假りに之を左の

八期に分ちて順次之を畧説せむ。
一 佛敎渡來以前

二 飛鳥時代

(推古時代)

三 奈良時代

前期
本期

(和銅時代)

(天平時代)

四 平安時代

前期
本期

(弘仁時代)

(藤原時代)

五 鎌倉時代

(北條時代)

六 室町時代

(足利時代)

七 桃山時代

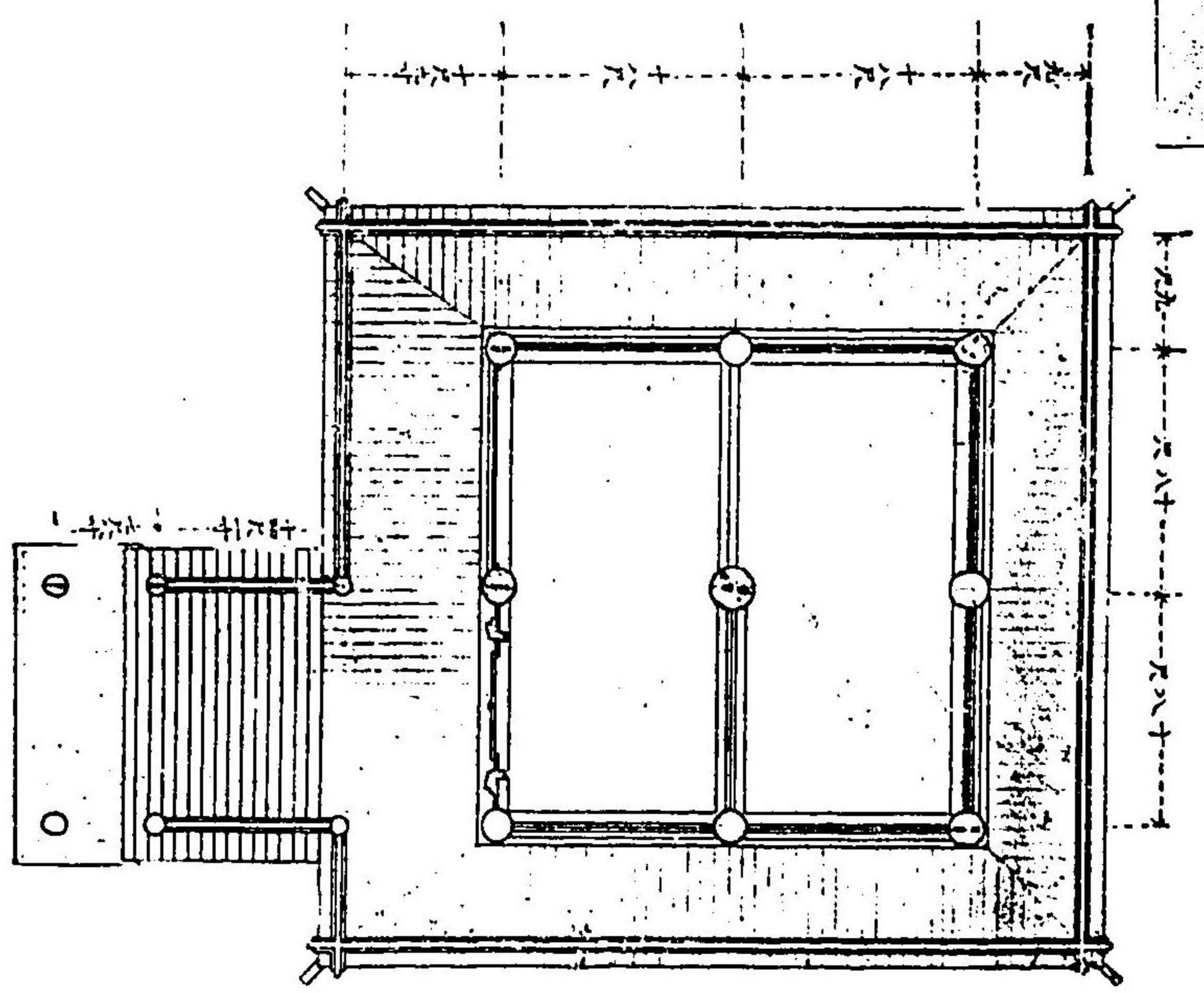
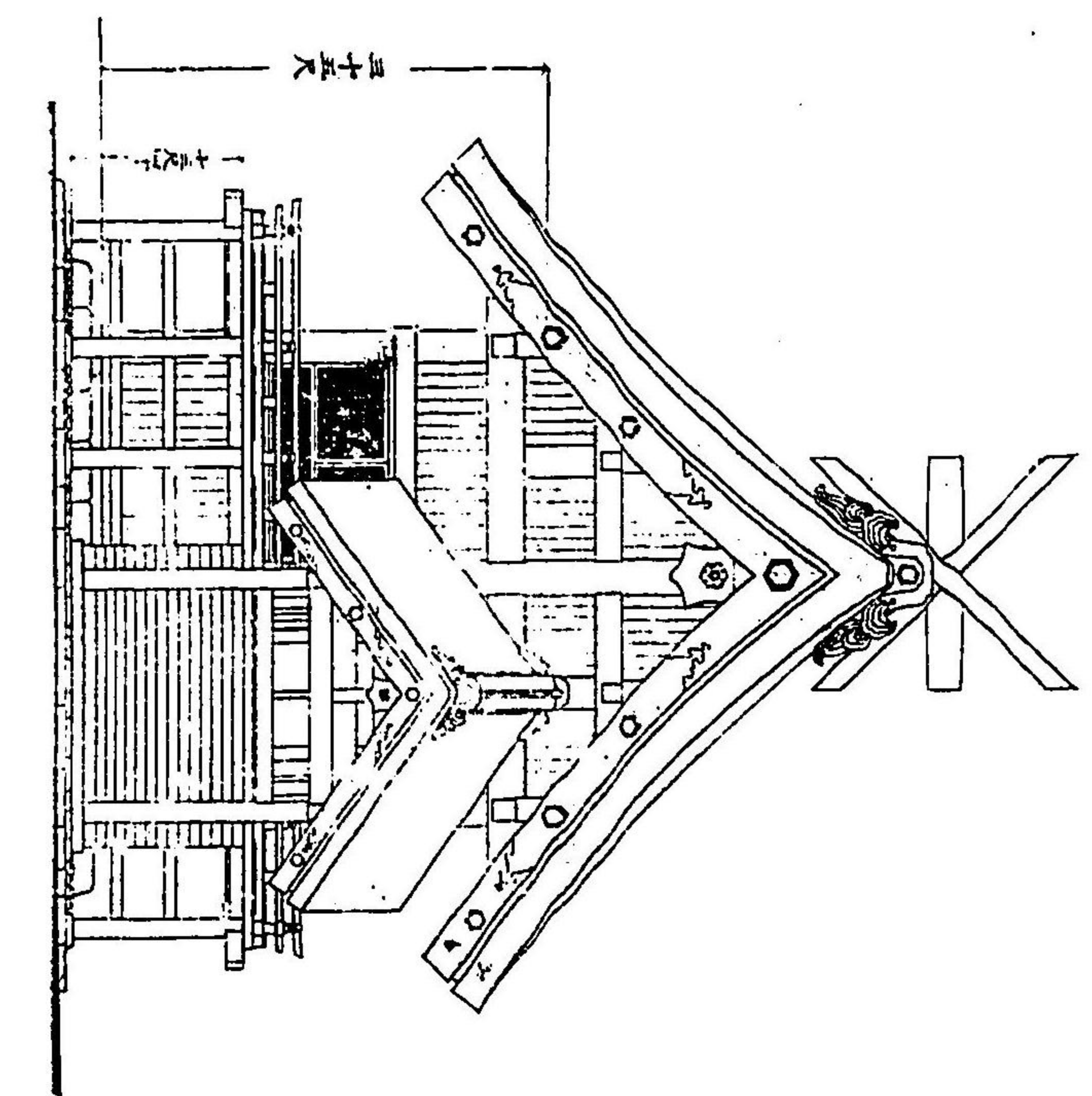
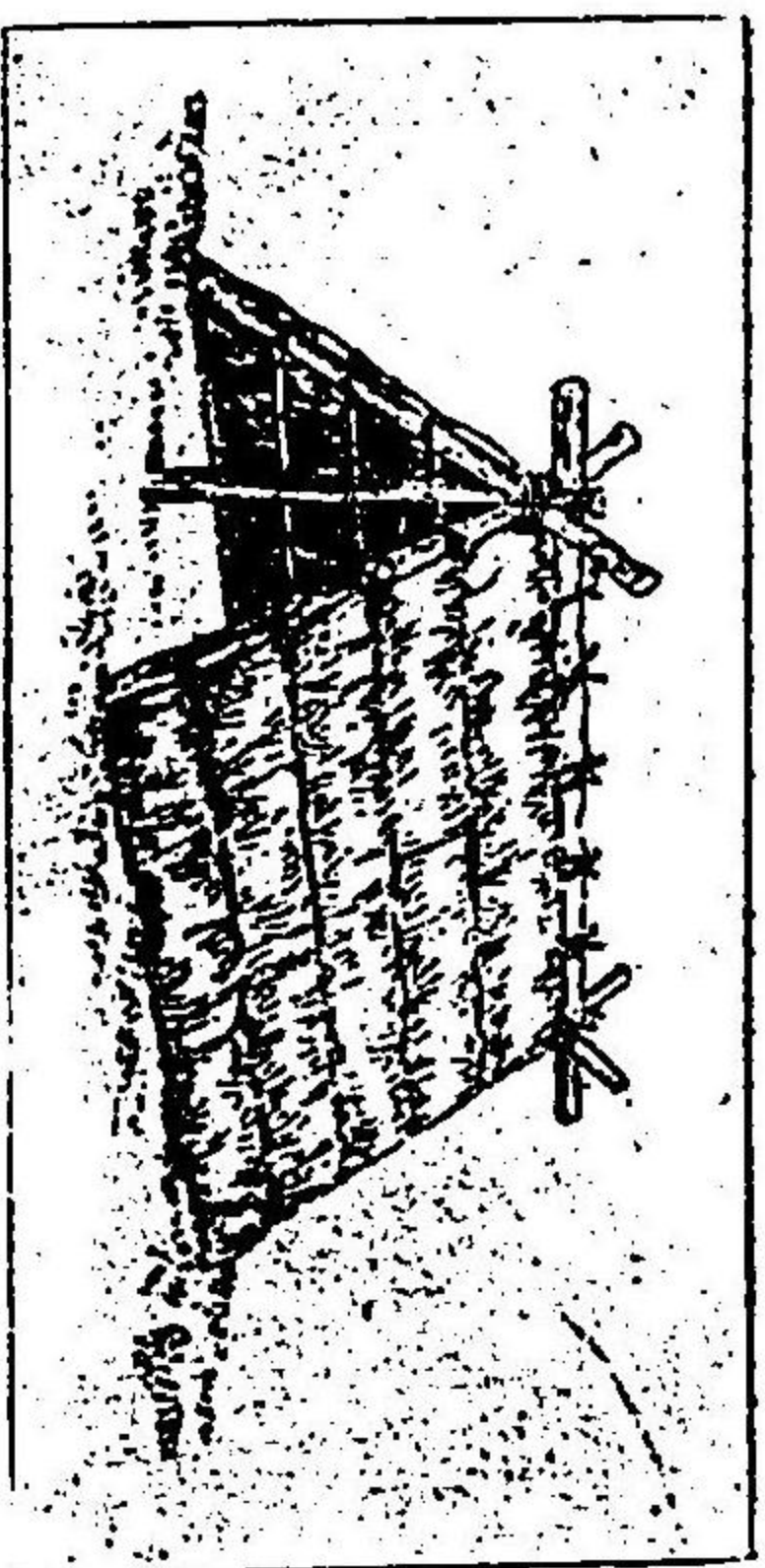
(豊臣時代)

八 江戸時代

(徳川幕府時代)

(圖中の「大」は田川等

第一章 佛敎渡來以前



本邦太古の住家を考ふるに、蓋し穴居と小屋との二種ありしものゝ如し。而して穴居の風は漸次に消滅し、小屋の建築は漸次に發達し、遂に一種の様式を成すに至りたり。

此の本邦最古の建築は第三百四圖に示すが如く、前後に木片を合掌に交叉し、其の上に棟を架し、之と並行に母屋を以て合掌を連絡し、而して其の上に茅茨を葺きたるものに過ぎざりき。而して此の種の建築漸く發達して、柱を立て、床を作り、屋蓋は完全なる方法を以て之を葺くに至り、終に一種の建築形式を現出するに至りぬ。出雲の大神は即ち是れなり。

神社建築は最古の時代に於ては存在せざりき。これ神を祭るに、別に建造物のあることを要せざりしを以てなり。後代神社建築の起るや、其形式は全く彼の最古の宮室建築と異なる所あらざりしなり、之を大神造とす。出雲大神はその例にして、第三百五圖は即ち其の平面圖なり、如何に第三百四圖と相似たるかを見るべきなり。殿の平面中央に柱を樹つるを以て入口は中央に開くことを得ず。圖中(イ)の部より入り、折れて(ロ)に進み、(ハ)に至り、更に折れて(ニ)に達す。蓋し(ニ)は家人の寢室、(ハ)は居間、(ロ)は應接室、(イ)は玄間に相當するものゝ如く、明かに太古の住家の形を示せり。第三百六圖の前面圖も亦第三百四圖に比して、僅に一步を進めたるものなり。大神造に次て大鳥造を生ず、大鳥神社はその標品なり。住吉造は之より出て、更に一種を成す、住吉神社即ち是なり。以上三種は皆妻入りの形式をなすものなり。

別に平入りの手法に依つて神明造と稱する形式を生ぜり。伊勢大神宮、熱田神宮は即ち其の好例なり(第三百七圖、第三百八圖)。この兩社は能く太古の状態を今日に保存するものにして、其の太古のものゝ相異なるは、其の材料の良好、技工の精巧及び裝飾の附加に過ぎざるものとす。今其の形式の要領を述べれば、其のプランは横に長方形にして、柱は四く掘立なり。其の高く聳えたる千木、其の

棟上に駢列したる葛緒木其の直線形より成れる屋蓋は彼の第三百四圖に於ける最古の形式を想起せしむるものあり。而して其の兩側別に棟持柱と稱する遊離せる柱を樹て、其の長く突出せる棟を支ふるの手法の如きは如何に其の原始的なる意匠なるかを見るべし。

この種の純正なる形式を唯一神明造と云ひ稍變化せるものを單に神明造と呼ぶ。後者も亦其の屋蓋の直線形より成ると千木葛緒木を冠するとを以て特色とするも各部の手法の種々破格なるものあるに由りて前者と區分せらるゝなり。

三韓建築の影響に就ては未だ確然たる考證あることなしと雖も必ずや多少本邦固有の形式を變ぜしものなかるべからず。神功皇后の時新羅より五彩を獻じたるを以て建築に色彩を施すの術是より始まると云ひ仁徳天皇は宮殿の裝飾を廢せられたるの傳記によりて當時既に建築裝飾の術ありしことを推知すべしと云ひ同天皇が高臺を建造せる雄略天皇が樓閣を起せる等の傳記に徴して當時已に壯麗偉大の宮殿を造營せりと唱へ而して此等の源由を三韓交通の結果に歸し此の如き建築は和韓混合の形式若しくは純正なる韓式なりしなるべきを想像するも決して無稽にあらざるべし。吾人は當時の史傳に徴し當時已に外交上の必要より三韓建築の現出を見るに至りたることを想像すべき理由を有す。然れども亦雄略天皇が磯城縣主の人臣として其の屋に葛緒木を上げたるを以て僭越なりとし之を責めたるの事實に徴すれば當時の宮殿は彼の千木葛緒木を冠せしめたる直線形の輪廓を具へたる建築にして即ち純正なる日本建築なりしや明かなり。且つ其の高臺と云ひ樓閣と云ふもの未だ必ずしも今日の意味に於けるが如き完美なるものに非ざりしや疑なし。

其の他當時代に於て見るべきものは墳墓建築なり。墳墓は人工の丘陵にして其の形單に低き圓錐形を成すものあり。其の「プラン」の弧形なるものあり前方にして後圓なるものあり渠を以て之を

(圖面平の宮跡大)圖七百三第

棟上は列したる高栂木長の直線より成る。其の端は、或の角に自開閉を許す。其の意を以て、思はせしむるものあり。而して其の端側は、柱よりなる。其の意を以て、思はせしむるものあり。其の意を以て、思はせしむるものあり。

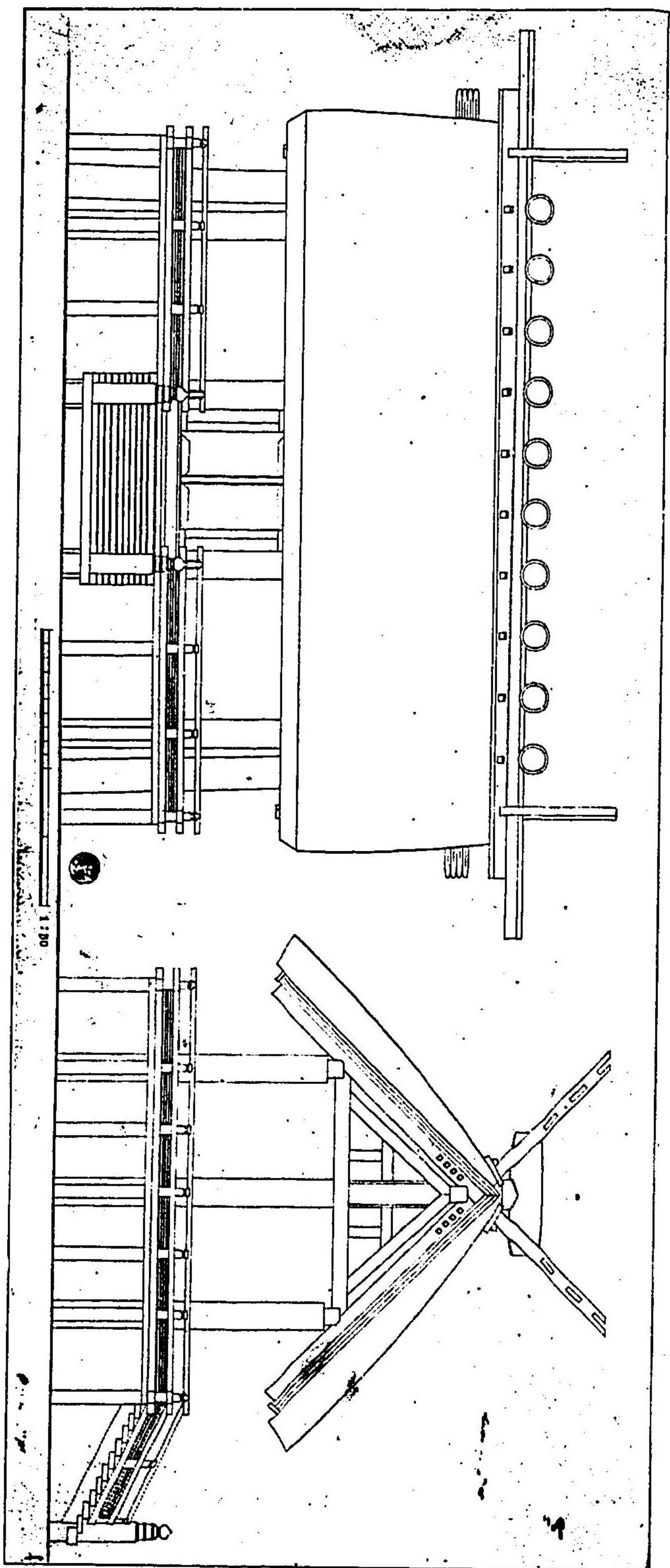
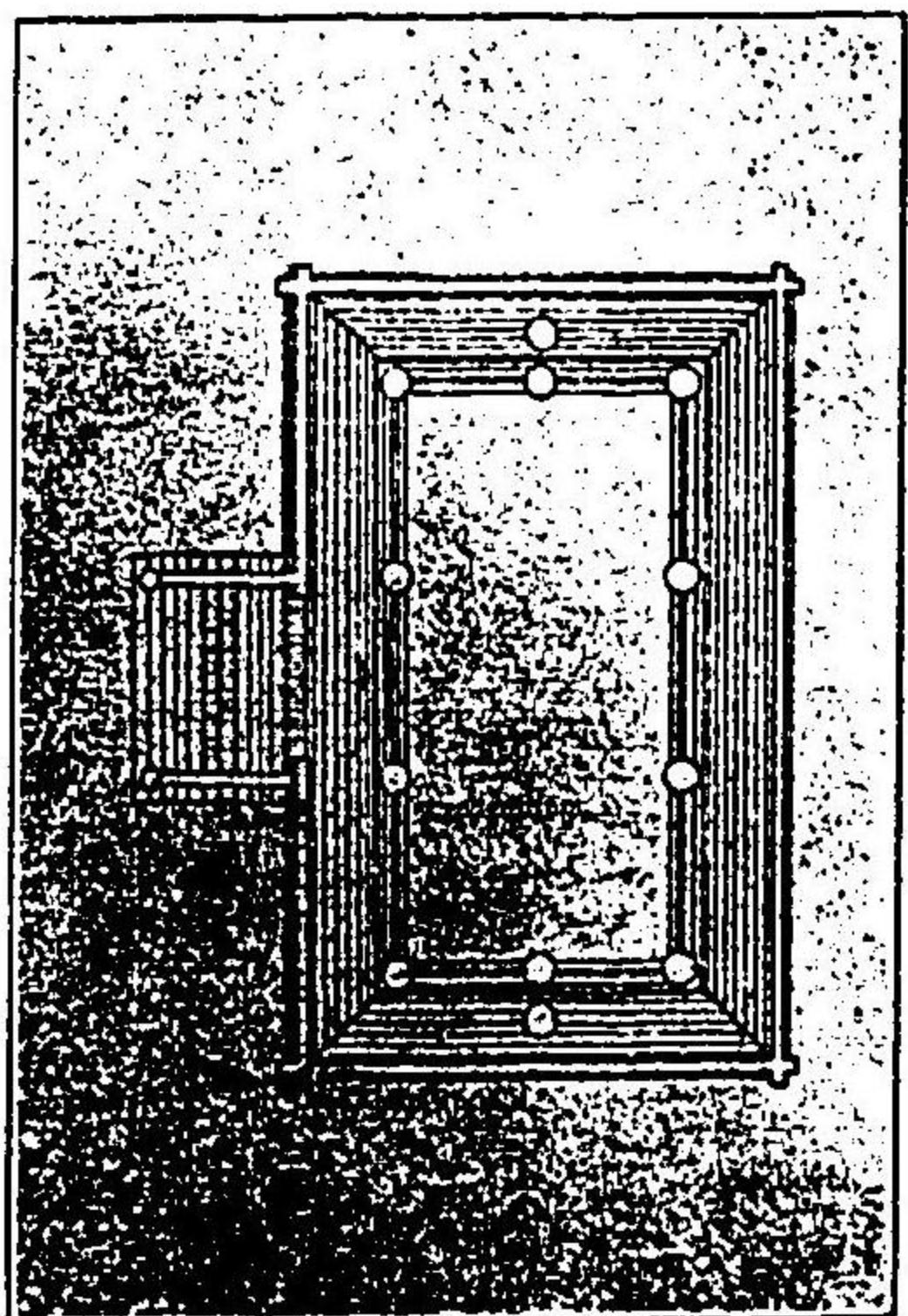
この種の純正なる形式を唯、神門と云ひ稱せしむるものあり。其の意を以て、思はせしむるものあり。其の意を以て、思はせしむるものあり。

三條建築の影響に就ては、未だ確然たる考證あることなきを以て、其の意を以て、思はせしむるものあり。其の意を以て、思はせしむるものあり。

其の他、當時の史傳に徴し、當時已に外交上の必要より、三條建築の形用を以て、思はせしむるものあり。其の意を以て、思はせしむるものあり。

其の意を以て、思はせしむるものあり。其の意を以て、思はせしむるものあり。其の意を以て、思はせしむるものあり。

其の意を以て、思はせしむるものあり。其の意を以て、思はせしむるものあり。其の意を以て、思はせしむるものあり。



繞らすものあり、其の意匠は大體東亞諸邦に於ける墳墓に共通なるものなり。内に石槨及び石棺あり、石槨は多くは外部より通路を開き、石棺は往々建築的形狀を有し、工作頗る精巧にして、能く當時の技工の程度及び建築的意匠のほどを卜知せしむるに足る。

之を要するに當時代の建築は宮殿と神社との間に著しき區別あることなく、兩者共に其の起源を第三百四圖の小屋に發し、次に進化して黒木（樹木の皮を去らざるもの）の大社造及び神明造の二系を成し、更に進化して白木（樹皮を去り方圓の形に造れるもの）の宮殿となるものなり。然れども其の材料は多くは精巧なる工作を加へざるものにして、色彩彫刻の裝飾なく、其の輪廓は常に直線形より成りて、毫も曲線を混用せず。屋蓋は茅葺等を以て葺きたる、極めて原始的なるものに過ぎざりしなり。要するに當時代の建築は日本民族固有の藝術にして、絶對的植物性建築なり、其の材料に些の礦物性物品を用ゆることなかりしなり。

第二章 飛鳥時代

當時代は佛教渡來より天智天皇の頃に至る期間を包括す。欽明天皇の十三年佛教我が邦に渡來するや、蘇我稻目奉佛の目的を以て其の別業を淨捨し、向原寺をなす、之を本邦佛寺の始とす。然れどもこれ單に在來の宮室建築に佛像を納れて寺號を與へたるものなりしや、或は已に韓式の伽藍建築を成したるや、未だ詳かならず。馬子寶塔を大野の丘に建つるもの蓋し正に本邦佛寺建築の嚆矢ならむ。次て馬子は法興寺（崇峻天皇元年）を創め、厩戸皇子は四天王寺（推古天皇元年）、法隆寺（推古天皇十五年）以下數多の伽藍を作るに及び、七堂伽藍の制完く備はり、丹楹碧甍美を盡くし、我が建築界に一

大變動を與へたり。

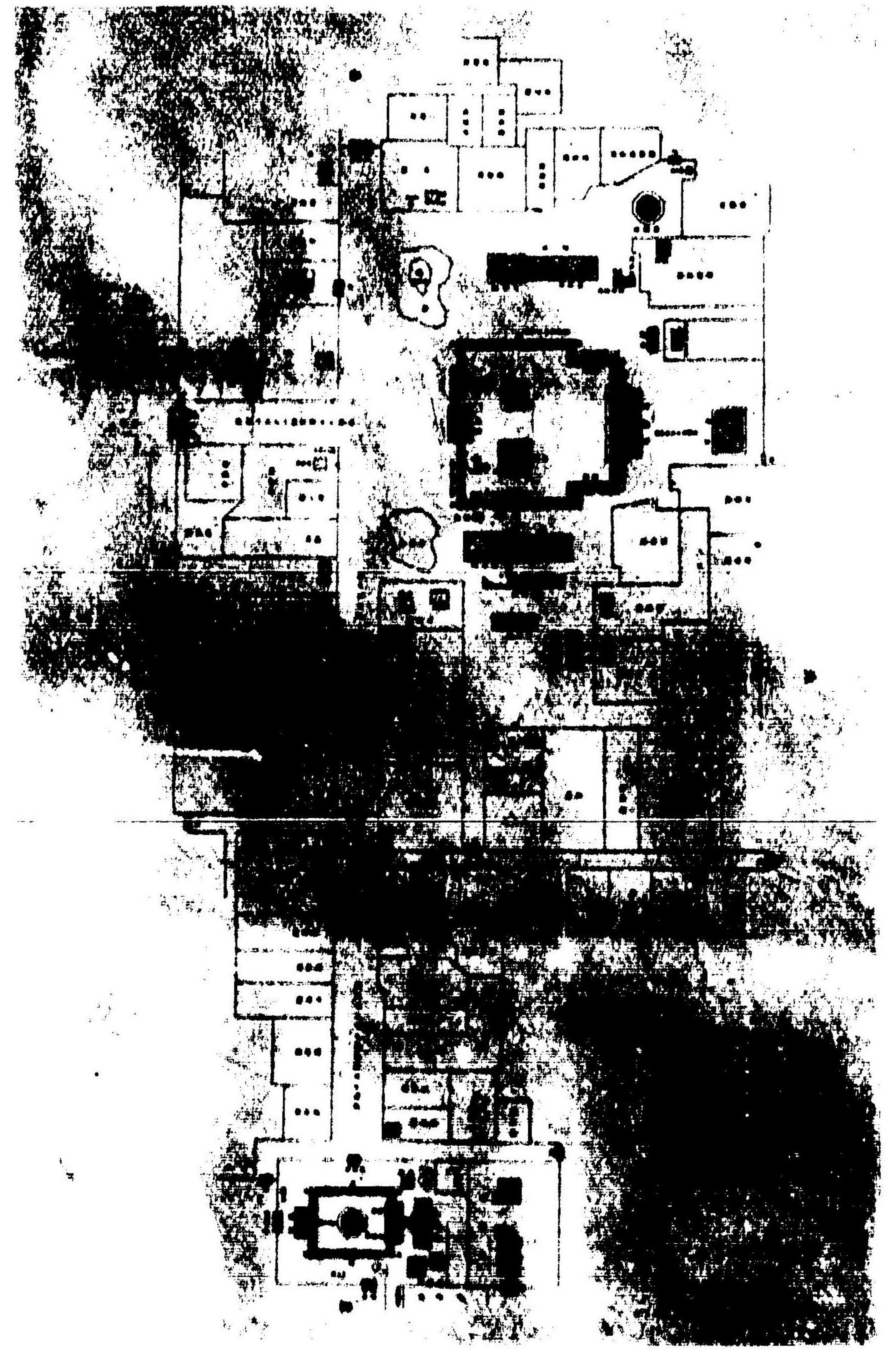
此の時代に於ける伽藍は所謂學問寺にして、通例南面して立ち、外壁の四方に東西南北の四門あり。別に又廻廊を以て其の中に直角形の内廊を造り、其の正面に中門あり、其の後面に講堂あり、其の中間なる直角形の中庭には塔及び金堂を建て、廻廊以外講堂の後に方りて、鼓樓、鐘樓左右に對峙す。更に東西北の三面僧房ありて、遠く其の外方を圍繞す。金堂は通例重層にして、二成壇の上に立ち、床は甍甍を以て布きたり。塔は多くは三重或は五重。中門及び南大門は多くは重層にして、其の何れの方にか啊呷の金剛力士を安置するを例とせり。伽藍には又食堂浴室あり。別に東西兩金堂の一或は兩ながらあることあり。一若しくは多くの圓堂あることあり。其の他正倉院、政所院以下種々の附屬建築あり。

當時代の建築形式を存するものは、大和法隆寺伽藍の中門金堂及び塔婆（推古天皇十五年）及び法輪寺（推古天皇三十一年）の塔と、法起寺（舒明天皇十年）の塔とあり、又攝津に四天王寺伽藍あり。法隆寺は第三百九圖乙に示すが如き、プランを有し、東西兩院より成り、七堂悉く具備せり。而して其の西院は元來第三百九圖丙の如き、プランを有せしも、後北室の燒失するに及びてその趾に講堂を移建せしにより、終に今日の如き規模となりたり。第三百九圖の丁は則ちその實測圖にして所謂百濟様と稱するものなり。而して其の金堂塔婆中門の三字は依然として推古時代の様式を今日に傳ふるものなりとす。今其の特徴を略言すれば、柱は「エンタシス」を有すること、猶希臘式に於けるが如く、雲形肘木及び雲形斗を賞用して普通の斗拱を用ゐず。高欄に「E」形の組子を附し、其の内に縁を設けず。軒は「一」と軒にして小天井及び支輪を有せず、垂木割組放なり。全體の形狀は極めて莊重にして、しかも奇抜の觀を呈し、上層の「プラン」は下層の「プラン」と相關聯する所なし。第三百十圖は即ち金

大慈動を興へたり

此の時代は於ける御堂は所謂學問寺にして遠望南面して立ち外壁の四方に東西南北の四門あり。別に又廻廊を以て其の中に直角形の内廊を造り其の正面に中門あり其の後面に講堂あり其の中間なる直角形の中庭には塔及び金堂を建て廻廊を以て外講堂の後にあり。廻廊は左右に對稱す。更に東漸北の二面僧房ありて造り其の外方を廻廊。金堂は佛間重層にして二成層の上には立ち座は佛龕を以て布きたり。塔は多くは三重或は五層。中門及び南大門は多くは重層にして其の何れの方にか喇嘛の金剛力士を安置するを例とせり。廻廊には又食堂講堂あり。廻廊は東西兩金堂の一段は兩ながらあることあり。一若しくは多くの間あることあり。其の廻廊は東西兩階以下種々の附屬建築あり。

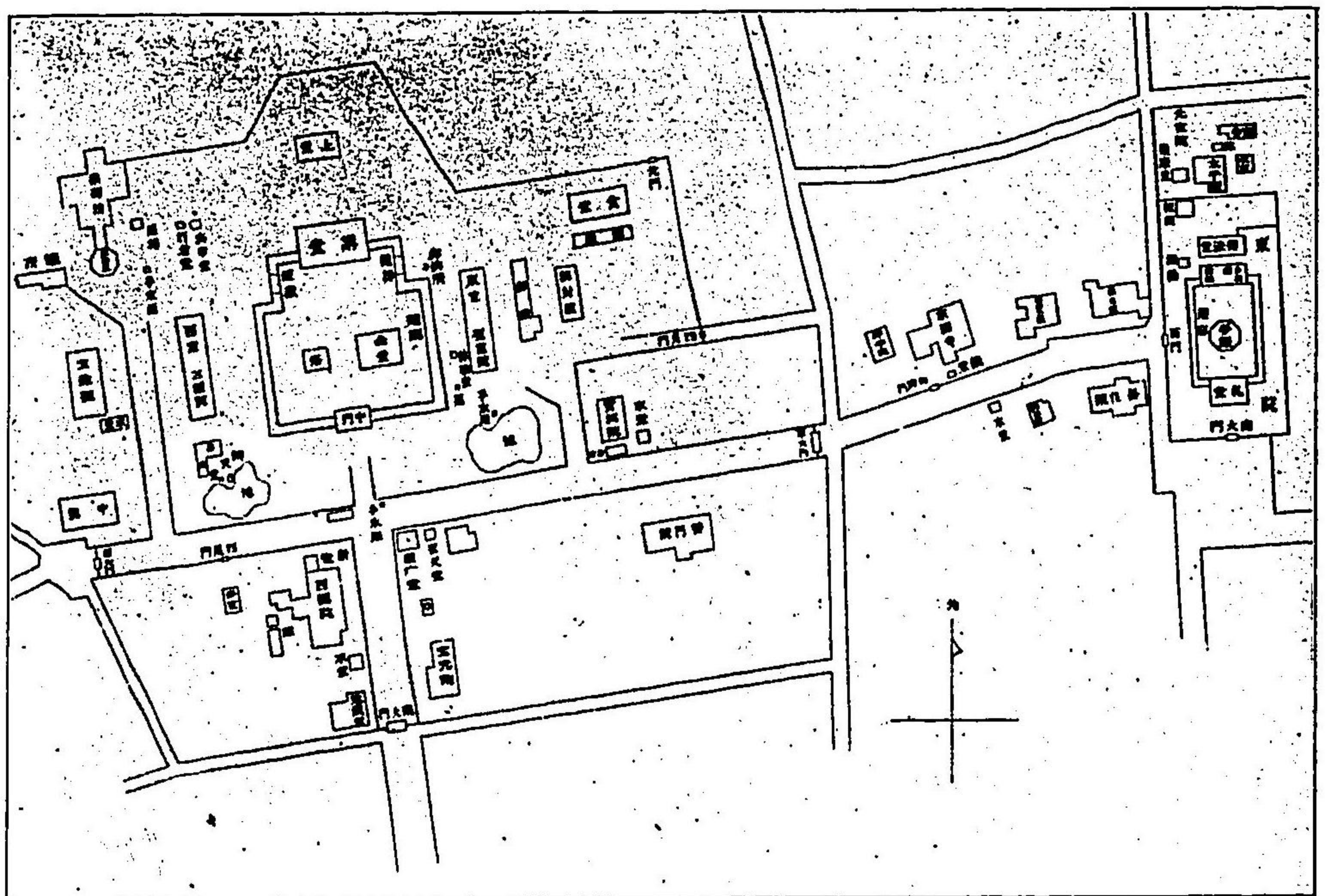
當時代の建築形式を存するものは大和法隆寺。佛殿の中門金堂及び塔婆。推古天皇十五年一及び法隆寺。推古天皇二十一年の塔と法起寺。新明天皇十年の塔とあり又攝津に西天王寺佛殿あり。法隆寺は第三百九回乙に承すが如きプラン。廻廊有り東西兩階より成り七堂悉く具備せり。而して其の西院は元來第三百九回丙の如きプランを有せし。後北室の焼失するに及びてその址に講堂を移建せしはより終に今日の如き規模となりたり。第三百九回丁は則ちその實例にして佛間重層と稱するものなり。而して其の金堂塔婆中門の三堂は依然として推古時代の様式を今日に傳ふるものなりとす。今其の特徴を略言すれば柱はエンタースを有すること。鎗並殿式に於けるが如く雲形肘木及び雲形斗を常用して音階の斗拱を用ひず。高欄に卍形の紐子を附し其の内縁を設けず。軒は一と軒にして小天井及び支輪を有せず。張木製組放なり。全體の形狀は極めて莊重にしてしかも奇抜の觀を呈し。上層のプランは下層のプランと相調協する所なし。第三百十回は即ちを



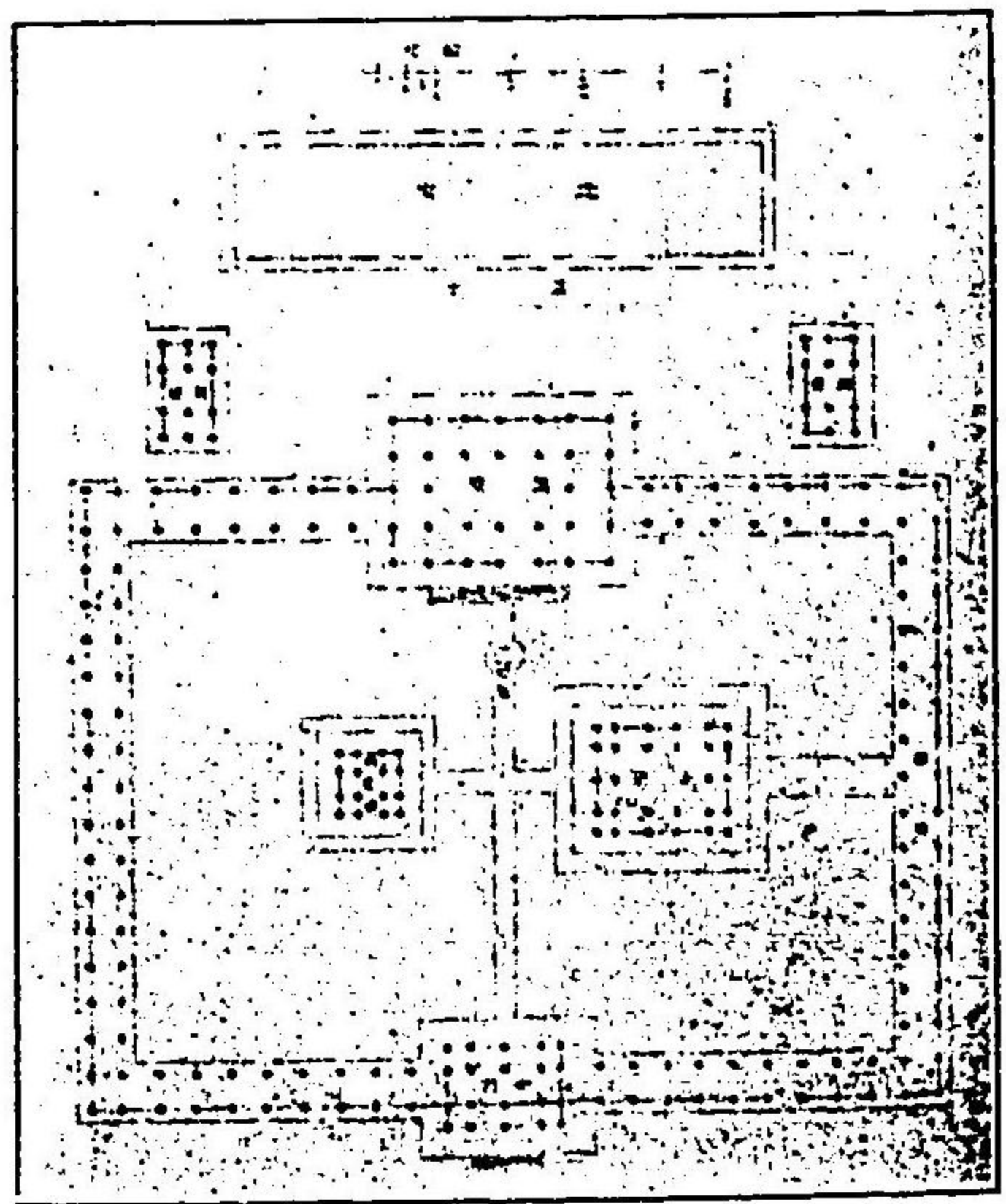
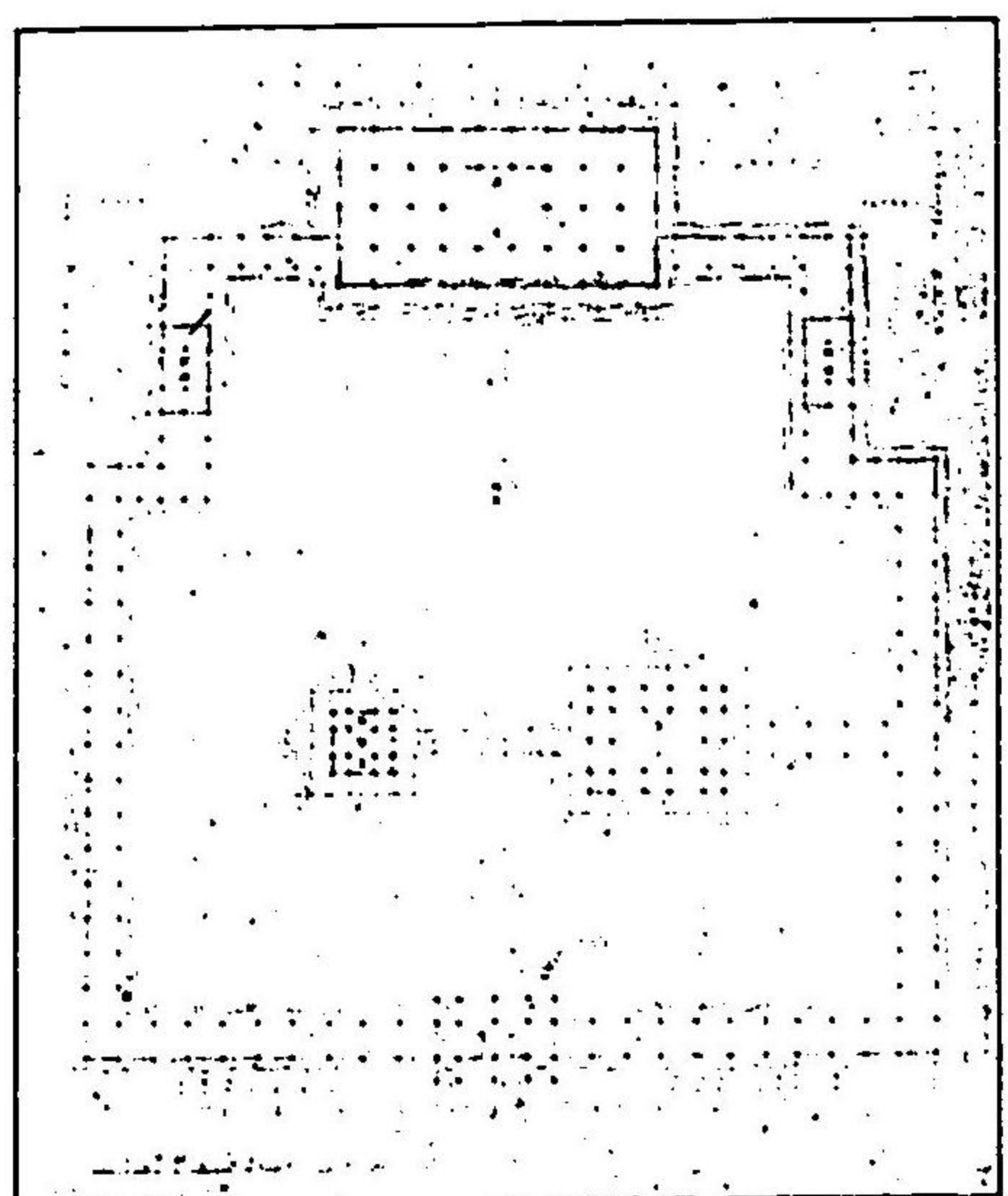
第三百九圖(乙) 法隆寺境内現圖

第三百九圖(丙) 法隆寺原形附置地圖

第三百九圖(丁) 法隆寺現形附置地圖



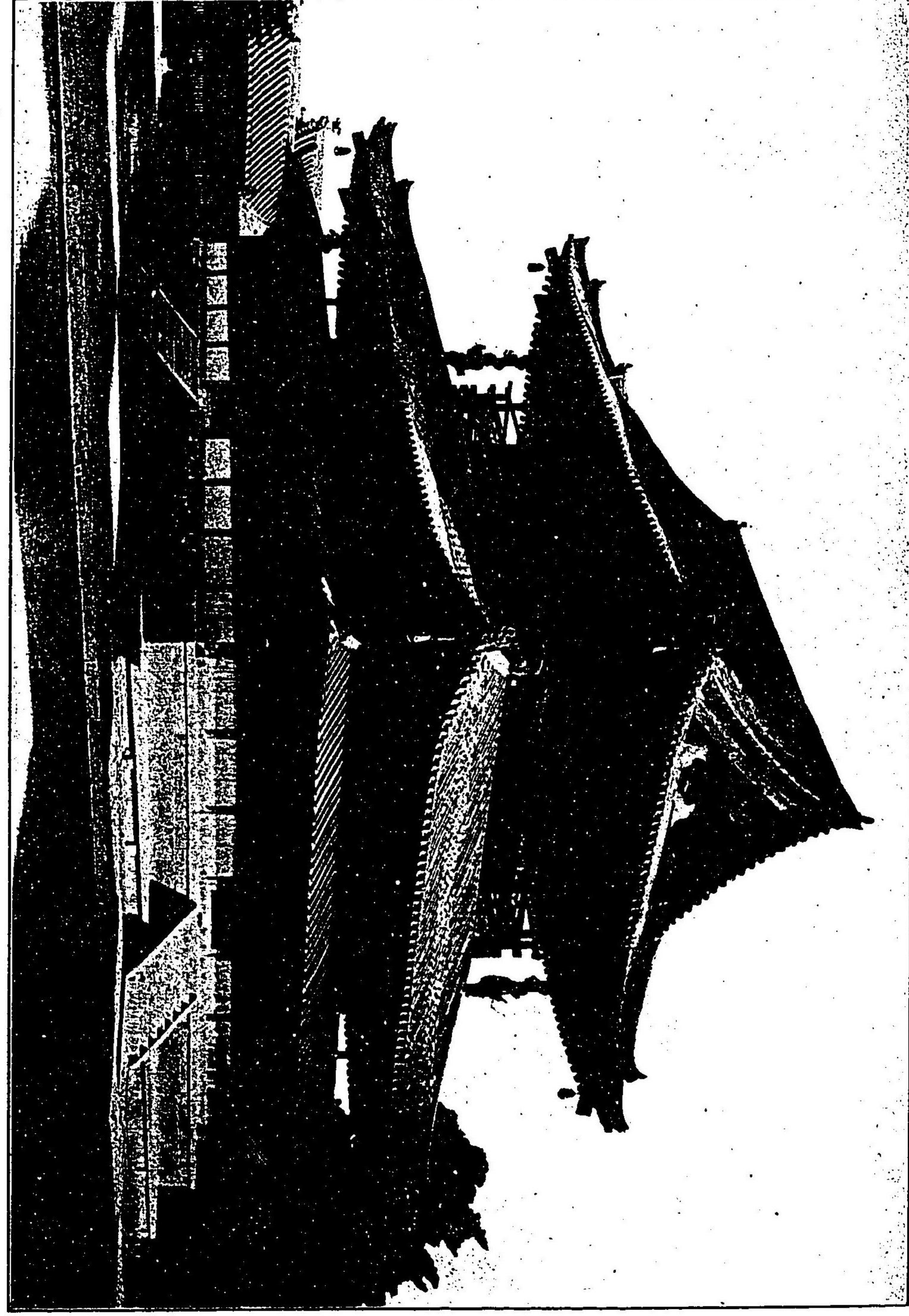
第三百六圖(乙) 法華寺跡内院圖



第三百六圖(丙) 法華寺跡内院西院圖

第三百六圖(丁) 法華寺跡内院東院圖

第三頁十圖(洋)第



第三百十圖(紫雲寺金殿)

堂の外形にして、第三百十一圖は其の細部の手法を示す。

第二十九圖は金堂内にある玉蟲厨子と稱するものなり。これ實に推古天皇の朝に成れるものにして、其の形式手法着々として金堂以下の諸宇と相符合せり。蓋しこの事實に由りて以て金堂以下の諸宇が、推古の形式を存することを證明し得るものなり。厨子には最も興味ある筋金具を施せり。其の金具に於ける唐草模様は遠く東羅馬及びアラビヤのものと相類似し、其の密陀模様の中には殆んど純粹なる希臘式の「ホニースツクル」を發見す。世人或は之を以て東西美術の偶然の暗合となす。然れども余は、之を以て東西美術の値遇に歸するものなり。其の他金堂内に壁畫あり、佛像あり、天蓋あり、共に印度西域乃至希臘美術の趣致を有せる模様を施せり。

法隆寺附近なる法輪、法起兩寺の堂塔は、共に法隆寺と同系なる配置を有し、其の三重塔は形式手法全然法隆寺伽藍に於けるものと均し（第三百十二圖）。

大阪の四天王寺伽藍は其の「プラン」に於て能く古式を保てり。即ち四方に大門を開き、其の内に方形の一廓あり。正面に中門あり。内に五重塔及び金堂前後に并立し、講堂、六時堂順次に駢列し、講堂の左右に鐘樓、鼓樓對峙せり。只其の「エレヴェーション」に至りては漸々變化し來りたるも、金堂の屋蓋の緩背なる、金堂塔婆共に紐物を用ひずして彫刻より成れる「持送り」を用ひたるが如きは、亦能く推古朝の古式を保存する所以なり。

神社建築に關しては吾人多く知る所なし。上期の形式を繼續するものと認めて可なるべし。

宮殿建築に關しても亦多く知る所なし。然れども皇極天皇紀に既に大極殿に關する記録あり。

又宮城十二門の文字を見、人をして當時唐制に摸せる内裏建築の存在を想はしむ。然れども皇極天皇は板蓋の宮を造營せり。齊明天皇に至ては瓦葺の宮殿を作らんとして果さざりしことあり。即

ち當時の宮殿は古來の茅葺なりしを、皇極齊明天皇之を改良せんとせられしを知るべし。是時に當りて唐式の内裏の制行はれ、大極殿以下の建築完備せしことは、殆んど信を措き難き所なり。

當時代の建築史上に致せる成績左の如し。

- 一 所謂百濟様七堂伽藍の制を成せること。

第三章 奈良時代

當代の建築は主として唐朝の形式を襲用せり。伽藍の配置は大體前時代と同一なるも、只だ塔婆は常に中門の外に在りて多くは左右に相對峙し、金堂は北の廻廊の中に立てり。平城京の經營は宮殿建築の大發展を促し、神社建築は佛教建築の影響を受け、屋蓋に曲線形の適用を見るに至りたるが如し。當代は更に之を二小分す。

第一節 前期(和銅期)

當期は天智天皇の頃より元正天皇の頃(白鳳より養老の頃)に至る間を包括し、其の建築の性質は正に飛鳥時代と奈良時代との中間にあり。

當代伽藍建築の遺物としては、南都藥師寺(白鳳九年創建、養老二年奈良に移建)の東塔一基あるのみ。藥師寺伽藍の建築は元來一種特殊の形式を有せしものなり。其の東塔は三重にして裳階あり、其の輪廓極めて珍奇なり(第三百十三圖)。其の料栱は法隆寺の雲肘木式より一轉化したるものにして、將さに次期に於て完成せる「三手先」の式に進まんとする中間に在り。法隆寺に缺けたる小天

唐の宮殿は古来の形式より、唐の宮殿に倣ったものがある。

りて唐武の内裏の形は、唐の宮殿に倣ったものがある。唐の宮殿は古来の形式より、唐の宮殿に倣ったものがある。

唐の宮殿は古来の形式より、唐の宮殿に倣ったものがある。

唐の宮殿は古来の形式より、唐の宮殿に倣ったものがある。

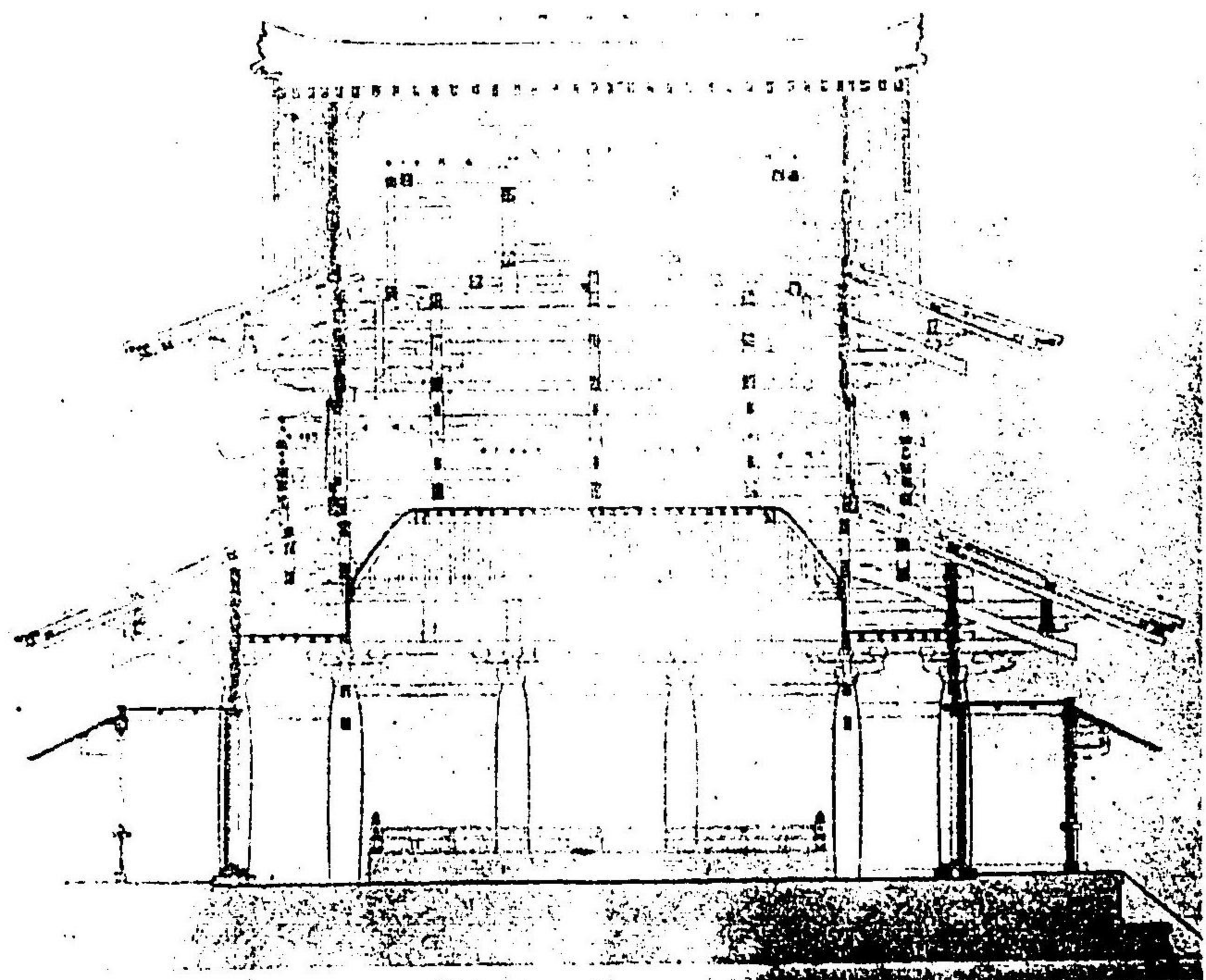
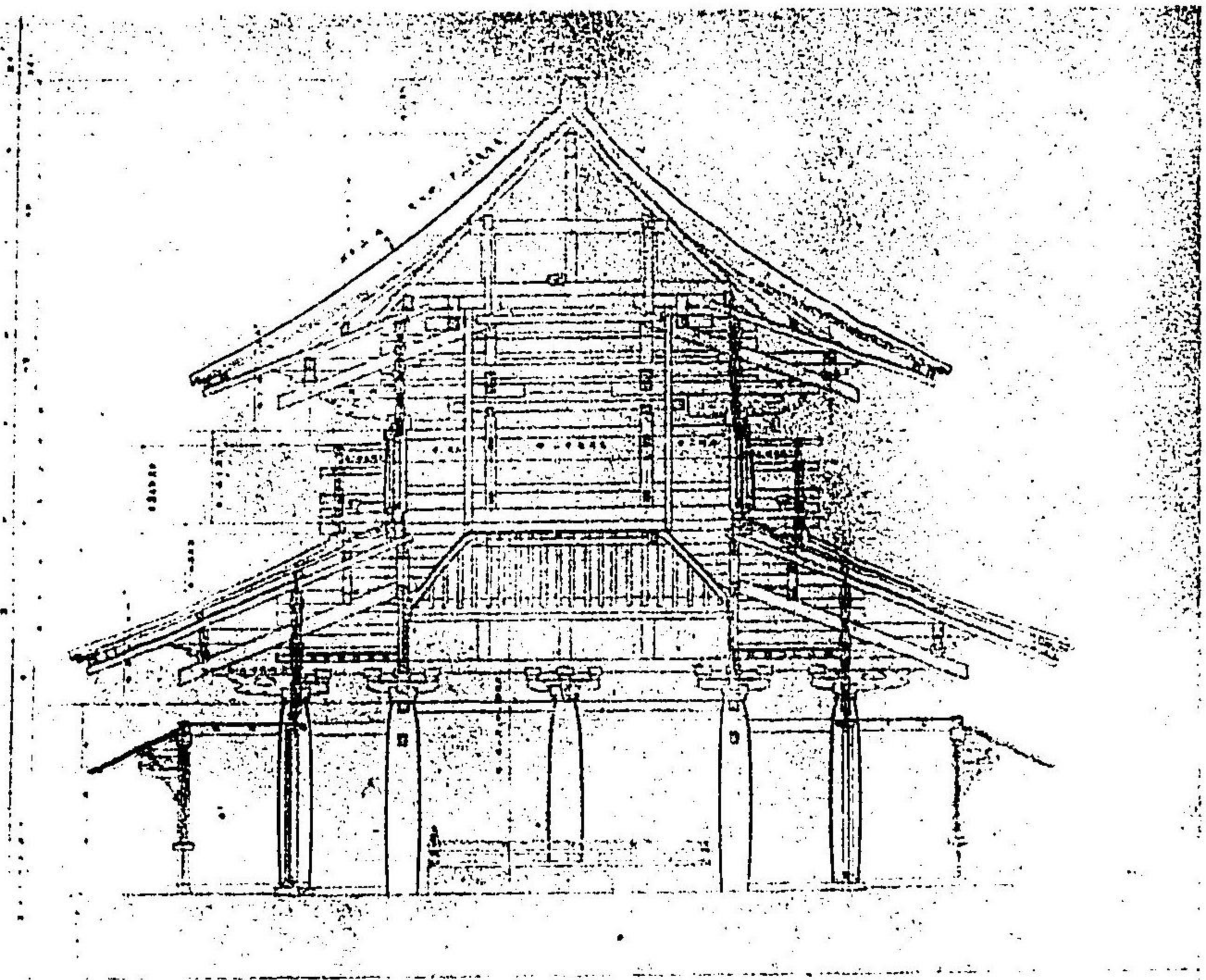
第三章 奈良時代

唐代の建築は主として唐風の形式を採用せし、佛堂の形式は唐時代のものを倣ったものがある。唐の宮殿は古来の形式より、唐の宮殿に倣ったものがある。唐の宮殿は古来の形式より、唐の宮殿に倣ったものがある。

第一節 前期(和銅期)

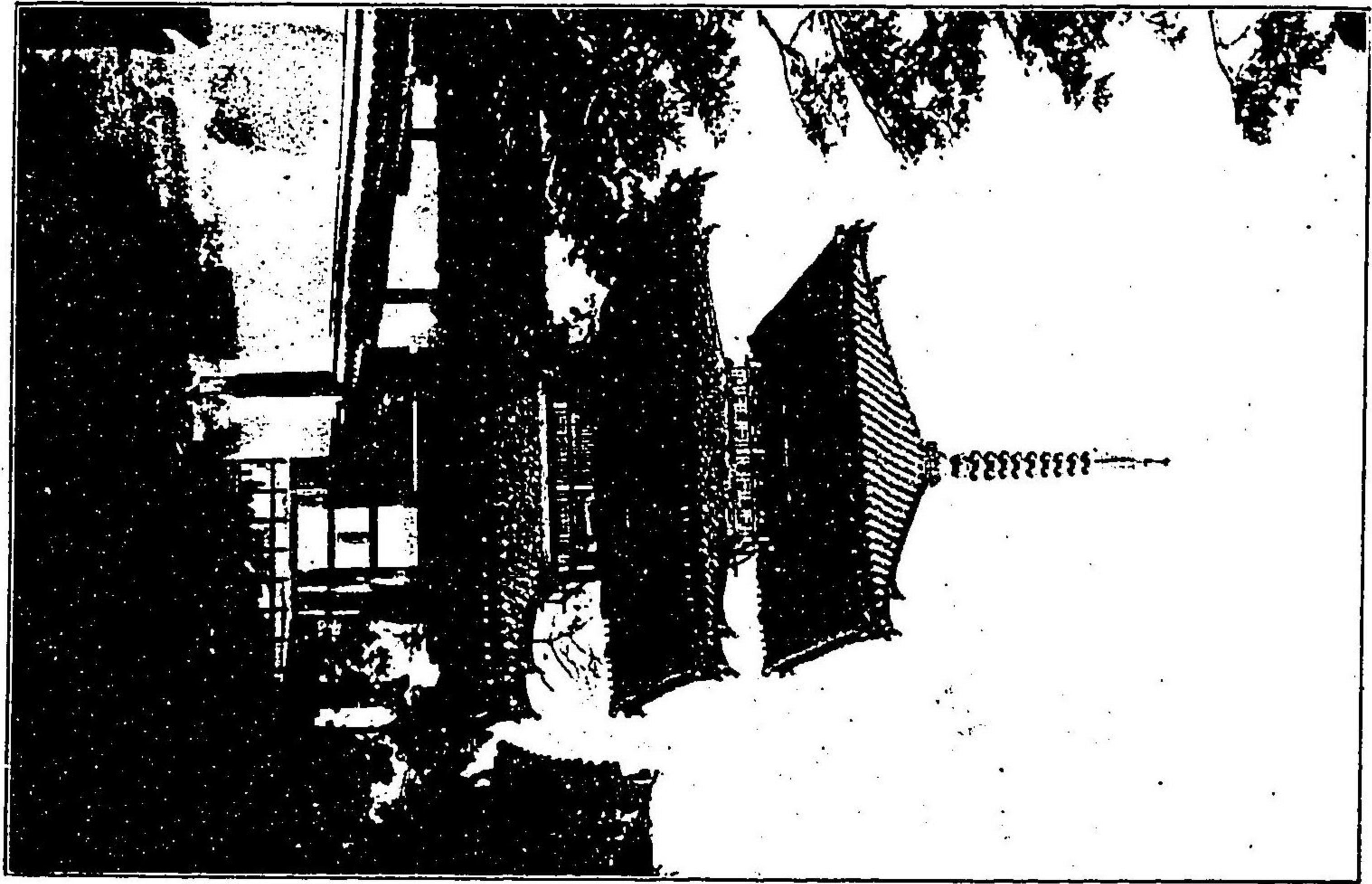
前期は天智天皇の頃より元正天皇の頃までを指す。この頃の建築は、唐風の形式を採用せし、佛堂の形式は唐時代のものを倣ったものがある。

唐代の建築は主として唐風の形式を採用せし、佛堂の形式は唐時代のものを倣ったものがある。唐の宮殿は古来の形式より、唐の宮殿に倣ったものがある。唐の宮殿は古来の形式より、唐の宮殿に倣ったものがある。

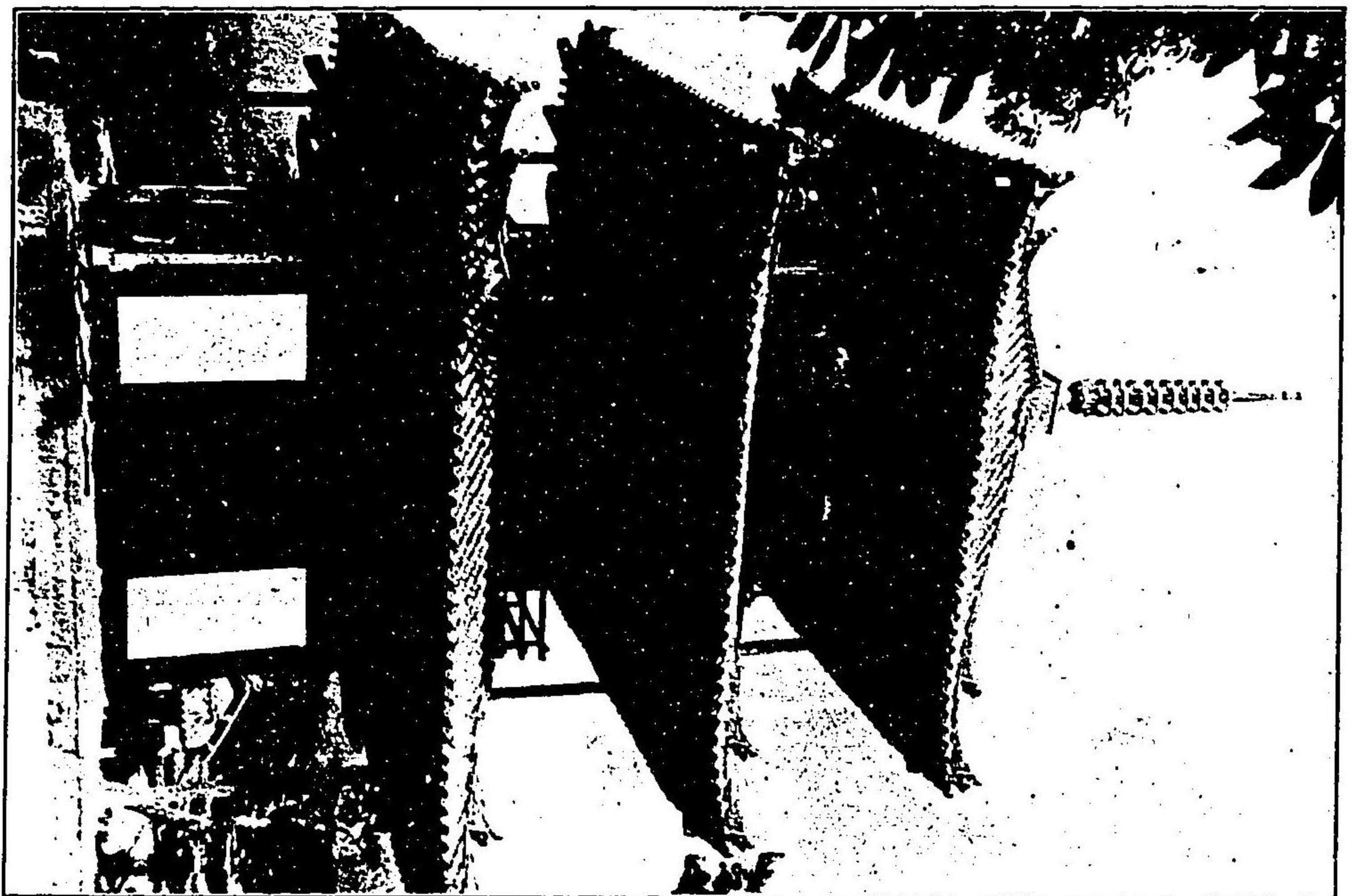


佛三百十二圖(法起寺三重塔)

佛三百十二圖(法起寺三重塔)



攝取三命聖塔圖(塔圖三十四三津)



攝取三命聖塔圖(塔圖三十四三津)

第三百十三圖(慈師寺東塔)



第三百十三圖(瀨崎寺東塔)

井は之を備ふと雖も、次期に生ぜる「支輪」は之を缺き、肘木の下面には法隆寺の雲肘木の痕跡と認むべき彫刻あり。其の他高欄の制軒の制皆全く斬新の意匠に成れり（第三百十四圖）。和輪殊にその水煙の意匠は頗る卓抜なり（第三百十五圖）。

この建築以外に於て之と同様の形式を具ふるものは、南都海龍王寺に藏する西大寺五重塔の雛形と稱するものなり。其の形式手法を検するに、全く藥師寺の塔と相符合し、人をして之を摸せしにあらざるやを疑はしむ。其の柱は五重に至るまで皆美しき「エンタシス」を有せり（第三百十六圖）。

當代の創建にかゝる著名の佛寺建築は、弘福寺（齊明天皇元年創建）、崇福寺（天智天皇七年創建）、龍蓋寺（天智天皇二年）、下野藥師寺（天智天皇九年）、興福寺（皇極天皇三年創立和銅三年今の地に移建）、當麻寺（白鳳十年？）、筑紫觀世音寺（天智天皇八年創建天平十七年竣功）、大安寺（熊凝精舎、百濟大寺、高市大寺、大官大寺の名あり、和銅三年奈良に移建）等なり。

宮殿建築に關しては多く知るべきなし。天智天皇は黒木の御所を造りしことあり、質素想ふべし。歴代の天皇都を遷すこと頻々たるを以て見るも、必ずや堅實宏壯の大宮殿の無かりしことを想はざるを得ず。太極殿等の文字屢傳記に現はるゝも、これ恐らくは平城筑都以後のもの、如き丹楹碧瓦の觀を備へたるものにあらざるべし。かの平城京は唐の制に準ひ多少之を改竄せしものにして、宮殿官衙の建築みな輪奐の美を盡したるものゝ如し。

第二節 本期（天平期）

當期は聖武天皇より平安遷都に至るまでの時期を包括す。其の建築の性質は殆ど全然唐式の直寫にして、圓滿秀美の域に進みたり。其の伽藍建築の制度は前期と相異なる所なしと雖も、一般に規模

壯大にして往々規矩を超え其の手法は前期より一步を進めて完全の域に達したり。即ち組物は完全なる「三つ斗」を生じ、「三手先」の構架法を生じ、小天井支輪の用法を生じ、虹梁の形漸く生じ來り、一般に木割強大にして雄健堅實の相を備へたり。

宮殿邸宅の建築も亦長足の進歩を致せるが如し。聖武天皇の御宇五位以上及び庶民の資力あるものは、瓦を以て屋を葺き、丹塗を以て之を塗らしめたるが如きは、其の例證なり。爾後瓦の應用弘く行はれたるが如し。

當期の末に於て本地垂迹の説起り、神佛混合の端緒を開きたり。寶龜二年藤原百川が勅を奉じて制定せる造殿儀式を按ずれば、當時の大中小社ともに千木葛緒木を上げたる神明造にして、屋蓋の輪廓はいまだ曲線形をなさざりしものなるが如しと雖も、所謂春日造の形式は春日神社(神護景雲二年)の創立と共に生じたるが如し。春日造と相並びて流れ造も亦殆ど同時に成立せるが如し。第三百十七第三百十八兩圖は河内國建水分神社なり。現在の社殿は建武年間の建築に屬し三社相並びて立てり。案より既に多量の佛式手法を加味すと雖も、なほ好箇の神社建築の標品たるを失はず。其の中央なるは即ち一間春日造にして左右なるは一間流れ通なり。奈良春日神社の神殿は今猶ほ純正なる春日造の形式を傳へたり。

南都東大寺(天平勝寶三年は當期第一の大伽藍にして兼ねて本邦第一の大伽藍なり。其の法華堂は當代建築の好遺物なり(第三百十九圖)。これが外形は古來屢修繕せられて古式を失ふもの多しと雖も、其の内部は依然として千餘年の舊觀を存し、柱、枋、拱、虹梁、墓股、天井の形式悉く當代の嗜好を表し、其の構架の方法亦能く當代建築の真相を現はせり(第三百二十圖)。

南都西大寺(天平神護元年創建)は東大寺に對する大伽藍にして、藥師及び彌勒の金堂あり。其の

神相とは、神を祀るに当り、その神を祀るべき所の形を定め、その形を造ることをいふ。神相の形は、神の性質に依りて異なる。神の性質を生じた神の神架法を生じた神の神相をいふ。神架法を生じた神の神相をいふ。神架法を生じた神の神相をいふ。神架法を生じた神の神相をいふ。

南都東大寺の神相も亦長足の進歩を遂げたるが如し。神架法の大寺の神相も亦長足の進歩を遂げたるが如し。神架法の大寺の神相も亦長足の進歩を遂げたるが如し。神架法の大寺の神相も亦長足の進歩を遂げたるが如し。

當勤の末に於て本地垂迹の説起り神相混在の神相を認めたる。神架法の大寺の神相も亦長足の進歩を遂げたるが如し。神架法の大寺の神相も亦長足の進歩を遂げたるが如し。神架法の大寺の神相も亦長足の進歩を遂げたるが如し。

南都東大寺天乎勝賢三年は當勤第一の大御座にして、神架法の大寺の神相も亦長足の進歩を遂げたるが如し。神架法の大寺の神相も亦長足の進歩を遂げたるが如し。神架法の大寺の神相も亦長足の進歩を遂げたるが如し。

